



第
515
集

青森県埋蔵文化財調査報告書 第515集

大
川
添
(2)
遺
跡
Ⅲ

大川添(2)遺跡Ⅲ

—津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

二
〇
一
二

青
森
県
教
育
委
員
会

2012年3月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第515集

大川添(2)遺跡Ⅲ

—津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2012年3月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成15年度から津軽ダム建設事業予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。そのうち、大川添(2)遺跡は、平成21・22年度に発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代中期・後期の竪穴住居跡をはじめとする遺構や、同時期の土器・石器等の遺物が発見されました。本報告書では、その調査成果をまとめました。

この成果が今後、埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成24年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 松田守正

例 言

- 1 本書は、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所による津軽ダム建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成 21・22 年度に発掘調査を実施した西目屋村大川添(2)遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査対象面積及び発掘調査面積は以下のとおりである。

大川添(2)遺跡 発掘調査対象面積 29,400㎡ 発掘調査面積 7,800㎡

- 2 遺跡の所在地及び青森県遺跡番号は以下のとおりである。

大川添(2)遺跡 青森県中津軽郡西目屋村大字川原平字大川添 青森県遺跡番号 343019

- 3 大川添(2)遺跡の発掘調査報告書は、既に 2 冊刊行(2006・2010)されており、本書は第 3 冊目となる。

- 4 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所が負担した。

- 5 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間 平成 21 年 9 月 1 日～10 月 30 日

平成 22 年 6 月 8 日～11 月 12 日

整理・報告書作成期間 平成 22 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 30 日

- 6 本報告書における調査区については以下のとおり呼称することとする

A 区、B 区東側→B 区、B 区西側→B 区西、C 区東側→C 区東、C 区西側→C 区

- 7 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター新山文化財保護主幹・最上文化財保護主事・小田川総括主幹が担当した。事実記載の担当は以下のとおりである。

(遺構) A 区：最上 B 区：新山・最上 B 区西：小田川 C 区東：最上

(遺物) 土器：最上 石器(剥片)：新山 石器(礫)：小田川 その他：新山

序説(第 1 編)及び総括(第 4 編)等については文末に執筆者名を記した。依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。

- 8 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

航空写真撮影 株式会社 シン技術コンサル

路線測量 株式会社 キタコン

周辺の地質・地形分析 青森県立郷土館主任学芸主査 島口 天

石器の石質鑑定 青森県立郷土館主任学芸主査 島口 天

火山灰分析 国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授 柴 正敏

種実同定分析 株式会社 バレオ・ラボ

放射性炭素年代分析 株式会社 加速器分析研究所

遺物の写真撮影 シルバーフォト、フォトショップいなみ

- 9 発掘調査成果の一部は、現地見学会、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。

10 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

11 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の方々と機関からご協力・ご指導を得た。(敬称略、順不同)

青森県立郷土館、西目屋村教育委員会、弘前市教育委員会、大鰐町教育委員会
高島 成術、中村 隼人、江上 幹幸

12 本書に掲載した地形図(遺跡位置図等)は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「川原平」及び西目屋村役場発行の25,000分の1地形図「西目屋村管内図」を複写して使用した。

13 計測原点の座標値は、世界測地系に基づき、平面直角座標第X系による。

14 挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。

15 全体図等の縮尺は、挿図毎にスケール等を示した。

16 遺構については、検出順にその種類を示す略号と通し番号を付した。なお遺構番号は整理作業段階で付け直したのものもあるが、発掘作業段階で用いた遺構の略号を()内に合わせて記した。

遺構に使用した略号は、以下のとおりである。

SI= 竪穴住居跡、SK=土坑、SR=土器埋設遺構、SN=焼土遺構、SQ=集石遺構

17 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。

18 遺構実測図の縮尺は、挿図毎にスケール等を示した。

19 竪穴住居跡のピット及び小ピットは、床面又は検出面からの深さを計測し、挿図の()内に示している。単位はcmである。表記は、竪穴住居跡・土坑等の遺構内部は「Pit」、遺構外部については「PIT」と区別した。

20 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。

21 基本土層・遺構内堆積土層の色調表記には、『新版標準土色帖 2006年度版』(小山正忠、竹原秀雄)を使用した。

22 遺物については、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。

23 遺物実測図には、挿図毎に1から通しの図番号を付した。

24 遺物実測図の縮尺は、原則として縄文土器・礫石器は1/3、土製品・石製品・剥片石器は1/2に統一し、挿図毎にスケール等を示した。

25 遺物観察表・計測表に使用した略号等については、各表毎に指示内容を示した。石器等の計測値は、長さ×幅×厚さ(cm)・重さ(g)の順に表記した。()内の数値は現存値である。

26 遺物写真には、遺物実測図と共通の図番号を付したが、縮尺は統一していない。

目 次

序		
例言		
目次・図版目次・写真目次・表目次		
第1編 序説		
第1章 調査の概要		
第1節 調査に至る経過	1	1
第2節 調査の方法	1	1
第3節 調査の経過	4	4
第2章 遺跡の環境	7	7
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	7	7
第2節 大川浜(2)遺跡B区の地形と地質	8	8
第3節 基本層序	10	10
第2編 検出遺構と出土遺物	12	12
第1章 遺跡全体の概要	12	12
第2章 遺構・遺物の凡例と分類	12	12
第1節 遺構について	12	12
第2節 遺物について	14	14
第3章 A区	17	17
第1節 土坑	17	17
第2節 その他の遺構	20	20
小ピット	20	20
第3節 遺構外出土遺物	20	20
1. 土器 2. 石器	20	21
第4章 B区	25	25
第1節 竪穴住居跡	25	25
第2節 土坑	37	37
第3節 土器埋設遺構	46	46
第4節 その他の遺構	48	48
1. 硬化面 2. 小ピット 3. 焼土跡	48	49
第5節 遺構外出土遺物	53	53
1. 土器 2. 石器 3. 石製品	55	61
第5章 B区西	69	69
第1節 竪穴住居跡	69	69
第2節 土坑	76	76
第3節 土器埋設遺構	78	78
第4節 その他の遺構	79	79
小ピット	79	79
第5節 遺構外出土遺物	79	79
1. 土器 2. 石器	81	81
第6章 C区東	85	85
第1節 土坑	85	85
第2節 その他の遺構	87	87
1. 小ピット 2. 焼土跡 3. 集石遺構	87	89
第3節 遺構外出土遺物	89	89
1. 土器 2. 石器	89	91
第3編 理化学的分析	93	93
第1章 火山灰分析	93	93
第2章 放射性炭素年代測定	94	94
第3章 種実同定分析	99	99
第4編 総括	103	103
第1章 検出遺構について	103	103
第2章 出土遺物について	106	106
第1節 土器	106	106
第2節 石器	108	108
第3節 石製品	110	110
第3章 まとめ	110	110
引用・参考文献	111	111
遺物観察表	112	112
写真図版	121	121
報告書抄録・奥付		

図版目次

図1	遺跡の位置と周辺の遺跡	7	図33	B区小ピット出土遺物	51
図2	大沢川流域の表層地質図	9	図34	B区焼土跡	52
図3	基本層序	10	図35	B区埋没沢	53
図4	調査区域図	11	図36	B区遺構外出土遺物(1)	54
図5	遺構の凡例	12	図37	B区遺構外出土遺物(2)	56
図6	石器の凡例	15	図38	B区遺構外出土遺物(3)	58
図7	A区遺構配置図	16	図39	B区遺構外出土遺物(4)	59
図8	A区土坑	18	図40	B区遺構外出土遺物(5)	60
図9	A区小ピット	19	図41	B区遺構外出土遺物(6)	62
図10	A区埋没沢	20	図42	B区遺構外出土遺物(7)	63
図11	A区遺構外出土遺物(1)	22	図43	B区遺構外出土遺物(8)	65
図12	A区遺構外出土遺物(2)	23	図44	B区遺構外出土遺物(9)	66
図13	A区遺構外出土遺物(3)	24	図45	B区遺構外出土遺物(10)	68
図14	B区遺構配置図	26	図46	B区西遺構配置図	69
図15	B区第1号竪穴住居跡・出土遺物	28	図47	B区西第1号竪穴住居跡・出土遺物	70
図16	B区第2号竪穴住居跡・出土遺物	29	図48	B区西第2号竪穴住居跡・出土遺物	72
図17	B区第2号竪穴住居跡出土遺物	30	図49	B区西第2号竪穴住居跡出土遺物	73
図18	B区第4号竪穴住居跡・出土遺物	32	図50	B区西第3号竪穴住居跡・出土遺物	74
図19	B区第4号竪穴住居跡出土遺物	33	図51	B区西土坑・出土遺物	76
図20	B区第5号竪穴住居跡	34	図52	B区西第1号土器埋設遺構・出土遺物	78
図21	B区第7号竪穴住居跡・出土遺物	35	図53	B区西小ピット・トレンチ配置図	80
図22	B区土坑(1)	39	図54	B区西遺構外出土遺物(1)	82
図23	B区土坑(2)	40	図55	B区西遺構外出土遺物(2)	84
図24	B区土坑(3)	41	図56	C区東遺構配置図	85
図25	B区土坑(4)	42	図57	C区東土坑・焼土跡・集石遺構・出土遺物	86
図26	B区土坑(5)	43	図58	C区東遺構外出土遺物(1)	88
図27	B区土坑出土遺物(1)	44	図59	C区東遺構外出土遺物(2)	90
図28	B区土坑出土遺物(2)	45	図60	C区東遺構外出土遺物(3)	92
図29	B区土坑出土遺物(3)	46	図61	竪穴住居跡・土坑の時期変遷	105
図30	B区第1号土器埋設遺構・出土遺物	47	図62	出土土器時期別比率	107
図31	B区第1・2号硬化面・出土遺物	48	図63	出土土器器種組成	108
図32	B区小ピット配置図	50	図64	三脚石器の比較	109

写真目次

写真1	遺跡全景・B区調査区全景	121	写真16	B区西土坑(BIV・CIV類)・土器埋設遺構	136
写真2	A区調査区全景・基本層序・土坑(AII・BIII類)	122	写真17	C区東基本層序・土坑・焼土跡・集石遺構	137
写真3	A区土坑(BIII類)	123	写真18	A区遺構外出土遺物	138
写真4	B区第1号竪穴住居跡	124	写真19	A区遺構外・B区竪穴住居跡出土遺物	139
写真5	B区第2号竪穴住居跡	125	写真20	B区竪穴住居跡・土坑出土遺物	140
写真6	B区第4号竪穴住居跡	126	写真21	B区土坑出土遺物	141
写真7	B区第5号・第7号竪穴住居跡	127	写真22	B区土坑・土器埋設遺構・小ピット遺構外出土遺物	142
写真8	B区土坑(AI・AII・AIII類)	128	写真23	B区遺構外出土遺物(1)	143
写真9	B区土坑(AIII・AIV・BII・CIII類)	129	写真24	B区遺構外出土遺物(2)	144
写真10	B区土坑(BIII・C類)	130	写真25	B区遺構外出土遺物(3)	145
写真11	B区土器埋設遺構・硬化面・焼土跡	131	写真26	B区遺構外出土遺物(4)	146
写真12	B区西第1号竪穴住居跡	132	写真27	B区西第2号竪穴住居跡出土遺物	147
写真13	B区西第2号竪穴住居跡	133	写真28	B区西土坑・土器埋設遺構・遺構外出土遺物	148
写真14	B区西第3号竪穴住居跡	134	写真29	C区東土坑・遺構外出土遺物	149
写真15	B区西土坑(BII・BIII類)	135	写真30	C区東遺構外出土遺物	150

表目次

表1	遺構番号変更表	13	表7	B区西土坑属性表	77
表2	出土土器型式一覧	14	表8	B区西小ピット属性表	79
表3	A区土坑属性表	16	表9	C区東土坑属性表	86
表4	A区小ピット属性表	19	表10	C区東小ピット属性表	86
表5	B区土坑属性表	36	表11	竪穴住居跡構造一覧表	103
表6	B区小ピット属性表	49	表12	土坑分類別一覧表	104

第1編 序説

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

平成14年に、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所から青森県教育庁文化財保護課へ、津軽ダム建設予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する協議の依頼があり、これを受けて同年7月に、津軽ダム工事事務所、県文化財保護課、西目屋村教育委員会の3者により、現地踏査と津軽ダム建設工事の工程・内容、津軽ダム建設予定地内の埋蔵文化財調査の進め方等についての協議が行われた。その後、県文化財保護課による分布調査が実施され、津軽ダム建設予定地常時満水区域内の埋蔵文化財調査対象範囲を12地区、総面積約768,000㎡と確定した。

発掘調査は、青森県埋蔵文化財調査センターが担当することとなり、大川添(2)遺跡は、平成15年度の確認調査から始まり、平成20・21・22年度に発掘調査を実施してきた。

なお、周知の埋蔵文化財包蔵地に対する土木工事のための発掘に関する通知は、平成21年9月に国土交通省津軽ダム工事事務所長から提出され、青森県教育委員会から事前の記録保存のための発掘調査を実施するよう指示がなされている。また、工事に伴う事前の準備や発掘調査時の安全管理及び設計変更に伴う調査区域の変更などについても、その都度関係諸機関と協議を行いながら調査を進めた。

第2節 調査の方法

1 発掘作業の方法

大川添(2)遺跡は遺跡範囲が広範囲にわたるため、平成15年度の調査から既存の県道及び村道を境界としてA・B・C区に区割りして実施することとした(図4参照)。平成15・20年度に確認調査を実施し、遺構・遺物が確認された範囲について本格的な発掘調査を実施することとした。平成21年度にはB区、平成22年度にはA区・B区・B区西・C区東の調査をそれぞれ実施することとなった。調査は、縄文時代の遺構調査に重点をおいて、集落の時期・構造等を把握できるような進め方をした。

(1) 測量基準点・水準点の設置・グリッドの設定

平成21年度の調査で測量業者に委託して設置した基準杭をもとに、調査区内に4m×4mのグリッドを設定した。各グリッドは、南から北にローマ数字とアルファベット(A～Y)、西から東に算用数字を付けて、その南西隅の組み合わせで呼称した。実測基準点となったグリッドの国土座標(旧日本測地系)は、ⅠA-OグリッドがX=57900.000・Y=-52400.000、ⅡA-25グリッドがX=58000.000・Y=-52300.000、ⅢA-50グリッドがX=58100.000・Y=-52200.000等である。測量原点には、測量業者のGPS測量機による3級基準点No2-1(世界測地系でX=58302.707・Y=-52020.019)、No2-3(X=58071.338・Y=-52260.245)、4級基準点No2-2(X=58186.890・Y=-52196.540)を使用した。レベル原点も、測量業者のGPS測量機によりBM.4(地盤高209.207m)、BM.5(地盤高214.694m)を与点として実測基準点3点(KBM.3・4・5)に設置し、必要に応じ実測基準点から移動して使用した。

(2) 基本層序

遺跡の基本層序については、表土から順にローマ数字を付けて呼称した。各区とも堆積状況に共通する部分が多いため、同じ土層番号を用いて分層した(図3参照)。詳細については本編第2章第3節「基本層序」を参照のこと。

(3) 表土等の調査

遺跡範囲内の表土等の調査は、トレンチ掘りにより確認したところ、畑作により表土が削平されたり、盛り土により土地が改変されたりしていることが明らかとなったため、重機を併用して掘削の省力化を図った。出土した遺物は、グリッド・層位毎に取り上げた。

(4) 遺構の調査

検出した遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的には4分割又は2分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加した。遺構内の堆積土層には算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構の平面図は、主に「遺構実測支援システム」(株式会社 CUBIC)を用いてトータルステーションによる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図、出土遺物の形状実測図などは、簡易遺り方測量等で縮尺1/10・1/20の実測図を作成した。遺構内の出土遺物については、遺構単位・遺構内地区単位で層位毎又は堆積土一括で取り上げたが、床面・底面及び炉の出土遺物については、トータルステーションや簡易遺り方測量により、必要に応じてドットマップ図・形状実測図等を作成した。

(5) 写真撮影

写真撮影は、原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及び1790万画素のデジタルカメラを併用し、遺構の検出状況、遺物の出土状況、発掘作業状況等について記録した。また、ラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影を業者に委託して行った。

2 整理・報告書作成作業の方法

平成21・22年度の調査の結果、A・B・C区合わせて縄文時代の堅穴住居跡8軒、土坑66基、土器埋設遺構2基、硬化面2箇所、小ピット142基、焼土跡4基、集石遺構1基が検出され、土器・石器等の遺物が段ボール箱で67箱出土した。縄文時代の集落の時期・構造等を解明するため、堅穴住居跡をはじめとする各遺構の構築時期と集落の様相等の検討に重点をおいて整理・報告書作成作業を進めた。

(1) 図面類の整理

遺構の平面図は、主にトータルステーションによる測量で作成したので、整理作業ではこれをもとにして、簡易遺り方測量で作成した堆積土層断面図や炉の実測図等との図面調整を行った。また、遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

(2) 写真類の整理

35mmモノクロームフィルムは、撮影順にネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは、35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付け、ハードディスク・DVD等に保存した。

(3) 遺物の洗浄・注記と接合・復元

縄文時代の遺構出土遺物及び包含層遺物を優先的に洗浄し、接合・復元作業を早期に進めるようにした。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等、直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層等の整理を怠らないようにした。

(4) 報告書掲載遺物の選別

遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構に伴って使用・廃棄された資料、遺構の構築・廃棄時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代（時期）・型式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

(5) 遺物の観察・図化

充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、観察表・計測表等を作成した。

(6) 理化学的分析

遺構内から出土した炭化物や土器付着炭化物の放射性炭素年代測定、炭化種実の同定を業者に委託して行った。また、埋没沢に堆積する火山灰の分析を、国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授 柴 正敏氏に依頼して行った。

(7) 遺構・遺物のトレース・版下作成

遺構・遺物の実測図やその他挿図のトレースは、「トレースくん」(株式会社CUBIC)を用いたデジタルトレースによって行った。実測図版・写真図版等の版下作成についても、デジタル機器で作業を進めた。

(8) 遺構の検討・分類・整理

遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。また、発掘調査後の整理作業に伴い、発掘調査時に付した遺構名に変更が生じたため、第2編第2章第1節の対応表に示す。

(9) 遺物の検討・分類・整理

遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。

(10) 調査成果の検討

遺構・遺物の検討結果を踏まえて、縄文時代の集落の時期・構造について検討・整理した。

第3節 調査の経過

1 発掘作業の経過

平成21年度は、9月1日からB区の調査を実施することとなり、10月30日までに予定の範囲を終了している（精査終了面積1,500㎡）。

平成22年度は、6月8日から11月12日までの期間で、A区・B区・B区西・C区東（合計6,300㎡）の調査を実施することとなった。

発掘調査体制は、以下の通りである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

(平成21年度) 所長	新岡 嗣浩
次長	工藤 大（平成22年3月定年退職）
総務GM	木村 繁博
調査第一GM	成田 滋彦（現 次長）
文化財保護主査	新山 隆男（現 文化財保護主幹：発掘調査担当者）
文化財保護主事	菅原 優太（発掘調査担当者）
調査補助員	一戸 佐知絵、太田 雄、佐藤 大介、中村 晃葉
(平成22年度) 所長	新岡 嗣浩（現 青森県総合社会教育センター所長）
次長	畠山 昇（平成23年3月定年退職）
総務GM	木村 繁博
調査第二GM	中嶋 友文（現 調査第一GM）
文化財保護主幹	新山 隆男（発掘調査担当者）
文化財保護主事	最上 法聖（発掘調査担当者）
調査補助員	坂本 真由美、鳴海 賛美、佐々木 香澄、對馬 綾子、 佐々木 隆英、平野 華奈

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員	村越 潔	国立大学法人弘前大学名誉教授・故人（考古学）
調査員	葛西 勲	前青森短期大学教授（考古学）
調査員	関根 達人	国立大学法人弘前大学人文学部教授（考古学）
調査員	鳥口 天	青森県立郷土館主任学芸主査（地質学）

(平成21年度)

- 8月下旬 調査の準備作業としてB区の立木伐採を開始した。その後、調査区全面にわたって表土剥ぎを重機によって進めた。
- 9月1日 表土剥ぎが済んだ区域から作業員を投入して遺構検出作業を進めた。作業は、平成20年度の確認調査で遺構が確認されていた調査区北西部から南西部へ向けて進めた。検出した遺構は、検出順に遺構番号を付して精査を進めた。
- 9月17日 調査員鳥口氏による、地形・地質に関する現地指導を受けた。
- 10月上旬 調査区東側は、堆積土（黒色土）が厚く堅穴住居跡と思われる遺構プランも検出したた

- め、関係機関で協議した結果、東側については来年度以降、調査することで合意した。
- 10月20日 調査指導員村越氏、調査員葛西氏・関根氏による現地指導を受けた。
- 10月22日 株式会社シソ技術コンサルに委託して、遺跡及び調査区域全体の空中撮影を行った。
- 10月30日 今年度予定されていた調査範囲（B区の一部）の調査を全て終了した。遺物は段ボール箱で13箱分出土した。

（平成22年度）

- 6月8日～ B区の調査を開始した。作業は、南東部から北東部に向けて進めるようにした。検出した遺構は、検出順に昨年度の続きになるように番号遺構番号を付して精査を進めた。
- 7月22日～ A区の調査を開始した。調査は北西側から南東側に向けて進めるようにした。検出した遺構は、A区の「A」を頭文字に入れて検出順に遺構番号を付して精査を進めた。
- 7月30日 B区の調査を全て終了した。遺物は段ボール箱で27箱分出土した。
- 8月24日～ C区東の調査を開始した。調査は東側から西側に向けて進めた。検出した遺構は、C区東の「C東」を頭文字に入れて検出順に遺構番号を付して精査を進めた。
- 9月21日 A区の調査を全て終了した。遺物は段ボール箱で7箱分出土した。
- 10月6日 B区西の立木伐採が終了したので、重機により表土の掘削を開始した。
- 10月8日 C区東の調査を全て終了した。遺物は段ボール箱で8箱分出土した。
- 10月18日 B区西に作業員を投入して遺構検出作業を進めた。検出した遺構は、B区西の「B西」を頭文字に入れて検出順に遺構番号を付して精査を進めた。
- 10月21日 調査員島口氏による、地形・地質に関する現地指導を受けた。
- 11月12日 B区西の調査を全て終了した。遺物は段ボール箱で12箱分出土した。これで、大川添(2)遺跡の調査は全て終了した。

2 整理・報告書作成作業の経過

平成22年度は、平成21年度に出土した遺物の整理を、平成23年度は、平成22年度に出土した遺物を中心に整理を行った。なお、本報告書には平成21・22年度分の遺物を一括して報告するため、遺物の検討・分類等は、平成23年度の報告書担当者が行い報告したことを付け加えておく。

整理・報告書作成体制は以下の通りである。

整理主体	青森県埋蔵文化財調査センター		
	文化財保護主幹	新山 隆男	（報告書担当者）
	文化財保護主事	最上 法聖	（報告書担当者）
	総括主幹	小田川 哲彦	（報告書担当者）
	調査補助員	平野 華奈、對馬 綾子、佐々木 隆英、大谷 望、 小野 なつき	
	整理作業員	大杉 喜盛、山下 真理子、菊池 雅美、工藤 美由紀	

（平成22年度）

- 11月下旬～ 写真類の整理作業、図書類の整理作業、遺物の洗浄・注記作業を行った。
- 12月中旬 炭化物のサンプル等を整理して、株式会社加速器分析研究所へ理化学的分析を委託した。

- 1月下旬～ 平成21年度調査分の遺物の整理作業を開始した。遺物（土器）は洗浄・注記作業が終了した遺構・地区から、順次接合・復元作業を進めた。また、選別した遺物（石器）の実測を併せて行った。

（平成23年度）

- 4月上旬～ 平成22年度分の遺物を中心に整理作業を開始した。遺物は洗浄・注記作業が終了した遺構・地区から、順次接合・復元作業を進めた。併せて、遺構の検討・整理を開始した。また、遺構図面の修正作業も開始した。
- 5月上旬～ 遺物の接合・復元作業を集中的に行った。この間に、土器・石器の報告書掲載遺物の選別作業を行った。さらに、遺物の検討・分類・整理作業を進め、遺物観察表の作成を開始した。
- 6月上旬～ 選別した報告書掲載遺物（土器）の実測・拓本等の図化作業を行った。
- 8月上旬～ 火山灰分析を、国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授 柴 正敏氏に依頼した。また、土壌サンプルのフローテーション・種実選別を行った。
- 9月下旬～ 地形・地質に関する分析を青森県立郷土館主任学芸主査島口 天氏に依頼した。また、選別した種実（炭化種実中心）の同定を（株）パレオ・ラボに委託した。
- 10月上旬～ 選別した報告書掲載遺物（石器）の実測・図化作業を行った。
- 11月下旬～ シルバーフォト・フォトショップいなみに委託して、報告書掲載遺物の写真撮影を行った。また、調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。
- 12月上旬～ 図化作業が完了した遺物のトレースを行った。
- 1月下旬～ 原稿・版下等が揃ったので、報告書の割付・編集を行い、印刷業者を入札・選定して入稿した。
- 3月28日 3回の校正を経て、報告書を刊行した。最後に記録類・出土品を整理して収納をした。

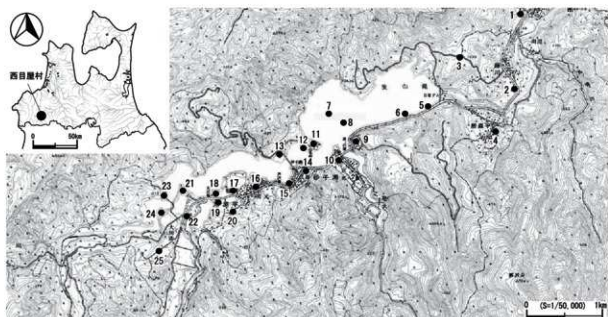
（新山）

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

西目屋村には現在35カ所の遺跡が登録（平成23年12月現在）されている。遺跡の多くは、美山湖右岸側の川原平地地と呼ばれる河岸段丘上に集中しているが、昨年新たに左岸側の大川添(3)遺跡、鬼川辺(1)・(2)・(3)遺跡が新規登録となっている。右岸側では大川添(4)遺跡が新規登録された。

地図上（図1）に見られる芦沢橋を境に北東側を砂子瀬地域、南西側を川原平地地として従来登録されていた美山湖右岸側の遺跡を概観してみる。砂子瀬地域は、北東側から水上(3)遺跡、水上(4)遺跡、水上(2)遺跡、水上(1)遺跡、砂子瀬村元遺跡、砂子瀬遺跡、芦沢(1)遺跡、芦沢(2)遺跡、以上8つの遺跡が周知されている。なお、平成18年度に実施された調査により、水上(2)・(3)・(4)遺跡は新規登録されており、従来の水上遺跡は水上(1)遺跡に名称が変更となっている。川原平地地は、南西側から、焼山遺跡、大川添(2)遺跡、大川添(1)遺跡、川原平(2)遺跡、川原平(3)遺跡、川原平(1)遺跡、川原平(4)遺跡、川原平(5)遺跡、以上8つの遺跡が周知されている。これらの遺跡は、すべて縄文時代の遺跡として登録されており、今後の調査によって美山湖周辺地域における縄文時代の様相が明らかになることが期待される。（新山）



番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
1	31006	稲葉(2)遺跡	西目屋村大字村市稲葉	平安	敷布地	11	31029	芦沢(1)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字芦沢	縄文	敷布地
2	31021	瀬の上遺跡	西目屋村大字砂子瀬字瀬の上	縄文(後・終)	敷布地	15	31021	芦沢(2)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字芦沢	縄文	敷布地
3	31067	芦沢遺跡	西目屋村大字砂子瀬字上	縄文(前)	敷布地	16	31022	川原平(1)遺跡	西目屋村大字川原平字芦沢・平安	縄文	敷布地
4	31013	焼山遺跡	西目屋村大字赤森字焼山	縄文	敷布地	17	31023	川原平(2)遺跡	西目屋村大字川原平字編	縄文(中・後)	敷布地
5	31028	水上(3)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字水上	縄文(中)	敷布地	18	31009	川原平(3)遺跡	西目屋村大字川原平字編	縄文(後・終)	敷布地
6	31029	水上(4)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字水上	縄文(後・終)	敷布地	19	31010	川原平(4)遺跡	西目屋村大字川原平字編	縄文(後)	敷布地
7	31011	砂子瀬村元遺跡	西目屋村大字砂子瀬字村元	縄文(中)	敷布地	20	31016	川原平(5)遺跡	西目屋村大字川原平字編	縄文	敷布地
8	31025	水上(2)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字水上	縄文(中)	鬼焼跡	21	31019	大川添(1)遺跡	西目屋村大字川原平字大川添	縄文	敷布地
9	31017	水上(1)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字水上	縄文(中・後)	鬼焼跡	22	31019	大川添(2)遺跡	西目屋村大字川原平字大川添	縄文	敷布地
10	31009	砂子瀬遺跡	西目屋村大字砂子瀬字水上	縄文(中・後・終)	鬼焼跡	23	31030	大川添(3)遺跡	西目屋村大字川原平字大川添	縄文	鬼焼跡
11	31032	鬼川辺(1)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字鬼川辺	縄文	敷布地	24	31033	大川添(4)遺跡	西目屋村大字川原平字大川添	縄文	敷布地
12	31033	鬼川辺(2)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字鬼川辺	縄文	敷布地	25	31011	焼山遺跡	西目屋村大字川原平字大川添	縄文	敷布地
13	31024	鬼川辺(3)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字鬼川辺	縄文	敷布地						

〔青森県教育委員会 2009『青森県遺跡地図』25〕

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

第2節 大川添(2)遺跡B区の地形と地質

青森県立郷土館 島口 天

大川添(2)遺跡は、大沢川が美山湖に合流する付近の大沢川左岸側に広がる河成段丘面上に位置する。本遺跡のB区は遺跡内南東部にあり、標高は205～210m、南側から東側にかけて大沢川と急崖で接し、北東側は大沢川へ向かって急斜面となっている。B区内には微地形がみられ、南東端中央部から中心部を通り北へ向かって非常に緩やかに下る小さな谷状地形が認められた。この谷状地形より北東部に礫が密集して見られ、礫は大きいものでは長径1m近いものがあるが、ほとんどは長径50cm以下の亜円礫で、その大きさは一定ではなく、礫間はシルトや砂によって充填されていた。また、礫の中には花崗閃緑岩の巨礫が高い割合で含まれていた。花崗閃緑岩は、砂子瀬遺跡や水上遺跡等でも礫としてみられたが数は少なく、本遺跡のように高い割合でみられる理由として大沢川が供給源となっていることが考えられた。

大沢川流域の表層地質について図2に示し、分布する地層や岩石の詳細について根本(2004)を引用して述べる。

大沢川の上流部にはジュラ系のスレート、白亜系の花崗岩類、新第三系の安山岩溶岩・安山岩質火砕岩・泥岩が分布する。新第三系は、下位より尻高沢層、藤倉川層と呼ばれる下部中新統である。

スレートは暗灰～青灰色で、一部は千枚岩化している。全般にホルンフェルス化が顕著である。チャート、砂岩、凝灰岩の岩塊を含む。

花崗岩類は、朝日股・西股沢花崗岩類と呼ばれ、主に中～粗粒の角閃石-黒雲母花崗閃緑岩からなる。98.3±4.9～53.9±2.7MaのK-Ar年代が報告されている(金属鉱業事業団、1982)。

安山岩溶岩は、尻高沢層の一部を構成するものと藤倉川層の一部を構成するものがある。前者は主として変質の著しい暗緑紫色・暗緑色・灰褐色あるいは赤褐色の安山岩溶岩で、普通輝石安山岩とカンラン石含有普通輝石安山岩とカンラン石含有普通輝石安山岩及び玄武岩質安山岩が主体をなし、緑泥石化を受けている。緻密で斑晶が目立たず、一部は自破砕溶岩となっている。後者は、斜長石及び輝石の斑晶を含み塊状～自破砕構造を有する暗灰～暗緑灰色の輝石安山岩溶岩である。

安山岩質火砕岩は、藤倉川層の一部を構成するものと、藤倉川層の主部を構成するものがある。前者は、上記安山岩溶岩と同質の輝石安山岩質火山砕屑岩である。後者は、主として緑～紫緑色の火山礫凝灰岩からなり、淡緑色凝灰岩及び暗緑灰～暗緑色の凝灰角礫岩を伴う。凝灰角礫岩に含まれる火山岩塊は拳～人頭大で、斜長石及び輝石の斑晶を含む輝石安山岩よりなる。火山礫凝灰岩は軽石を含む。

泥岩は、藤倉川層の一部を構成し、灰～黒色の成層した凝灰質泥岩よりなる。しばしば炭質物を含み、砂岩や礫岩の薄層を挟むこともある。

上記のように、大沢川上流部には花崗閃緑岩が分布している。よって、B区でみられた礫が密集していた所は大沢川によって上流部から運搬され堆積した地層で、層相から土石流堆積物と考えられる。礫が密集していない所にはシルト質の褐色土が堆積しているが、それを掘り下げるとすぐに礫が密集する層が現れる。本遺跡と同様に美山湖周辺に分布する砂子瀬遺跡や水上遺跡でも同様のことが確認されており、トレンチ断面で礫や褐色土の堆積状況を観察すると、複数回に亘って流れてきたと思わ

れる土石流堆積物が複雑に堆積し、それらの間に形成されたくぼ地や谷状地形に褐色土が堆積していた。よって、本遺跡B区でも同様のことが考えられ、褐色土の層厚は複数の土石流堆積物が形成した地形の影響を受け、場所によって異なる。

【引用文献】

鎌田耕太郎・根本直樹（2003）5万分の1地形分類図「川原平」。土地分類基本調査「川原平」、青森県農林水産部農村整備課。p.17-29。

金属鉱業事業団（1982）昭和56年度広域調査報告書「西津軽地域」。通産省資源エネルギー庁、pp.167。

水野 裕・堀田報誠（2003）5万分の1地形分類図「川原平」。土地分類基本調査「川原平」、青森県農林水産部農村整備課。p.13-16。

根本直樹（2004）5万分の1表層地質図「中浜・田代岳」。土地分類基本調査「中浜・田代岳」、青森県農林水産部農村整備課。p.14-26。

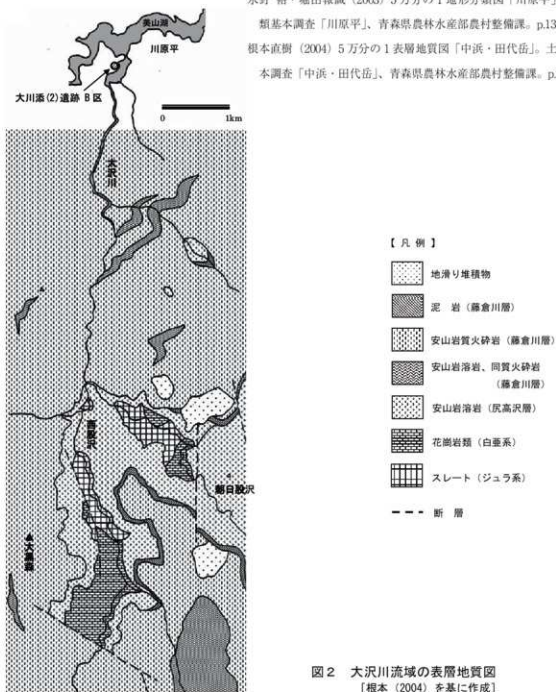


図2 大沢川流域の表層地質図
〔根本（2004）を基に作成〕

第3節 基本層序

大川浜(2)遺跡の基本層序は、基本的に大川浜(2)遺跡Ⅱ報告書(青森県教育委員会:2010)に準拠している。ただし、各区において含有物に若干の違いが見られるため、アルファベット小文字で細分している層もある。基本的な地形の特徴として、B区の西側ラインに小規模な段丘があり(図61参照)、竪穴住居跡などの遺構が確認されたB区は段丘の下段、A区・B区西・C区東は段丘の上段に立地する。なお、基本層序観察地点は、調査区域図(図4)に位置を示した。

(A区:基①)

基本層序は沢1として調査した段丘面を示した。段丘面や埋没沢に堆積するやや濁った感じの礫層(Ⅲa・b層)が地山の礫層(V層)の上に堆積している。上段では地山ローム層(Ⅳ層)の堆積も確認された。なお、A・B区埋没沢・C区基本層序に堆積するⅡa層については、火山灰が混入している可能性があったため、土壌サンプルを採取して分析を実施した。その結果、十和田八戸火山灰起源の火山ガラス混入が認められた。同火山ガラスは再堆積したものと判断されている(第3編第1章)。

(B区:基②・③)

調査区南東側(基本層序②)と北東側(基本層序③)を示した。いずれも段丘下段に属する。地形は南東側から北東側に緩やかに傾斜している。Ⅲ層直下は、南東側が地山ローム層(Ⅳ層)、北東側は礫層(V層)である。

(B区西:基④)

段丘上段に属する。第2号竪穴住居跡付近の基本層序を示した。調査区全面に地山ローム層(Ⅳ層)が厚く堆積している。

(C区東:基⑤)

段丘上段に属する。調査区の中ではやや標高が低くなる東側低地部分の基本層序を示した。調査区全面に地山ローム層が厚く堆積している。(新山)

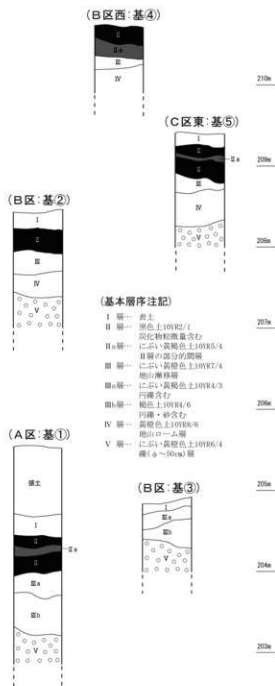


図3 基本層序



図4 調査区域図

DXF
X=58720

WU
X=58680

WK
X=58540

WA
X=58600

VP
X=58560

WF
X=58520

VIU
X=58480

VIK
X=58440

VIA
X=58400

VP
X=58360

VF
X=58320

IVU
X=58280

IVK
X=58240

IVA
X=58200

III P
X=58160

III F
X=58120

第2編 検出遺構と出土遺物

第1章 遺跡全体の概要

大川添(2)遺跡は、平成15年度に行われた確認調査によって調査が必要とされたのがA・B・C区である。その後、平成20年度の調査において、A区(北側)・B区(東側：一次調査)・C区(西側)については調査を終了し、その成果を報告済みである(青森県教育委員会：2010)。

今回報告するのは、A区(南側)・B区(東側：二次調査)・B区(西側：以下B区西と呼称する)・C区(東側：以下C区東と呼称する)ということになり、本報告をもって大川添(2)遺跡については全ての報告を終了することとなる。なお、関係機関で協議した結果、一部、急傾斜地のため調査不可能になった範囲や、周囲の調査の結果を受けて調査不要となった範囲などがある。

検出遺構は、A・B・C区合わせて竪穴住居跡8軒、土坑66基、土器埋設遺構2基、その他の遺構として、硬化面2箇所、小ピット142基、焼土跡4基、集石遺構1基である。いずれも縄文時代の遺構であり、住居跡が検出されたのはB区・B区西のみで、A・C区東からは確認されなかった。

出土遺物は縄文時代のものがほとんどで、遺構内からの出土が最も多かった。遺構外からの出土遺物は、A・B区は埋没沢から、C区東は東側低地部分からの出土が多かった。古代・中世の遺物は確認されなかった。近世・近代の遺物は少量出土しているが、いずれも小破片のため図示しなかった。

第2章 遺構・遺物の凡例と分類

本報告書における遺構・遺物の凡例・分類・計測箇所・定義等について本章にまとめた。なお、遺構番号が変更になったり欠番になったりしたものについては、表1にまとめて記載した。

第1節 遺構について

1 竪穴住居跡

本遺跡から検出された竪穴住居跡は、一部、後世の耕作等により竪穴部が欠損していると思われるものもあるが、全て竪穴住居跡と捉え、詳細についてはそれぞれの竪穴住居跡の事実記載に示す。なお、調査時には土坑などで調査した遺構が整理段階において検討した結果、竪穴住居跡として報告するものもある。どの遺構が変更になったかは、遺構番号変更表(表1)に示した。

2 土坑

土坑は検出数が多かったため、以下のような平面形と断面形の組み合わせによる分類を行い、その分類毎に記述することとする。なお、個々の土

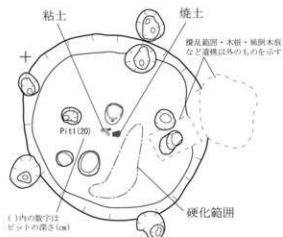


図5 遺構の凡例

坑の位置・規模・遺物出土状況等の基礎データについては、それぞれの調査区の報告章において「土坑属性表」にまとめることとする。

(平面形)

- A類：円形 底面形が円形に近い形状のもの
 B類：楕円形 底面形が円形を長伸したような形状のもの
 C類：不整形 形状が円形から崩れているものや、重複等で全体形がはっきりしないもの

(断面形)

- I類：フラスコ形 開口部より底面の最大径が大きい、フラスコ状・袋状・台形状のもの
 (開口部崩落により箱状の形状になったと考えられるものも含める)
 II類：深箱形 壁がほぼ垂直に立ち上がり、底径：深さが10：4以上のもの
 III類：浅箱形 壁がほぼ垂直に立ち上がり、底径：深さが10：4以下のもの
 IV類：不整形 I～III類に含まれない不整形のものや、重複等で全体形がはっきりしないもの

表1 遺構番号変更表

調査区	現場遺構名	報告書遺構名
B区	SI-01・SK-05	第1号竪穴住居跡
	SI-02	第2号竪穴住居跡
	SI-03	第1号硬化面
	SI-04	第4号竪穴住居跡
	SI-05	第5号竪穴住居跡
	SI-06	第2号硬化面
B区西	SK-14	第7号竪穴住居跡
	SI-01	第1号竪穴住居跡
	SI-02	第2号竪穴住居跡
	SI-03	第3号竪穴住居跡

※土坑・ピット等の遺構番号変更については、各区(各章)の表に示した。

3 土器埋設遺構

住居跡や土坑などの遺構に伴わない、当時の生活面もしくは地山層を掘り込んで土器を埋設したと思われる遺構を本遺構として取り扱うこととする。

4 その他の遺構

- 1～3に当てはまらない遺構について、本報告書では次のような呼称で取り扱うこととする。
- ・硬化面：掘り方内部に土壌を充填し、踏み固めるなどして固めた面を有する遺構。
 - ・焼土跡：住居跡や土坑などの遺構に伴わない、当時の生活面もしくは地山層に焼けた痕跡のある遺構。
 - ・小ピット(柱穴)：住居跡や土坑などの遺構に伴わない柱穴状の遺構。なお、個々の小ピットの位置・規模・出土遺物等の基礎データについては、それぞれの調査区の報告章において「小ピット属性表」にまとめることとする。

第2節 遺物について

1 土器

土器は、主として遺構の構築・廃絶時期などを示す資料、全体的な形状を把握することが可能な復元資料、同類の中で代表的な資料、土器型式・器種・文様などがわかる資料、類例が稀少な資料などを選択して掲載した。

本報告書で使用した土器型式、対応する時期区分などについては表2にまとめた。各土器の土器型式、帰属時期、器種、計測値、文様の特徴などについては巻末の観察表に示した。土器の付着物・塗布物については、観察表に表記するとともに、実測図にその範囲を網掛けで示した。なお、土器の付着物・塗布物の残存範囲が極小で、かつ小破片の資料については、観察表に表記するのみとした。観察表における土器の計測値は、() 表記が破損している場合の現存値、[] 表記が復元推定値を示す。

表2 出土土器型式一覧

縄文時代	中期	前葉	円筒上層b式
		中葉	円筒上層c式
			円筒上層e式
		後葉	椀林式
			最花式
	末葉	大木10式併行	
	後期	初頭	馬立式
		前葉	十腰内I式
		後葉	十腰内V群併行
	晩期	前葉	大洞B式
大洞BC式			
後葉		大洞A・A'式	
弥生時代	前期		砂沢式

2 石器

石器は、定形石器を中心に選択し、特徴のある不定形石器・石核なども一部取り上げた。大きく分けて剥片石器類・石斧類・礫石器類に分類し、それぞれを類型ごとに器種をさらに細分して下記に示した。なお、観察表における() 表記は、破損品の現存値を示す。

(1) 剥片石器類

石鏃 5cm未満の大きさで、先端部を鋭利に加工したもの

石槍 5cm以上の大きさで、一端もしくは両端を鋭利に加工したもの

石篋 ほぼ全面にわたって加工調整が施された、主に撥形に成形されたもの

石錐 一端に加工調整して、錐部を作り出しているもの

石匙 つまみ状の小突起をもち、主に片面からの加撃によって刃部が作られるもの

楔形石器 打点が対に複数存在し、階段状剥離が見られる両極加撃痕跡のあるもの

三脚石器 平面形が三角状で、断面形が台形状になるもの

搔器 剥片の先端部に急角度に調整された刃部をもつもの

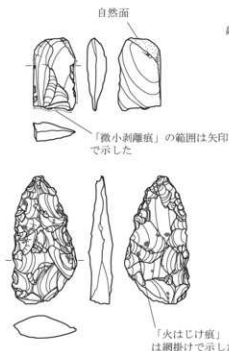
削器 剥片の側縁部に連続的な調整によって刃部を作り出しているもの

石核 素材剥片を作り出した後の原生素材

二次調整のある剥片 調整加工が施されている、定形石器の未製品や失敗品・破損品と考えられるもの

微小剥離痕のある剥片 何らかの使用により、微小剥離(剥離幅1mm以下)がついたと考えられる剥片

剥片石器類



石斧・礫石器類

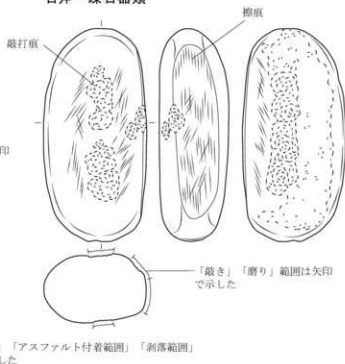


図6 石器の凡例

(2) 石斧類

磨製石斧 器面全体を研磨し、器体の端部に刃部を形成するもの

(3) 礫石器類

磨り石 礫を素材とし、器面及び縁辺に磨痕・擦痕が見られるもの

敲き石 礫を素材とし、器面及び縁辺に敲打痕が見られるもの、「磨り」「敲き」の複合機能をもつものも本類に入れた

凹み石 礫を素材とし、片面または両面の一部に凹みが見られるもの

石錘 礫を素材とし、両端に加工が施されているもの

加工礫 礫を素材とし、片面1カ所に加工が施され剥離しているもの

石皿・台石類 礫を素材とし、器面中央部が凹んだり、器面全体が平坦であったりする皿形のもの

砥石 礫を素材とし、器面全体が研磨されるものや、筋状の研磨痕があるもの

3 その他の遺物

石製品

- ・有孔石製品 穿孔が施されており、小型で垂飾等の機能が想定されるもの
- ・円盤状石製品 円形の扁平礫を素材とし、全体を研磨して円盤状に成形しているもの

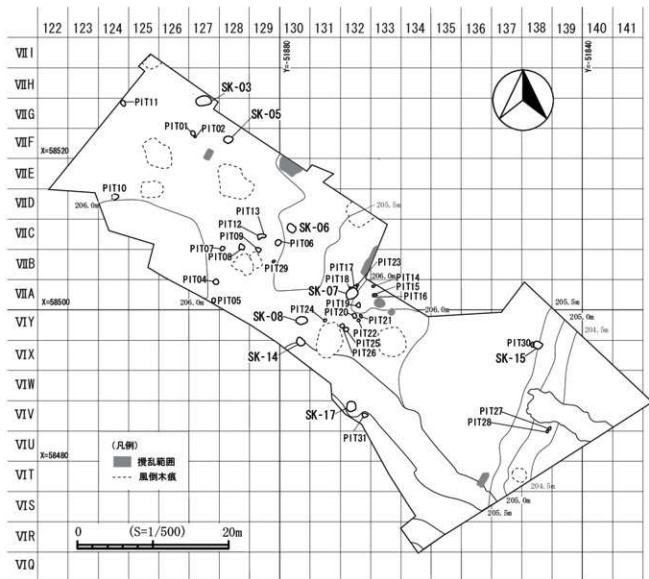


図7 A区遺構配置図

表3 A区土坑属性表

遺構名	分類	計測値		グリッド	遺物出土状況		遺構 形状	遺物 種類	写真 回数	新旧関係	備考
		開口部 (cm)	底面部 (cm)		土器	石器					
第1号土坑	平成20年度調査、平成21年度報告 (青森県教育委員会2010「砂子瀬遺跡Ⅲ・大川遺(2)遺跡Ⅲ」)										
第2号土坑	平成20年度調査、平成21年度報告 (青森県教育委員会2010「砂子瀬遺跡Ⅲ・大川遺(2)遺跡Ⅲ」)										
第3号土坑	BⅡ	206×126	148×84	32	VE6-127	-	-	008	-	写真2	主軸方位N83° E 段基年代測定
第4号土坑	掘乱に変更										
第5号土坑	AⅡ	124×97	28×24	54	VF1-128	-	-	008	-	写真2	
第6号土坑	BⅡ	128×102	104×78	20	VB1-130	-	-	008	-	写真3	主軸方位N51° W
第7号土坑	BⅡ	166×130	152×112	10	VA4-132	-	-	008	-	写真3	主軸方位N56° E
第8号土坑	BⅡ	154×104	108×56	36	VI1-130	-	-	008	-	写真3	主軸方位N6° E
第9号土坑	掘乱に変更										
第10号土坑	掘乱に変更										
第11号土坑	掘乱に変更										
第12号土坑	掘乱に変更										
第13号土坑	自然窪地に変更										
第14号土坑	BⅡ	120×92	84×60	18	VI1-130	-	-	008	-	写真3	主軸方位N50° W
第15号土坑	AⅡ	120×108	52×36	40	VI1-136	-	-	008	-		
第16号土坑	自然窪地に変更										
第17号土坑	AⅡ	140×134	96×84	48	VI1-132	-	-	008	-	写真2	段基年代測定

第3章 A区

概要

A区は遺跡の北東部、県道28号線（岩崎西目屋弘前線）の北側に位置している。本調査を実施した調査区はVIQ～VII-122～142グリッドにあたり、国土座標ではX=58464～58532、Y=-51912～51832にあたる。規模は、最大長約75m、最大幅約35m、面積は約1700㎡であり、標高は204.0m～206.0mの河岸段丘上に立地している。調査区の南東部には小規模な段丘面を有し、それを境に北西部が上段、南東部が下段となる。

調査は、平成15・20年度に確認調査が実施され、平成20年度の調査では土坑2基が検出され報告済みである（青森県教育委員会：2010）。今回報告する平成22年度の調査はA区の東側にあたり、隣接する大川添(1)遺跡と大川添(2)遺跡B区から多数の遺構・遺物が発見されたことにより、両調査区に挟まれる範囲について本調査を実施することとなった。なお、A区中央部から南西側については、トレンチ6本（約400㎡）による確認調査を実施したが、表土中から遺物が数点出土したのみで遺構は確認されなかったため、それ以上調査区を拡張しなかった。

調査の結果検出された遺構は、縄文時代を中心とする土坑8基、ピット30基である。

出土遺物は、縄文時代の土器・石器がほとんどである。遺構外からの出土が多く、埋没沢から出土したものが多数を占める。

第1節 土坑（図8、表3、写真2・3）

土坑は8基検出した。土坑の平面形および断面形により分類すると、AⅡ類とBⅢ類の2類型に分けられる（第2編第2章第1節参照）。AⅡ類は3基、BⅢ類は5基確認された。なお、調査当時15基を土坑として精査したが、整理作業の段階で風倒木痕および攪乱等に変更したものも多い。個々の土坑における基礎データ及び図版番号、写真番号、変更、欠番などの詳細については表3にまとめた。

AⅡ類

AⅡ類に属する土坑は第5号・第15号・第17号土坑の3基である。

【検出状況】調査区全体にわたって散在的に分布している。第5号土坑と第17号土坑は台地平坦部、第15号土坑は調査区東側の段丘縁辺部に位置している。確認面は基本層序第Ⅲb層上面・第Ⅳ層上面である。

【重複】第5号土坑は、上部の一部分を現代の攪乱により破壊されている。第17号土坑は沢2の埋没後に掘り込まれている。

【規模】土坑の規模は、第5号土坑と第15号土坑が開口部径約100～120cm、底面部径約25～50cm、第17号土坑が開口部径約140cm前後、底面部径約90cm前後である。確認面からの深さは、いずれも40～55cmの範囲内に収まる。

【堆積土】第5号・第17号土坑の堆積土は、黒褐色土や暗褐色土を主体として5層以上に分けられ、第15号土坑の堆積土は黒褐色土が主体の単層である。第17号土坑は自然堆積の様相を呈しており、第1層が基本層序第Ⅱa層に類似する暗褐色土、第3層が炭化物粒混入の黒褐色土である。

【出土遺物】なし。

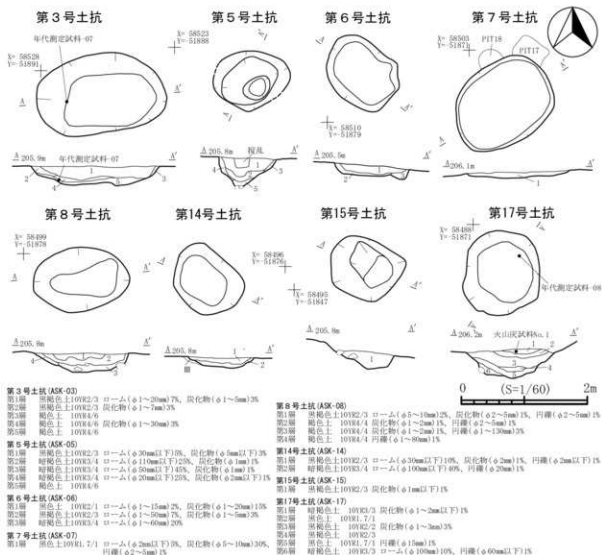


図8 A区土坑

【その他】帰属時期は遺物が出土していないため特定できない土坑がほとんどである。第17号土坑については、第3層中から検出した炭化物の放射性炭素年代測定を行なった。年代測定の目的としては、遺物が出土しなかったため遺構の年代を推測する目的と、基本層序第Ⅱa層に類似する第1層の暗褐色土の堆積年代を推測する目的とがあったが、年代測定の結果、1σ1814calAD~1853calAD(24.7%)、2σ1810calAD~1894calAD(57.5%)を示した(第3編第2章参照)。

BⅢ類

BⅢ類に属する土坑は第3号・第6号・第7号・第8号・第14号土坑の5基である。

【検出状況】調査区の中央部および西側に偏って分布している。第3号土坑は調査区北西側の台地縁辺部に位置している。確認面は基本層序第Ⅲb層上面・第Ⅳ層上面である。

【重複】第7号土坑はPIT17・18と重複し、第7号土坑の方が新しい。また、第14号土坑は沢2の埋没後に掘り込まれている。

【規模】第3号・第7号・第8号土坑は長軸約150~200cm、短軸約100~130cmで、第6号・第14号土

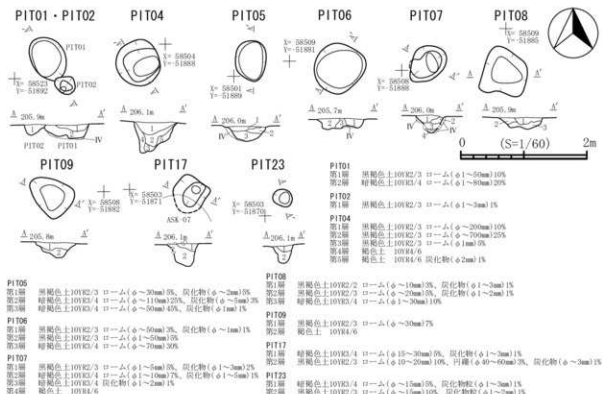


図9 A区小ピット

表4 A区小ピット属性表

遺構名	計測値		グリッド	備考
	幅口径(cm)	底面径(φ)深さ(cm)		
PIT01	72 × 54	54 × 45	22	ⅤF-127 PIT02より古
PIT02	34 × 29	12 × 9	36	ⅤF-127 PIT01より新
PIT03 埋積土				
PIT04	71 × 66	43 × 26	44	ⅤA-127 ⅤB-127
PIT05	65 × 49	66 × 38	22	ⅤA-127
PIT06	83 × 80	74 × 58	18	ⅤC-129 ⅤA-130
PIT07	69 × 51	32 × 16	33	ⅤB-128 ⅤC-128
PIT08	25 × 20	50 × 39	21	ⅤB-128 ⅤC-128
PIT09	72 × 56	40 × 37	14	ⅤB-129 ⅤC-129
PIT10	70 × (42)	43 × (35)	14	ⅤB-124
PIT11	84 × 55	54 × 34	29	ⅤG-124
PIT12	39 × (63)	50 × 41	36	ⅤC-129
PIT13	(52) × 46	39 × 27	40	ⅤC-129
PIT14	34 × 28	17 × 12	40	ⅤA-133
PIT15	(30) × 29	22 × 12	51	ⅤA-133

遺構名	計測値		グリッド	備考
	幅口径(cm)	底面径(φ)深さ(cm)		
PIT16	(24) × 22	18 × 9	36	ⅤA-133
PIT17	56 × 50	14 × 12	53	ⅤA-132
PIT18	69 × 40	28 × 27	32	ⅤA-132
PIT19	52 × 56	32 × 29	29	ⅤA-132
PIT20	61 × 51	42 × 36	33	ⅤV-132
PIT21	50 × 33	31 × 14	22	ⅤV-132
PIT22	38 × 28	22 × 20	47	ⅤV-132
PIT23	31 × 26	18 × 16	29	ⅤA-132
PIT24	44 × 33	25 × 15	22	ⅤV-131
PIT25	62 × 56	52 × 38	36	ⅤV-132
PIT26	58 × 53	28 × 17	43	ⅤV-131
PIT27	46 × 30	20 × 19	18	ⅤV-138
PIT28	38 × 29	16 × 13	22	ⅤV-138
PIT29	40 × 23	12 × 11	18	ⅤB-129
PIT30	66 × 31	14 × 12	21	ⅤV-138
PIT31	71 × 58	52 × 47	30	ⅤV-132

坑と比較してやや長楕円形の平面形を呈する。第6号・第14号土坑は長軸約120cm前後、短軸約90cm前後である。本類土坑の主軸方位はいずれも概ね東西方向に近い方位を示している。確認面からの深さは、いずれも40cm以下でAⅡ類に属する土坑よりも浅い。

[堆積土] 堆積土は、第7号土坑のみが単層である以外は、ほとんどの土坑が複数層に分けられる。本類土坑の堆積土の特徴は、黒褐色土や黒色土が主体で、径約5~30mmの炭化物の混入が顕著であることである。第7号土坑の堆積土中には炭化物に混じって微量の焼土粒が確認されたが、いずれの土坑も、壁面や底面に被熱の痕跡は認められなかった。

[出土遺物] なし。

[その他] 帰属時期は遺物が出土していないため特定できない土坑がほとんどである。第3号土坑の第4層から検出した炭化物の放射性炭素年代測定を行なった結果、 1σ 1445calAD-1463calAD (68.2%)、 2σ 1440calAD-1481calAD (95.4%)を示した(第3編第2章参照)。

第2節 その他の遺構

小ピット (図9・表4)

小ピットは30基検出した。調査区全体にわたって散在的に分布しているが、調査区中央部にやや集中している。小ピットの規模・重複関係などの詳細については表4にまとめた。

小ピットの規模は、開口部径が約40cm前後、底面径が約20cm前後のやや小型のものから、開口部径が約70cm前後、底面径が約50cm前後のものまでばらつきが認められる。深さは約20~50cmである。堆積土は黒褐色土や暗褐色土主体の単層のものがほとんどであるが、複数層に分けられるものもある。いずれの小ピットも遺物が出土しておらず、帰属時期は不明である。

第3節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、埋没沢からの出土が多数を占める。埋没沢内部から出土した遺物は、人為的に廃棄されたような痕跡はなく、沢が埋没する際に遺物と土砂が一緒に流入したものであると考えられる。なお、沢1~4より出土した遺物の層位は、調査時の層位をそのまま用いるため、埋没沢の土層図(図10)を参照いただきたい。また、埋没沢の層位が基本層序の何層相当になるかは、土層図の注記に示した。

1 土器

遺構外から出土した土器の総重量は約6,767gである。復元個体は少なく、多くが破片資料である。時期別の土器の割合は縄文中期後葉の最花式が主体を占め、次いで中期後葉の榎林式、縄文晩期末葉

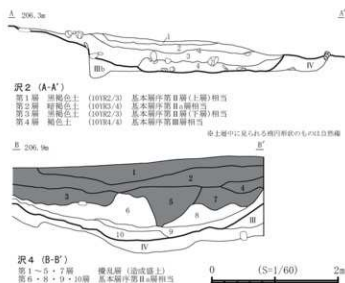
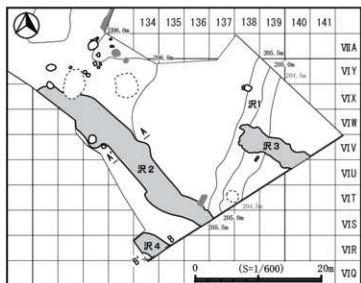


図10 A区埋没沢

から弥生前期の範疇で捉えられる土器が多い。この他、縄文後期初頭の馬立式、縄文後期前葉の十腰内I式などが少数認められる。

図11-1～6は榎林式に相当する土器である。口唇部は外端部が肥厚する特徴があり、凹線文が施文されるもの（1・2）と、凹線による施文が認められず、横方向のナデ調整のみのもの（3・4）とがある。1は口縁部および凹線文がわずかに弧状を呈することから波状口縁と推測される。胴部文様は、地文縄文に横位沈線や縦位沈線が施文されるもの（5・6）と地文縄文のみのもの（4）とがある。縄文原体は単節RL・LRが認められる。縄文原体の回転施文方向は横・縦・斜回転が認められるが、4のように一個体の中で回転施文方向を複雑に変えているものもある。

図11-7～19・30は最花式に相当する土器である。口縁部は折り返し状口縁で、口唇部が先細りの形状を呈する（7・8）。胴部文様は、地文縄文に沈線による逆U字状懸垂文が施文されるものや、粗雑な縦位沈線のみのもの（17～19同一個体）などがある。沈線幅は多様であるが、幅約1mm以下の幅状のものもある。縄文原体は単節RL・LRが認められ、回転施文方向は横・斜回転が多い。斜回転施文のものは横走縄文が顕著である。19の底部には、胴部の縦位沈線に用いられた施文具と同一の工具によるものと思われる調整の痕跡が観察される。30は8・9と同一個体で、底部に網代痕が認められる。

図11-20～29は縄文中期後葉から中期末葉の範疇で捉えられる土器である。口縁部は緩く反折するものが多く、口唇部形状はやや丸みを帯びている。口縁部付近は無文でミガキやナデによる調整が施されている。胴部には、単節RL・LR原体による横・縦・斜回転施文や単軸絡条体による施文が認められる。

図12-1は馬立式に相当する土器である。地文縄文に沈線による三角形文が施文されており、沈線間には磨消縄文手法の痕跡が認められる。

図12-2・3は十腰内I式に相当する土器である。2は沈線間に単節RL原体による充填縄文が認められる。3は台付鉢の破片資料で外面がミガキ調整されている。色調は、一部被熱による赤色化が認められるが、いずれも灰黄褐色を呈する。

図12-4～6は縄文晩期の範疇で捉えられる薄手の土器で、胴部に縦位の条痕が認められる。

図12-7～11は晩期末葉～弥生前期に位置づけられる土器である。いずれも沢2の第Ⅱ層相当からまとまって出土している。7～9は深鉢形土器の同一個体で、口縁部が内湾して立ち上がる器形であるが、口縁部内面の1条の横位沈線を境にして口唇部内端がわずかに外傾している。口縁部に沿って6条の横位平行沈線が施文されており、上から3条目の沈線は連続的に途切れている。地文は単節RL原体による横回転施文である。10・11は台付浅鉢の同一個体である。口縁部突起の上面には3本の刻み目が施されている。胴部上半の文様は横位の平行沈線、連続的に途切れる横位沈線、矢羽状沈線ないしは変形工字文と推測される斜行沈線が施文されている。胴部下半の文様は平行沈線が施文されている。地文は単節RL原体による横回転施文である。

2 石器

遺構外から出土した石器は大きく分けて、剥片石器類35点、礫石器類8点、合計43点（総重量4338.4g）が出土した。出土地点は、埋没沢（沢1～4）からの出土が目立つ。出土層位は埋没沢覆土内の基本層序第Ⅲ層及び第Ⅲa層相当からが最も多く、表土（I層）からの出土も目立つ。その

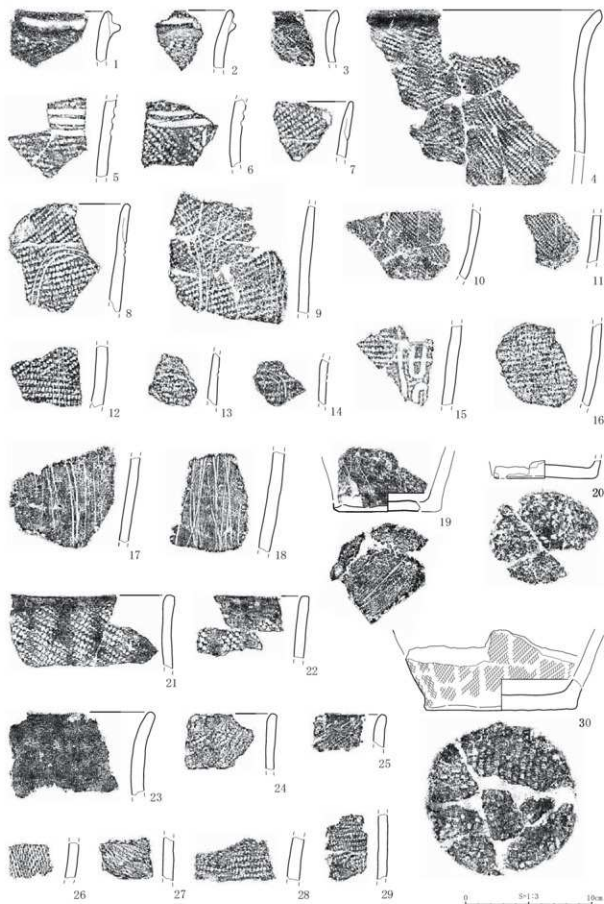


图11 A区遺構外出土遺物(1)

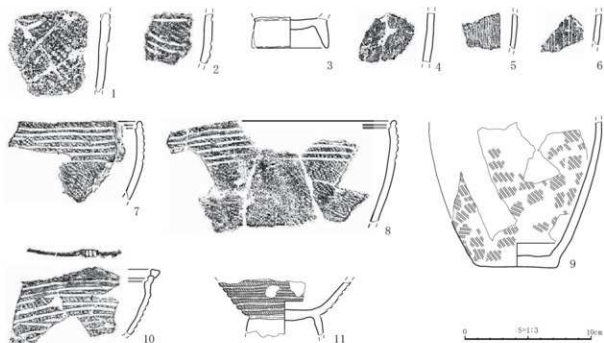


図12 A区遺構外出土遺物(2)

他、詳細な出土地点・層位、計測値、石材等については観察表にまとめた。以下、器種ごとに記載していく。

剥片石器類 (図13)

剥片石器類は、石鏃1点、石筥1点、石匙1点、石核1点、二次加工剥片15点、微小剥離痕のある剥片16点、以上、合計35点を本類として3点を図示した。なお、その他として加工・使用痕が認められない剥片(素材)は78点出土している。

石鏃(図13-1)は平基無茎鏃である。石鏃という見方もあるが、両面全体にわたって丁寧に調整を施していることから石鏃とした。

石筥(図13-3)は長さ約14cmと大型である。両面及び側縁・刃部にも丁寧な調整が施されている。先端部上端が尖頭器状になっており石槍という見方もできるが、器厚があることから石筥とした。

石匙(図13-2)は細身の縦形石匙であるが、つまみ部と先端部を一部欠損している。

石核・二次加工剥片・微小剥離痕のある剥片は図示しなかったが、二次加工剥片の中には、石鏃や楔形石器の未製品と思われるものも数点含まれている。

礫石器類 (図13)

礫石器類は、磨り石1点、敲き石5点、石錘1点、台石1点が出土し、全て図示した。

磨り石(図13-4)は部分的に擦痕がつくものである。

敲き石(図13-6～10)は一面両端部を使用するもの(9)と端部のみを使用するもの(6・7・10)、扁平な円礫の周縁に複数の敲打痕があるもの(8)に分けられる。

石錘(図13-5)は一面の両端を打ち欠いたものである。

台石(図13-11)は欠損品であるが、一面のほぼ中央部に敲打痕が見られる。

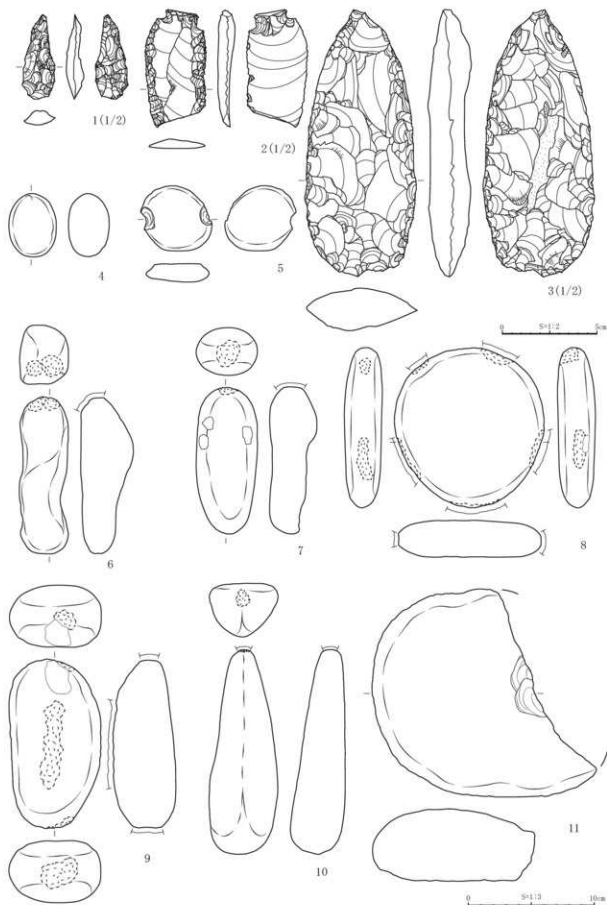


图13 A区遺構外出土遺物(3)

第4章 B区

概要

B区は遺跡の南東部、県道28号線（岩崎西目屋弘前線）の南側に位置している。本調査を実施した調査区はVI～VII-133～152グリッドにあたり、国土座標ではX=58332～58436、Y=-51868～51792にあたる。規模は、最大長約103m、最大幅73m、面積は約4500㎡であり、標高は204.6m～207.0mの河岸段丘上に立地している。調査区西側ラインは小規模な段丘面であり、本調査区は下段にあたる。

調査は、平成15・20年度に確認調査が実施され、平成20年度の調査により、段丘上段の西側は宅地造成等により大規模に削平・盛土されていることが確認された（青森県教委：2010）。段丘下段の東側からは、土坑と思われる遺構プランが2基検出され、遺物も広範囲にわたって出土したため、全面を本格的に調査することとなった。

調査は平成21・22年度にわたって実施され、検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡5軒、土坑47基、土器埋設遺構1基、その他の遺構として硬化面2箇所、小ピット83基、焼土跡3基である。

出土遺物は、縄文時代の土器・石器・石製品である。竪穴住居跡など遺構内からの出土が多かった。遺構外では、埋没沢から出土したものが多数を占める。

第1節 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡（BSI-01：図15、写真4・19）

【位置・確認】 VX・Y-137グリッドに位置している。ほぼ平坦面のⅢ層下面で確認した。

【重複】 現代の攪乱と思われる掘り込みと重複しているが、遺構との重複はなし。

【平面形・規模】 平面形は、長軸約2.7m、短軸約2.6mのほぼ円形である。床面積は5.1㎡である。

【壁・床面】 壁高は、15～22cm程度である。床面はほぼ平坦で全体的にやや硬化しており、Ⅳ層をそのまま床にしている。

【炉】 床面のほぼ中央部から土器埋設炉を検出した。最大径が約26cmの深鉢形の土器を、径約33cm、深さ約16cmの掘り方内部に埋設している。土器内部に焼土は確認されなかったが、埋設された土器のすぐ南側から焼土と粘土の小塊を、床面からやや上位で検出した。

【ピット】 床面から5基のピットを検出した。配置や規模からすると主柱穴はPit 1・2の2本柱であると考えられるが、いずれも深さが10cm代と浅い。また、住居跡上端に接するように4基のピットを検出した。本来は攪乱部分にも1基あったものと考えられるが、いずれも本遺構に伴う柱穴であった可能性が考えられる。

【堆積土】 3層に分層した。第1層は、基本層序の第Ⅱ層相当にあたり、一部、第Ⅱa層相当の堆積も確認された。

【出土遺物】 出土遺物は集計表の通りである。土器は2点を図示した。図15-1は埋設土器で、縄文中期後葉の粗製深鉢形土器である。口縁部が欠損しているが、器形としては胴部中位がわずかに膨らんでいる。文様は単節LR原体による地文縄文のみである。回転施文の方向は縦・横・斜回転と一様ではない特徴があり、A区遺構外出土の図11-4と類似する。図15-2は榎林式の深鉢形土器の口縁

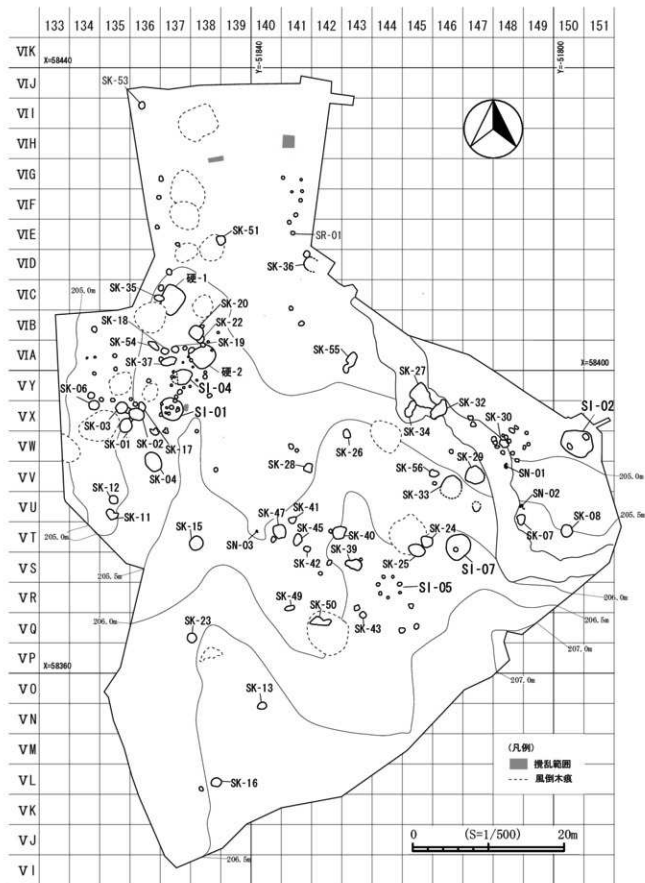


図14 B区遺構配置図

部破片で、口縁部が肥厚し、丁寧にナデ調整されている。

石器の器種内訳は剥片石器類では石匙1点(図15-3)、微小剥離痕のある剥片3点(1点図示: 図15-4)、礫石器類では磨り・敲き石1点(図15-5)である。

〔その他〕埋設された土器内部の土壌を採取し、水洗選別して確認された種実(炭化種実)を同定分析したところ、イネ科炭化種子と不明炭化種実それぞれ1点が確認された(第3編第3章)。

〔時期〕埋設土器から、縄文時代中期後葉に帰属する遺構であると考えられる。

第2号竪穴住居跡 (BSI-02a・02b: 図16・17、写真5・19)

第2号竪穴住居跡は、当初1軒の住居跡として調査を進めたが、堆積土中位の第4・5層上面において焼土跡と硬化面が確認され、2軒の住居跡が重複している。重複関係において、新しい時期のものを第2a号竪穴住居跡、古い時期のものを第2b号竪穴住居跡として記載する。

〔位置・確認〕調査区北東側の段丘縁辺部にあたるVW・X-150・151グリッドに位置している。確認面は基本層序第Ⅲb層上面である。

〔平面形・規模〕第2a号竪穴住居跡の明確な平面形・規模は不明である。第2b号竪穴住居跡の平面形は、長軸約4.2m、短軸約3.9mの不整形である。

〔壁・床面〕第2a号竪穴住居跡は竪穴の掘り込みが不明瞭で、東西土層断面の西側においてのみ、緩やかな壁の立ち上がりを確認できた。硬化面は第4・5層上面の焼土跡とほぼ同じレベルで確認し、焼土跡の周囲において約2.4×1.6mの不整形の範囲で断片的に広がっている。硬化面の範囲は東西土層断面の南側にも広がっていたものと思われるが不明である。第2b号竪穴住居跡は壁がほぼ垂直に立ち上がり、壁高は住居南側の最も高いところで約65cmである。床面はほぼ平坦で部分的に硬化しており、基本層序第Ⅳ・Ⅴ層をそのまま床にしている。床面積は9.2㎡である。

〔炉〕第2a号竪穴住居跡の硬化面の南側で焼土跡を検出した。焼土範囲は約67×32cmの不整形で、深さは約10cmである。第2b号竪穴住居跡の床面からは炉跡が検出されなかった。

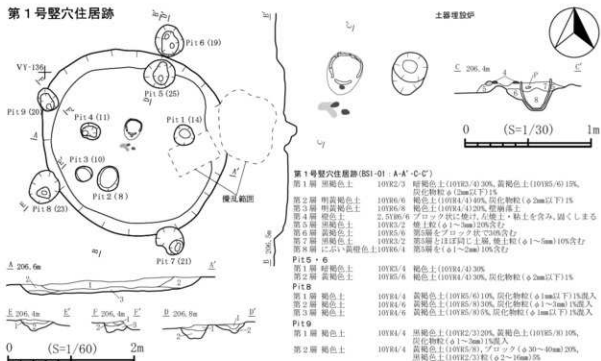
〔ピット〕第2b号竪穴住居跡の床面から主柱穴と考えられる2基のピットを検出した。ピットの平面形は長軸約80cm前後、短軸約60cm前後の不整形である。深さはPit 1が約33cm、Pit 2が約45cmで、いずれも自然の岩盤面を底面としている。

〔堆積土〕焼土跡・ピット内堆積土も含め12層に分層した。第1・2層は黒褐色土・暗褐色土主体で第2a号竪穴住居跡の堆積土、第3層は同第2a号竪穴住居跡に伴う焼土跡、第4層以下は黒褐色土・暗褐色土主体で第2b号竪穴住居跡の堆積土である。

〔出土遺物〕出土遺物は集計表の通りである。土器は主に堆積土の第3・4・6・7層中から出土している。図16-1～4は椀鉢式、図16-5・6は最花式、図16-7・8は十腰内I式に比定され、いずれも小破片である。図17-1～6は同一個体で、縄文後期後葉の注口土器である。口頸部の屈曲部や胴部の最大径部分には貼瘤が認められる。胴部文様は弧線文が施文され、弧線文の接点にみられる貼瘤の上面には刻みが施されている。底部は底径が約4cmと小さく、上げ底状である。

石器の器種内訳は、剥片石器類では石槍2点(図17-7・8)、石匙1点(図17-9)、石錐1点(図17-10)、刮器2点(図17-11・12)、石核1点、二次加工剥片25点、微小剥離痕のある剥片18点、礫石器類では敲き石1点(図17-13)、敲き・磨り石1点(図17-14)である。Pit 1から出土し

第1号竪穴住居跡



(出土遺物集計表)

器種	縄文土器		石器			その他の遺物
	深鉢形	その他	剥片石器類	石斧類	礫石器類	
出 掘土中	3 (27.8g)	-	4 (39.7g)	-	1 (127.2, 0g)	-
土 床面	-	-	-	-	-	-
数 其他	埋設: 1 (239.8g)	-	-	-	-	-

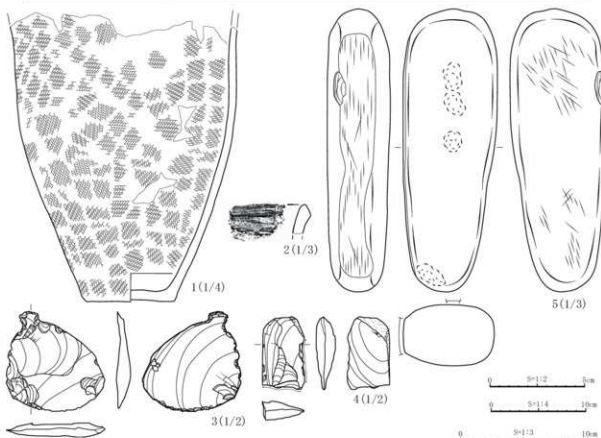


図15 B区第1号竪穴住居跡・出土遺物

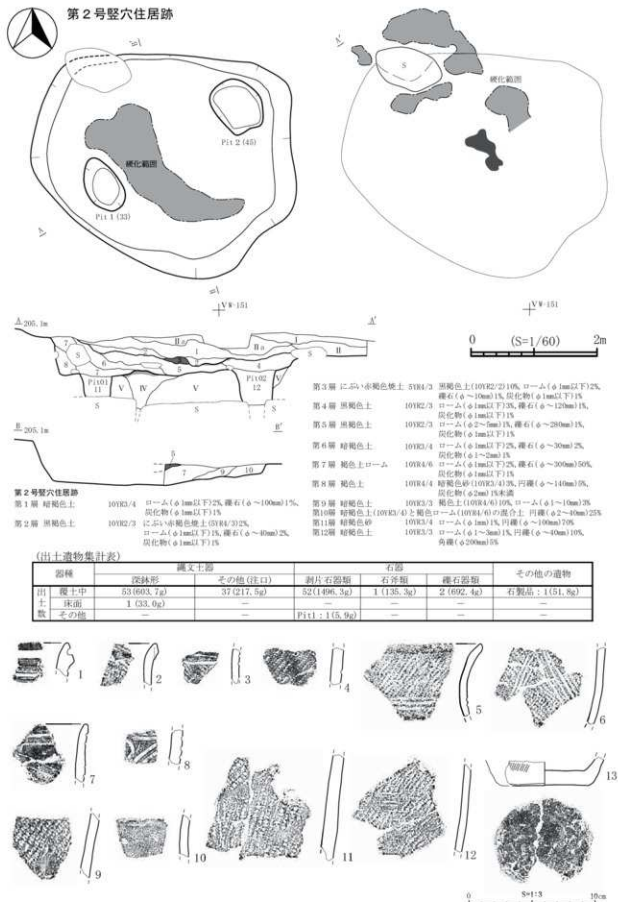


図16 B区第2号竪穴住居跡・出土遺物

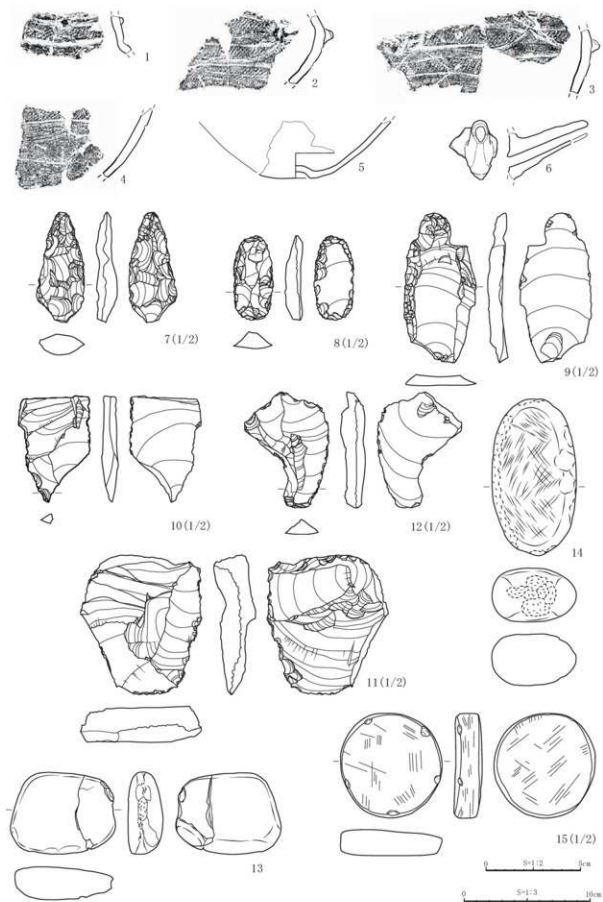


图17 B区第2号竖穴住居跡出土遺物

たのは微小剥離痕のある剥片1点である。その他の遺物は、円盤状石製品1点(図17-15)である。

〔時期〕出土遺物から、第2a号、第2b号竪穴住居跡は縄文時代後期後葉より古い時期に帰属する遺構であると推測される。(最上)

第3号竪穴住居跡 (BSI-03)

硬化面だけの検出で竪穴住居跡と断定できなかったため、第1号硬化面に変更した。

第4号竪穴住居跡 (BSI-04：図18・19、写真6・20)

〔位置・確認〕VY-137・138グリッドに位置している。近現代の耕作等により竪穴部は壊されていると考えられる。土器埋設炉及び竪穴住居跡の床面と思われる硬化面を第Ⅲ層下面で確認した。

〔重複〕遺構との重複はなし。

〔平面形・規模〕平面形は、長軸約2.8m、短軸約2.3mのほぼ円形である。床面積は4.9㎡である。

〔床面〕床面はほぼ平坦で全体的にやや硬化しており、第Ⅳ層をそのまま床にしている。

〔炉〕床面のほぼ中央部から土器埋設炉を検出した。最大径が約22cmの深鉢形の土器を、径約27cm、深さ約10cmの掘り方内部に埋設している。土器は口縁部と底部を打ち割った胴部のみが使用されていた。土器内部下半部には焼土層(第4層)が確認されたが、焼け方が最も強かったのは最下部の2～3cmで、その上層は焼土粒と黒色土が混在するような状況であった。

〔ピット〕床面から5基のピットを検出した。配置や規模からするとPit 1～4の4本柱であると考えられるが、いずれも深さが10cm前後と浅い。また、床面より一回り大きくなるような弧状の配置で9基のピットを検出した。いずれも本遺構に伴う柱穴であった可能性が考えられる。

〔堆積土〕1層のみ確認された。床面に接する部分のみであったため詳細は不明であるが、黒色土を中心とした堆積土であったと考えられる。

〔出土遺物〕出土遺物は集計表の通りである。土器は12点を図示した。図18-1は埋設土器で、縄文中期後葉の粗製深鉢形土器である。胴部上半と底部が欠損しているが、胴部が大きく影らむ器形である。文様は地文縄文のみで単節LR原体が斜・横回転施文されている。堆積土中から出土した土器は、縄文中期後葉の椀林式から後期前葉の十腰内I式の土器が混在している。石器の器種内訳は、剥片石器類の石匙1点(図19-1)、石錐2点(図19-2・3)、削器1点(図19-4)、二次加工剥片8点、微小剥離痕のある剥片7点、礫石器類の石皿1点(図19-5)である。

〔その他〕埋設された土器内部の土壌を採取し、水洗選別して確認された種実(炭化種実)を同定分析したところ、不明種実の破片1点が確認された(第3編第3章)。

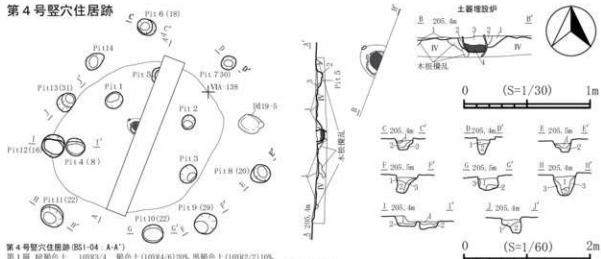
〔時期〕埋設された土器から、縄文時代中期後葉に帰属する遺構であると考えられる。

第5号竪穴住居跡 (BSI-05：図20、写真7)

〔位置・確認〕調査区南側のVS・R-144グリッドに位置している。確認面は基本層序第Ⅲb層上面で、焼土跡1基とその周囲に7基のピットを確認した。焼土とピットの配置から竪穴住居跡と認定したが、壁は削平してしまい、床面レベルで確認した。

〔重複〕なし。

第4号竪穴住居跡



第4号竪穴住居跡 (B5-04 A-A')

第1層 埴輪色土 109K3/4

第2層 埴輪色土 109K3/4

第3層 黄褐色土 109K5/6

第4層 黄褐色土 109K5/6

第1層 埴輪色土 109K3/4

第2層 埴輪色土 109K3/4

第3層 黄褐色土 109K5/6

第4層 黄褐色土 109K5/6

第1層 埴輪色土 109K3/4

第2層 埴輪色土 109K3/4

第3層 黄褐色土 109K5/6

第4層 黄褐色土 109K5/6

第1層 埴輪色土 109K3/4

第2層 埴輪色土 109K3/4

第3層 黄褐色土 109K5/6

第4層 黄褐色土 109K5/6

第1層 埴輪色土 109K3/4

第2層 埴輪色土 109K3/4

第3層 黄褐色土 109K5/6

第4層 黄褐色土 109K5/6

第1層 埴輪色土 109K3/4

第2層 埴輪色土 109K3/4

第3層 黄褐色土 109K5/6

第4層 黄褐色土 109K5/6

第1層 埴輪色土 109K3/4

第2層 埴輪色土 109K3/4

第3層 黄褐色土 109K5/6

第4層 黄褐色土 109K5/6

第1層 埴輪色土 109K3/4

第2層 埴輪色土 109K3/4

第3層 黄褐色土 109K5/6

第4層 黄褐色土 109K5/6

第1層 埴輪色土 109K3/4

第2層 埴輪色土 109K3/4

第3層 黄褐色土 109K5/6

第4層 黄褐色土 109K5/6

第1層 埴輪色土 109K3/4

第2層 埴輪色土 109K3/4

第3層 黄褐色土 109K5/6

第4層 黄褐色土 109K5/6

第1層 埴輪色土 109K3/4

第2層 埴輪色土 109K3/4

第3層 黄褐色土 109K5/6

第4層 黄褐色土 109K5/6

第1層 埴輪色土 109K3/4

第2層 埴輪色土 109K3/4

第3層 黄褐色土 109K5/6

第4層 黄褐色土 109K5/6

第1層 埴輪色土 109K3/4

第2層 埴輪色土 109K3/4

第3層 黄褐色土 109K5/6

第4層 黄褐色土 109K5/6

第1層 埴輪色土 109K3/4

第2層 埴輪色土 109K3/4

第3層 黄褐色土 109K5/6

第4層 黄褐色土 109K5/6

第1層 埴輪色土 109K3/4

第2層 埴輪色土 109K3/4

第3層 黄褐色土 109K5/6

第4層 黄褐色土 109K5/6

第1層 埴輪色土 109K3/4

第2層 埴輪色土 109K3/4

第3層 黄褐色土 109K5/6

第4層 黄褐色土 109K5/6

第1層 埴輪色土 109K3/4

第2層 埴輪色土 109K3/4

第3層 黄褐色土 109K5/6

第4層 黄褐色土 109K5/6

(出土遺物集計表)

品名	縄文土器		割片石器類	石器	礎石器具類	その他の遺物
	深鉢形	その他				
出	33(433, 9g)	--	19(239, 6g)	--	--	--
土	--	--	--	--	1(11550, 0g)	--
数	埋没・1(973, 4g)	--	--	--	--	--

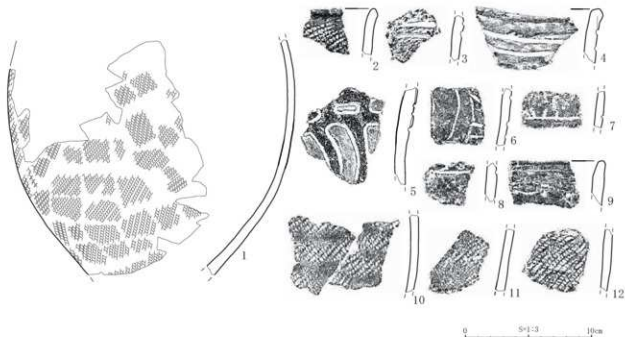


図18 B区第4号竪穴住居跡・出土遺物

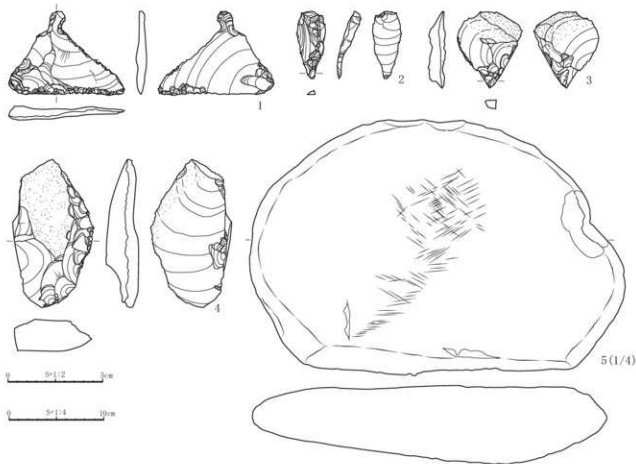


図19 B区第4号竪穴住居跡出土遺物

〔平面形・規模〕 竪穴の掘り込みが確認されなかったため平面形は不明であるが、住居跡の柱穴と考えられるピットの配列はほぼ円形で、長軸幅が約3.3m、短軸幅が約3.1mである。

〔床面〕 床面はほぼ平坦であるが、炉の周囲がわずかに低くくぼんでいる。基本層序第Ⅲb層を床としており、硬化面や貼床の痕跡は認められなかった。

〔炉〕 円形のピット配列の西側寄りから地床炉と考えられる焼土跡を検出した。焼土範囲は約18×8cmの不整形である。厚さ3cmほどで弱く被熱している。掘方は長軸約82cm、短軸約66cmの不整形で、深さが約10cmである。

〔ピット・堆積土〕 ピットは7基確認した。ほぼ円形に配列している。規模は開口部径約40cm前後、底面部径約20cm前後のものがほとんどで、住居主軸線上に位置するPit 7のみやや大きい。確認面からの深さは約12～30cmとややばらつきがあるが、底面部の標高値はいずれのピットも約205.9m～206.0mとほぼ一定である。ピットの堆積土は単層のものが多く、2～3層に分けられるものもある。いずれも暗褐色土が主体で、ローム粒が微量混入している。

〔出土遺物〕 なし。

〔時期〕 遺物が出土しておらず、帰属時期は不明である。

(最上)

第5号竪穴住居跡

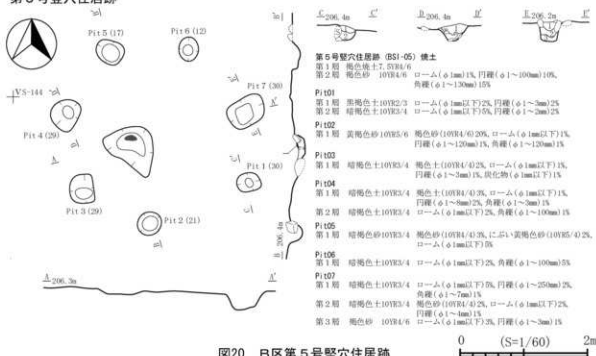


図20 B区第5号竪穴住居跡

第6号竪穴住居跡 (BSI-06)

硬化面のみを検出で竪穴住居跡と断定できなかったため、第2号硬化面に変更した。

第7号竪穴住居跡 (BSK-14 : 図21、写真7・20)

【位置・確認】VS・T-146・147グリッドに位置している。北東側にやや傾斜するⅢB層上面で確認した。本遺構の覆土第1層下面から焼土跡が検出されており、竪穴が埋没する過程で第1層下面を使用した可能性が考えられる。よって、第1層下面を新段階の床面、竪穴底面を古段階の床面として捉えることとする。

【重複】遺構との重複はなし。

【平面形・規模】古段階の平面形は、長軸約3.1m、短軸約2.8mのほぼ円形である。床面積は7.0㎡である。新段階もほぼ同規模であると考えられる。

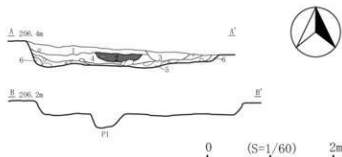
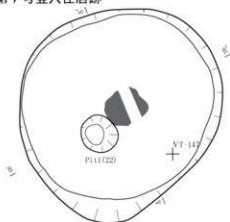
【壁・床面】古段階における南西側の壁高は約42cm、北東側の壁高は約10cmである。床面はほぼ平坦でV層をそのまま床にしている。新段階における南西側壁高は約10cm、北東側は不明である。床面はほぼ平坦でやや締りがある。

【焼土(炉)】古段階床面から炉跡らしき痕跡は確認されなかった。新段階床面(第1層下面)のほぼ中央部から焼土跡を検出した。規模は、径55×60cm、深さ約10cmである。上面の焼け方が強く、下面の焼け方は徐々に弱くなる。

【ピット】古段階床面から1基のピットを検出した。規模は、径55×60cm、深さは約21cmである。ピット堆積土と竪穴住居跡堆積土がいずれも黒褐色土主体であるため、掘り込みがどの辺りからであったのかを調査で確認することはできなかった。

【堆積土】焼土跡・ピット堆積土も含め8層に分層した。堆積土全般にわたり、基本層序の第Ⅱ層相

第7号竪穴住居跡



第7号竪穴住居跡 (BS1-07)

- | | | |
|-----|------------------|--------------------------------------|
| 第1層 | 黒色土 (10R2/1) | 炭化物(φ1~20mm)20% |
| 第2層 | 暗褐色土 (10R2/3) | 炭化物(φ1~10mm)20%, 糠(φ1~10mm)1%, 焼土2% |
| 第3層 | 暗褐色土 (10R2/3) | 焼土50%, 炭化物(φ1~1mm)10%, 糠(φ1~10mm)13% |
| 第4層 | 暗褐色土 (10R2/3) | 炭化物(φ1~2mm)10%, 糠(φ1~10mm)10% |
| 第5層 | 暗褐色土 (10R2/3) | 糠(φ1~10mm)15%, 褐色土(10YR4/4)10% |
| 第6層 | にぶい黄褐色土 (10R5/3) | 炭化物(φ1~2mm)2%, 焼土(φ1~2mm)1% |
| | | 糠(φ1~50mm)10%, 地山礫層上 |

(出土遺物集計表)

品類	図録番号	縄文土器				その他の遺物
		その他	割片石器類	石器類	縄石器類	
土	慶十中 45(433, 1g)	--	7(164, 1g)	--	--	
土	床面	--	--	--	--	
数	その他	--	--	--	--	

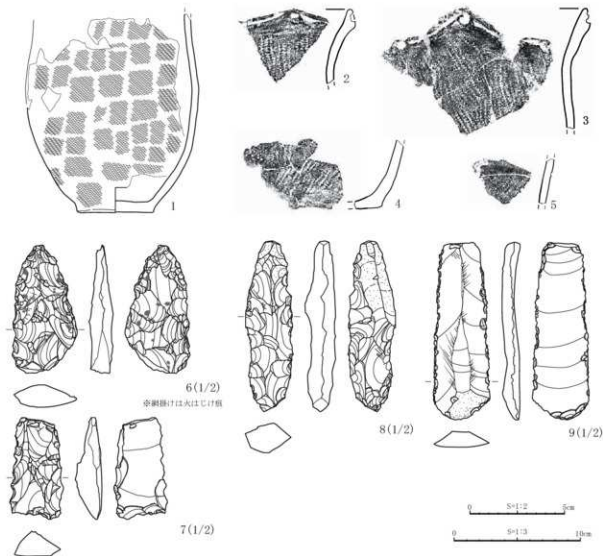


図21 B区第7号竪穴住居跡・出土遺物

表5 B区土坑属性表

道坑名	分類	計測値		グリッド	遺物出土状況		遺構 S98	遺物 S98	写真 図説	新旧関係	備考 (埋蔵時期など)	
		開口部(m)	底面部(m)		深さ (cm)	土器(確土中)						石器(確土中)
第1号土坑	AⅢ	194×160	148×120	24	V3-135	土器内1式等56片	石器(確土中) 石鏃・二次加工(3点)・ 微小剥離		0822	0827	写真8 写真20	PT05より新 藏文後期前葉
第2号土坑	CⅣ	206×154	180×126	28	V3-136	土器内1式等6片	石器・微小剥離		0822	0827	写真20 図説-17・ PT04・95 より新	藏文後期前葉
第3号土坑	AⅢ	162×148	130×116	16	V3-135	土器内1式等27片	石鏃・鏃部・微小剥離		0822	0827	写真20	PT04より新 藏文後期前葉
第4号土坑	CⅣ	262×202	216×84	26	V3-136	土器内1式等41片	石鏃・鏃部・微小剥離 二次加工(3点)		0822	0827	写真10 写真21	藏文後期前葉
第5号土坑 SI-01に変更												
第6号土坑	AⅢ	134×120	100×84	28	V3-134	土器内1式等27片	石鏃・石鏃・鏃部・二次 加工(7点)・微小剥離		0822	0827	写真8	藏文後期前葉
第7号土坑	AⅢ	142×90	90×58	26	VI-148	鹿角式等3片	微小剥離		0822	—	—	藏文中期後葉
第8号土坑	AⅢ	162×148	84×78	42	VI-150	—	二次加工		0822	—	—	—
第9号土坑 PT04に変更												
第10号土坑 PT05に変更												
第11号土坑	CⅢ	102×84	72×50	18	VI-135	—	—		0822	—	—	—
第12号土坑	AⅢ	124×112	88×66	12	VI-135	—	—		0822	—	—	—
第13号土坑	AⅢ	122×92	86×54	24	V3-140	—	—		0822	—	—	—
第14号土坑 SI-07に変更												
第15号土坑	AⅠ	192×176	166×152	84	VI-138	—	—		0822	—	写真8	—
第16号土坑	AⅢ	140×116	66×40	14	VI-138	—	—		0823	—	—	—
第17号土坑	CⅢ	1100×90	823×68	14	VI-137	—	—		0823	—	—	S-02・PT04 より古
第18号土坑	AⅢ	104×82	60×38	12	VIa-137	藏文中期後葉等3片	—		0823	0828	写真21	S-02・PT05 より古
第19号土坑	AⅢ	96×90	72×68	20	VIa-137	—	—		0823	—	—	S-02・PT06 より古
第20号土坑	AⅢ	190×188	166×158	24	VIb-138	榎林式・鹿角式等12片	—		0823	0828	写真9 写真21	S-22より新 藏文中期後葉
第21号土坑 検定に変更												
第22号土坑	CⅢ	96×780	78×660	16	VIa-138	—	—		0823	—	—	S-20より古
第23号土坑	AⅢ	128×122	104×100	26	Vq-138	—	—		0823	—	—	—
第24号土坑	AⅢ	166×152	142×130	28	VI-145	藏文晩期等1片	—		0823	0828	写真21	—
第25号土坑	AⅢ	224×158	192×132	38	VI-145	—	—		0823	—	—	—
第26号土坑	CⅢ	118×88	80×46	40	V3-143	—	—		0825	—	—	—
第27号土坑	AⅢ	186×184	130×98	94	VI-145	—	—		0825	—	—	—
第28号土坑	CⅢ	114×106	86×74	34	VI-141	—	—		0825	—	写真10	—
第29号土坑	AⅢ	248×236	190×188	52	VI-147	—	—		0825	—	—	—
第30号土坑	AⅢ	116×104	56×52	20	V3-148	—	—		0825	—	—	—
第31号土坑 遺構土層定容及び寸法												
第32号土坑	AⅢ	138×114	88×48	54	V3-146	—	—		0825	—	—	—
第33号土坑	CⅢ	270	222	24	VI-146	土器内1式等9片	微小剥離		0825	0828	写真21	藏文後期前葉
第34号土坑	AⅣ	136×104	62×40	46	V3-145	—	—		0825	—	—	—
第35号土坑	BⅡ	130×108	66×34	14	VIc-136	—	—		0824	—	—	硬化面より 新
第36号土坑	AⅢ	158×128	80×72	18	VIb-142	土器内1式等38片	石鏃・鏃部・二次加工 (7点)・微小剥離		0824	0828	写真9	藏文後期前葉
第37a号土坑	BⅡ	208×70	180×50	18	VIa-137	—	—		0824	0829	写真9	S-37bより 新
第37b号土坑	CⅢ	668×40	116×24	8	VIa-137	土器内1式等43片	—		0824	0829	写真21	S-37aより古 藏文後期前葉
第38号土坑 埋蔵段階で欠番												
第39号土坑	AⅢ	216×136	108×76	34	V3-143	—	—		0824	—	写真8	—
第40号土坑	CⅣ	196×164	108×40	46	VI-142	—	—		0824	—	—	—
第41号土坑	AⅣ	98×88	86×70	18	VI-141	—	—		0824	—	—	—
第42号土坑	AⅢ	86×72	74×54	14	VI-141	—	—		0824	—	—	—
第43号土坑	AⅢ	90×84	60×56	14	Vq-143	—	—		0824	—	—	—
第44号土坑 PT06に変更												
第45号土坑	AⅣ	134×106	68×52	50	VI-141	—	—		0824	—	写真9	—
第46号土坑 PT09に変更												
第47号土坑	CⅢ	178×138	144×114	26	VI-140	—	—		0824	—	写真10	—
第48号土坑 埋蔵段階で欠番												
第49号土坑	BⅡ	130×64	110×36	20	V3-141	—	—		0824	—	写真10	—
第50a号土坑	CⅢ	169×90	110×70	36	Vq-142	—	—		0826	—	—	S-50bより 新
第50b号土坑	CⅢ	124×74	112×40	26	Vq-142	—	—		0826	—	—	S-50aより 古
第51号土坑	CⅣ	128×128	60×44	40	VIc-139	—	—		0826	—	—	—
第52号土坑 検定本に変更												
第53号土坑	AⅢ	80×80	80×70	14	VIc-136	—	—		0826	—	—	—
第54号土坑	BⅡ	166×76	114×46	18	VIb-136	—	—		0826	—	—	—
第55号土坑	CⅣ	190×130	48×27	22	VIa-143	—	—		0826	0829	写真22	SI-01台へ変更 PT06へ変更
第56号土坑	AⅢ	125×82	70×52	60	VI-146	—	—		0826	—	—	—

当にあたるものと考えられる。第5層以下は礫の混入が多くなり、第6層は壁の崩落土であると考えられる。

【出土遺物】出土遺物は集計表の通りである。土器は堆積土の第2層中から主に出土している。6点を図示した。図21-1は縄文中期後葉の粗製深鉢形土器である。口縁部が欠損しているが、器形としては胴部下位が大きく膨らんでいる。文様は地文縄文のみで単節LR原体が縦回転施文されている。図21-2・3は同一個体で、椀林式の深鉢形土器の口縁部破片である。口縁部が肥厚する波状口縁で、大波状と小波状が交互に展開するものと推測される。大波状の波頂部下には渦巻文、小波状の波頂部下には円形刺突文が認められる。図21-5は十腰内1式の胴部破片である。

石器の器種内訳は、剥片石器類の石楡1点（図21-6）、石筥2点（図21-7・8）、削器1点（図21-9）、二次加工剥片2点、微小剝離痕のある剥片1点である。

【その他】堆積土第5層（床面直上）から出土した炭化物の炭素年代測定を行った結果、1σ2935-2935BC（49.0%）、2σ3014BC-2899BC（95.4%）を示した（第3編第2章）。

【時期】出土遺物から、新段階は縄文時代中期後葉以前に帰属する遺構であると考えられる。

第2節 土坑（図22～29、表5、写真8～10・20～22）

土坑は47基検出した。他の遺構に変更になったり、土坑と断定できず欠番になったりしたものは表5の「土坑属性表」に示した。また、個々の土坑における基礎データ（位置・規模・出土遺物等）及び図版番号、写真番号等も表5に示した。以下、分類（第2編第2章）毎に記述することとする。

A類 円形

A類に分類された土坑は28基である。以下、断面形の形態でⅠ～Ⅳ類に細分した。

AI類（円形－フラスコ形）

第15号土坑の1基が属する。

【検出状況】調査区中央部やや西側の第Ⅲ層下面で検出した。

【規模】開口部は崩落しているものと思われ、規模は不明であるが、底面径は150～160cmである。深さは82cmである。

【堆積土】9層に分層した。第1層以外は人為的に埋め戻した様相がうかがえる。

AII類（円形－深箱形）

第8・32・39・56号土坑の4基が属する。

【検出状況】調査区中央部よりやや東側に集中して検出した。確認面はいずれも第Ⅲb層上面である。

【重複等】第32号土坑は沢2が埋没した後に掘り込まれている。

【規模】底面の規模は、径50～70cm程度であるが、第39号土坑は最大径108cmと大きい。深さは45～60cm程度である。

【堆積土】全て自然堆積の様相を呈する。第39号土坑は堆積土中に大きめの礫を含んでいる。第32号土坑は基本層序第Ⅱ層相当の黒色土中心である。

【その他】第8号土坑第2層下面（底面直上）から出土した炭化物の炭素年代測定を行った結果、1

σ 2807BC-2759BC (48.7%)、 2σ 2814BC-2740BC (55.6%) を示した (第3編第2章)。

AⅢ類 (円形-浅箱形)

第1・3・6・7・12・13・16・18・19・20・23・24・25・27・29・30・36・42・43・53号土坑の20基が属する。

〔検出状況〕 調査区全域にわたって検出した。確認面は、調査区中央部より東側は第Ⅲb層上面、西側が第Ⅲ層下面である。

〔重複等〕 第1号土坑はPIT95、第3号土坑はPIT94とそれぞれ重複し、いずれも土坑の方が新しい。第20号土坑は第22号土坑と重複し本遺構が新しい。第27号土坑は沢2が埋没した後に掘り込まれている。第30号土坑は、小ピット群④のはほぼ中央に位置するが、新旧関係は不明である。

〔規模〕 底面の規模は、小型のもので径40～60cm、中型で径70～100cm、大型で120～180cmと幅広い。深さは20～40cm程度に収まる。第20・29号土坑底面からはピットを検出した。第29号土坑のピットは底面中央部に位置し、開口部径は112×78cmの長円形状で土坑底面からの深さは48cmである。

〔堆積土〕 全て自然堆積の様相を呈する。調査区中央部より東側で検出した土坑は堆積土中に大きめの礫を含み、西側で検出した土坑は基本層序第Ⅱ層相当の黒色土を堆積する。

〔その他〕 第27号土坑第1層は炭化物が多く含まれる層であり、同層の土壌を採取し水洗選別して確認された種実 (炭化種実) を同定分析したところ、キハダ・ミズキ・タデ属の破片がそれぞれ1点確認された (第3編第3章)。第53号土坑第1層 (覆土) から出土した炭化物の炭素年代測定を行った結果、 1σ 1478calAD-1521calAD (40.8%)、 2σ 1466calAD-1525calAD (47.9%) を示した (第3編第2章)。

AⅣ類 (円形-不整形)

第34・41・45号土坑の3基が属する。

〔検出状況〕 調査区ほぼ中央部および東側で検出した。確認面はいずれも第Ⅲb層上面である。

〔重複等〕 第34号土坑は沢2が埋没した後に掘り込まれている。

〔規模〕 底面の規模は、径50～80cm程度である。深さは第45号土坑が68cmと深い。なお、第34・45号土坑は、断面形が逆台形状ということでⅣ類に含めた。

〔堆積土〕 いずれも自然堆積の様相を呈する。堆積土中には小～中くらいの礫を含む。第34号土坑は基本層序第Ⅱ層相当の黒色土中心である。

B類 楕円形

B類に分類された土坑は4基である。以下、断面形の形態でⅡ・Ⅲ類に細分した。

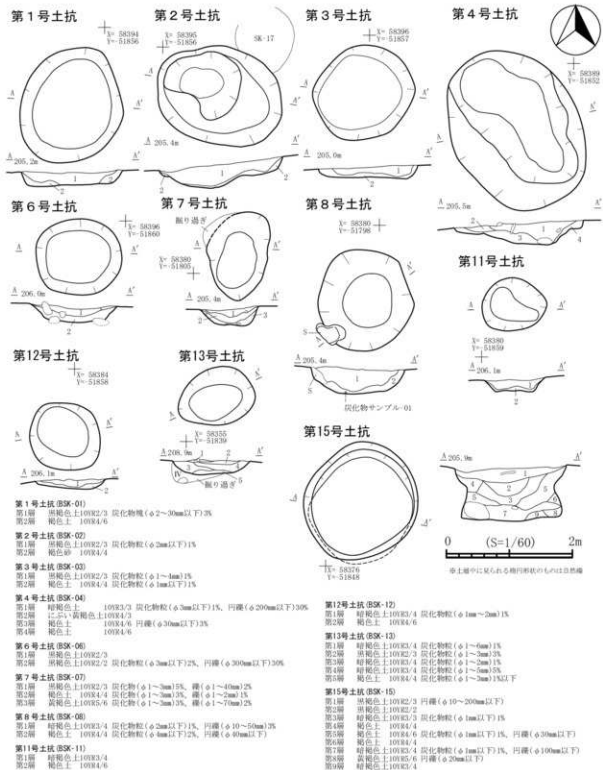
BⅠ類 (楕円形-深箱形)

第35・37a号土坑の2基が属する。

〔検出状況〕 調査区中央部よりやや北西側で検出した。確認面はいずれも第Ⅲ層下面である。

〔重複等〕 第35号土坑は第1号硬化面と重複し本遺構が新しい。第37a号土坑は第37b土坑と重複し本遺構が新しい。

〔規模〕 底面の規模は、長軸径66・178cmで、第37a号土坑の方が大きい。深さは26・34cmで第35号土坑の方が深い。

**第1号土坑 (SK-01)**

- 第1層 黒褐色土10932/3 炭化物粒(φ2~30mm以下)3%
 第2層 褐色土 10934/6

第2号土坑 (SK-02)

- 第1層 黒褐色土10932/3 炭化物粒(φ2mm以下)1%
 第2層 褐色土 10934/4

第3号土坑 (SK-03)

- 第1層 黒褐色土10932/3 炭化物粒(φ1~4mm)1%
 第2層 褐色土 10934/4 炭化物粒(φ1mm以下)1%

第4号土坑 (SK-04)

- 第1層 暗褐色土 10933/3 炭化物粒(φ3mm以下)1%, 円礫(φ200mm以下)30%
 第2層 黄土・黄褐色土10934/5
 第3層 褐色土 10934/6 円礫(φ30mm以下)3%
 第4層 褐色土 10934/6

第6号土坑 (SK-06)

- 第1層 黒褐色土10932/3
 第2層 黒褐色土10932/3 炭化物粒(φ3mm以下)2%, 円礫(φ300mm以下)30%

第7号土坑 (SK-07)

- 第1層 黒褐色土10932/3 炭化物(φ1~3mm)5%, 礫(φ1~40mm)2%
 第2層 褐色土 10934/4 炭化物(φ1~3mm)3%, 礫(φ1~2mm)1%
 第3層 黄褐色土10935/6 炭化物(φ1~2mm)3%, 礫(φ1~7mm)2%

第8号土坑 (SK-08)

- 第1層 暗褐色土10933/4 炭化物粒(φ2mm以下)1%, 円礫(φ10~50mm)1%
 第2層 褐色土 10934/4 炭化物粒(φ1mm以下)2%, 円礫(φ40mm以下)

第11号土坑 (SK-11)

- 第1層 暗褐色土10933/4
 第2層 褐色土 10934/6

第12号土坑 (SK-12)

- 第1層 暗褐色土10933/4 炭化物粒(φ1mm~2mm)1%
 第2層 褐色土 10934/6

第13号土坑 (SK-13)

- 第1層 暗褐色土10933/4 炭化物粒(φ1~5mm)1%
 第2層 黒褐色土10932/3 炭化物粒(φ1~2mm)3%
 第3層 暗褐色土10933/4 炭化物粒(φ1~3mm)1%
 第4層 暗褐色土10933/4 炭化物粒(φ1~3mm)5%
 第5層 褐色土 10934/4 炭化物粒(φ1~3mm)3%以下

第15号土坑 (SK-15)

- 第1層 暗褐色土10932/3 円礫(φ10~200mm以下)
 第2層 黒褐色土10932/3 炭化物粒(φ1mm以下)1%
 第3層 暗褐色土10933/3 炭化物粒(φ1mm以下)1%
 第4層 褐色土 10934/4
 第5層 褐色土 10934/6 炭化物粒(φ1mm以下)1%, 円礫(φ30mm以下)
 第6層 褐色土 10934/4
 第7層 暗褐色土10933/4 炭化物粒(φ1mm以下)1%, 円礫(φ100mm以下)
 第8層 黄褐色土10935/6 円礫(φ20mm以下)
 第9層 暗褐色土10933/4

図22 B区土坑(1)

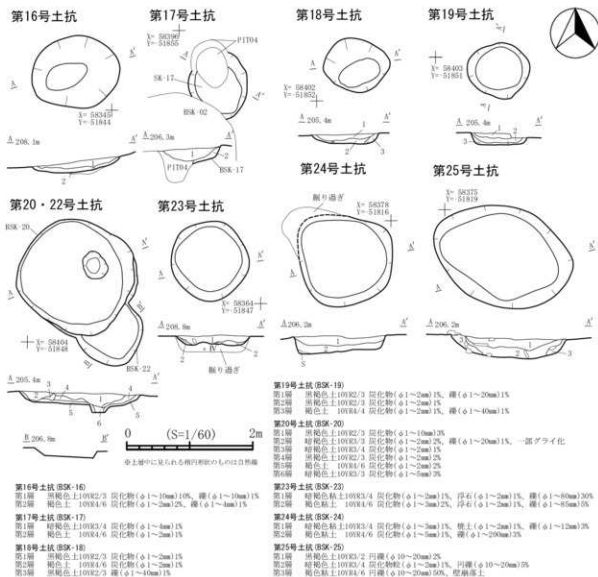


図23 B区土坑(2)

【堆積土】いずれも自然堆積の様相を呈し、基本層序第Ⅱ層相当の黒色土が中心である。第35号土坑第1層には、第Ⅱa層が部分的に含まれる。

BⅢ類(楕円形-浅箱形)

第49・54号土坑の2基が属する。

【検出状況】調査区南側と北西側で検出した。確認面は、南側が第Ⅲb層上面、北西側が第Ⅳ層上面である。

【規模】底面の規模は、いずれも長軸径110cm、深さ20cm程度である。

【堆積土】いずれも自然堆積の様相を呈し、基本層序第Ⅱ層相当の黒色土中心である。

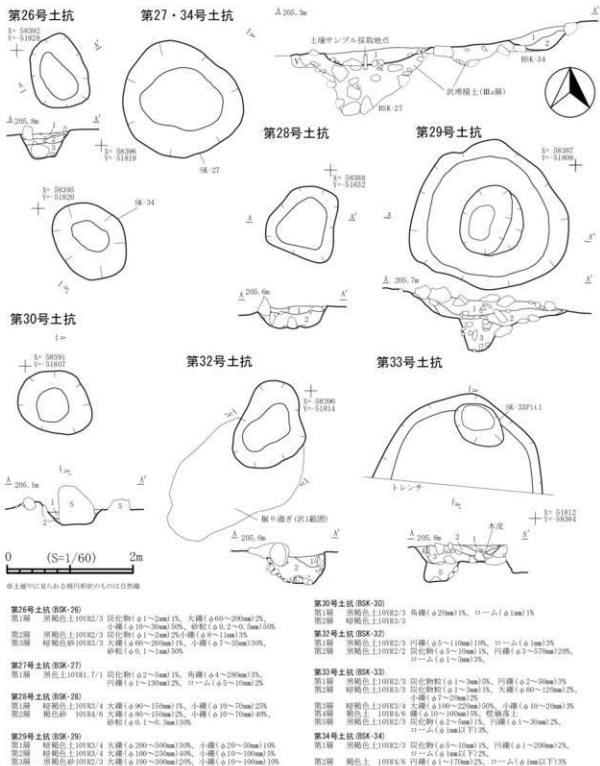


図24 B区土坑(3)

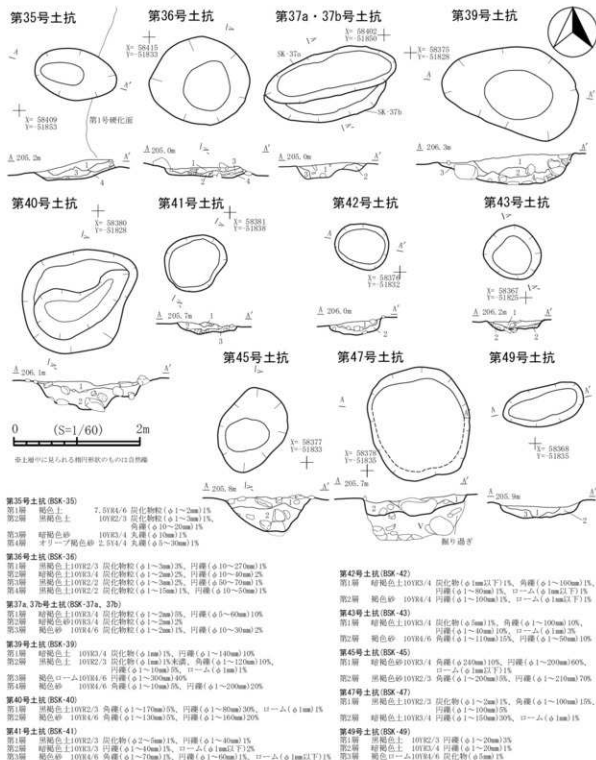


図25 B区土坑(4)

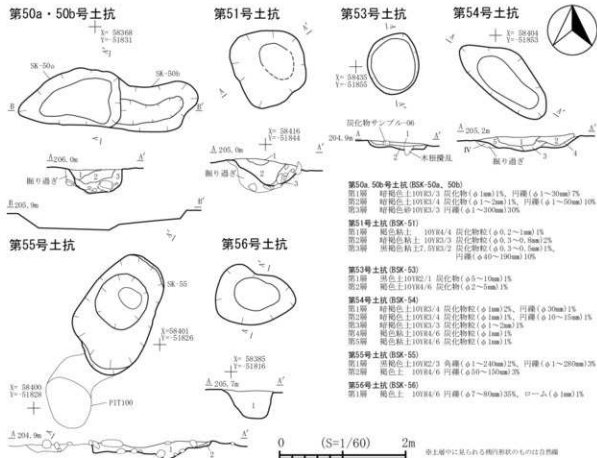


図26 B区土坑(5)

C類 不整形

C類に分類された土坑は15基である。以下、断面形の形態でⅡ・Ⅲ・Ⅳ類に細分した。

CⅡ類 (不整形-深箱形)

第26・28・50a号土坑の3基が属する。

[検出状況] 調査区はほぼ中央部で検出した。確認面はいずれも第Ⅲb層上面である。

[重複等] 第50a号土坑は第50b号土坑と重複し本遺構が新しい。

[規模] 底面の規模は、径70~80cm程度である。深さはいずれも40cm代である。

[堆積土] いずれも自然堆積の様相を呈し、基本層序第Ⅲa層相当の礫が混じる褐色土中心である。

CⅢ類 (不整形-浅箱形)

第11・17・22・33・37b・47・50b号土坑の7基が属する。遺構の重複により全体形がわからないため本類に属するものが多い。

[検出状況] 調査区南側で検出した第50b号土坑以外は、調査区西側で検出した。確認面は、南側が第Ⅲb層上面、西側が第Ⅳ層上面である。

[重複等] 第17号土坑は第2号土坑・PIT04と、第22号土坑は第20号土坑と、第37b土坑は第37a土坑と、第50b土坑は第50a土坑とそれぞれ重複し、いずれも前者が古い。

[規模] 底面の規模がわかる遺構の最大径は70~80cm程度である。第33号土坑は大きく最大径225cm

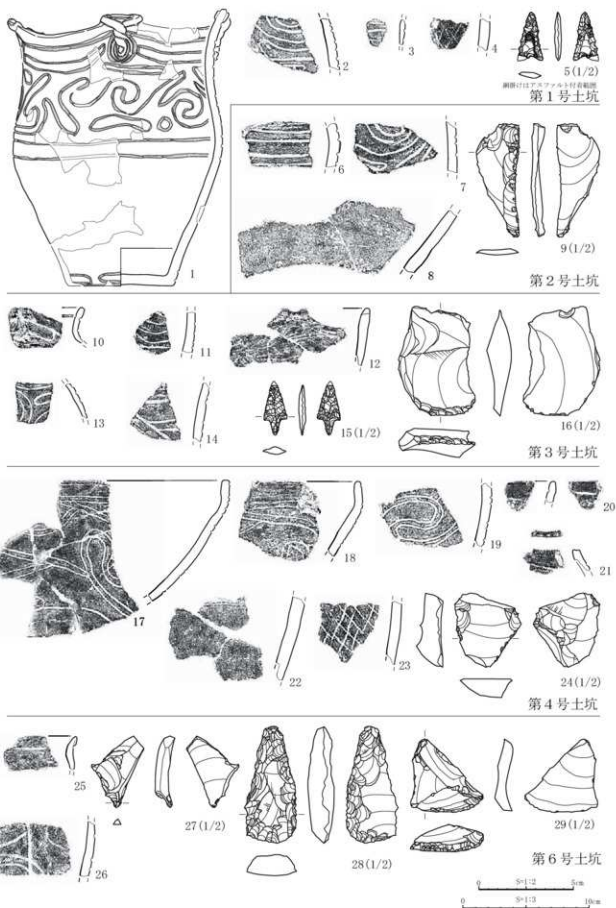
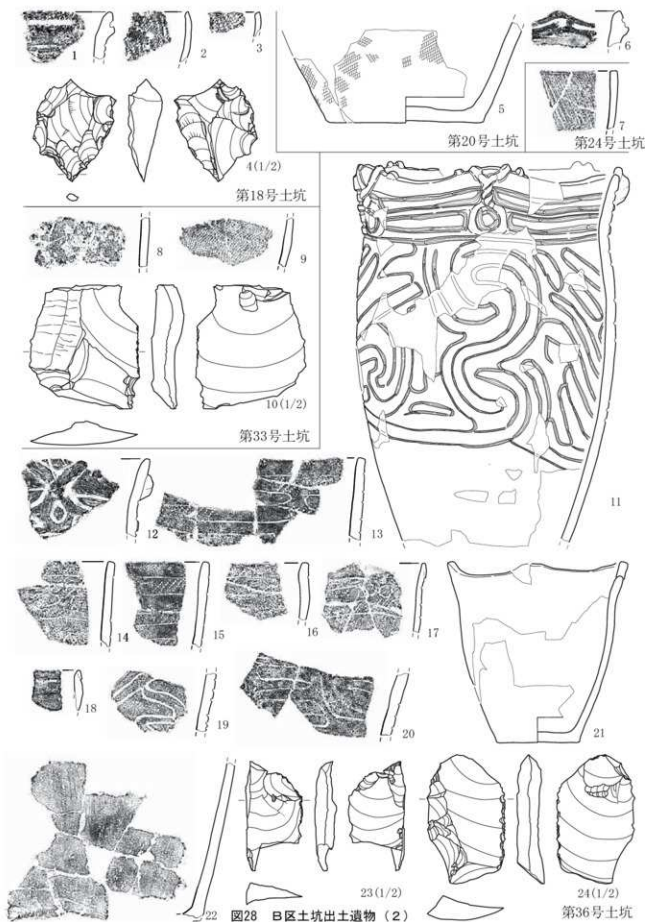


图27 B区土坑出土遗物(1)



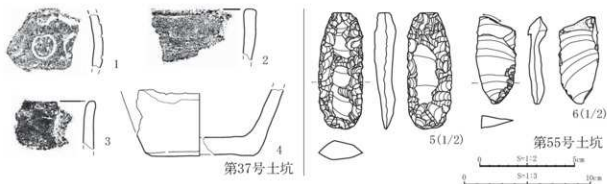


図29 B区土坑出土遺物(3)

である。深さは20cm前後である。第33号土坑底面からは径84×62cm、深さ42cmのピットを検出した。

【堆積土】いずれも自然堆積の様相を呈し、基本層序第Ⅱ層相当の黒色土中心である。

CV類（不整形—不整形）

第2・4・40・51・55号土坑の5基が属する。

【検出状況】調査区全域にわたって検出した。確認面は、調査区中央部より東・南側は第Ⅲb層上面、北・西側が第Ⅲ層下面である。

【規模】底面が凹凸のため中端ラインで規模を捉えると、第2・40・55号土坑の最大径130～180cm程度である。第4号土坑の中端規模は大きく、最大径250cmであった。第51号土坑は先細りの断面形を呈し、底面規模は径50cm前後である。

【堆積土】いずれも自然堆積の様相を呈し、第2・4・51号土坑は基本層序第Ⅱ層相当の黒色土中心で、第40・55号土坑は基本層序第Ⅲb層の礫が混じる褐色土中心である。

第3節 土器埋設遺構

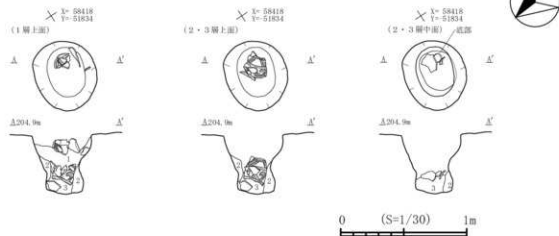
第1号土器埋設遺構（BSR-01：図30、写真11・22）

【位置・確認】VE-141グリッドに位置している。ほぼ平坦面の第Ⅲ層下面で確認した。

【埋設状況・堆積土】深鉢土器を倒立させた状態で埋設したものと考えられるが、土器自体は破損して出土している。掘り方は、開口部が径47×56cmと広がっているが、中段から径29×40cmと狭くなる。確認面からの深さは46cmである。堆積土（埋土）は3層に分層した。第1層は黒褐色土であり、第2層は土器を埋設した後に壁と土器の隙間に充填された暗褐色土であると考えられる。なお、第3層からは土器の底部が出土しており、元々埋設土器の上部に堆積していた土が土器が破損した際に底部とともに下部に崩落した可能性がある。

【出土遺物】埋設されていた深鉢形土器（図30-1）は縄文時代後期前葉（十腰内Ⅰ式）に相当する。口縁部と胴部下の一部分が欠損しているがほぼ完形状態に復元された。胴部上半がわずかに膨らみ、口縁部が外反する器形である。口縁部は6単位の波状口縁である。胴部文様は胴部最大径部分を境に上下2段で構成され、上部にはS字状沈線と右傾の斜沈線が連結する入組波状文および弧状充填文、下部には鋸歯状文が施文されている。沈線は区画沈線が2条単位、他は3条単位である。また、第1層からは壺形土器と思われる十腰内Ⅰ式の土器破片が1点出土している（図30-2）。石器は第

第1号土器埋設遺構



第1号土器埋設遺構(BSR-01)

第1層 赤褐色土 10192/3 円礫(φ1~10mm)3%、炭化物粒(φ1~5mm)1%
 第2層 暗褐色土 10193/4 円礫(φ2~15mm)3%、炭化物粒(φ2~10mm)1%
 第3層 赤褐色土 10193/2 円礫(φ3~30mm)5%

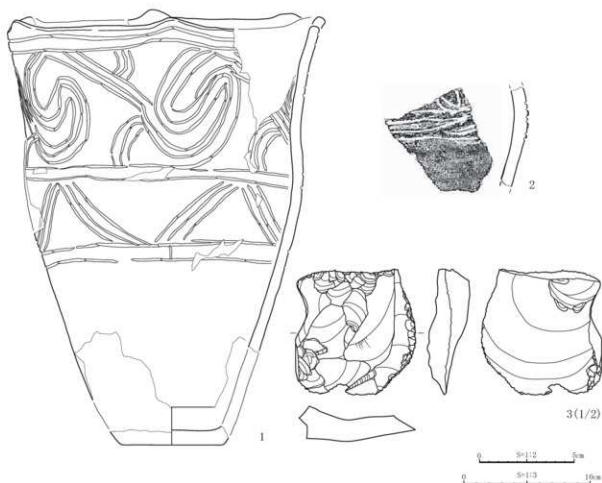
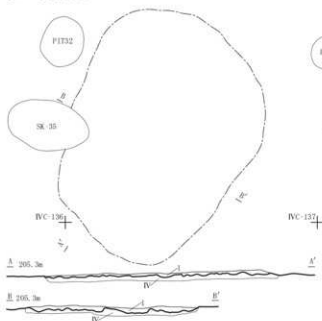


图30 B区第1号土器埋設遺構・出土遺物

第1号硬化面



第1号硬化面(硬-1:BSI-03)

第1層 暗褐色土 10YR3/4 暗褐色土(10YR4/6)5%, 10YR5/6黄褐色土5%,
炭化物粒(φ1mm以下~1mm)1%

第2号硬化面(硬-2:BSI-06)

第1層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物粒(φ1~2mm)2%,
暗褐色土(10YR2/3)30%, 黄褐色土(10YR5/6)10%,
炭化物粒(φ1~2mm)1%
第2層 暗褐色土 10YR2/3 黄褐色土(10YR5/6)20%, 炭化物粒(φ1~2mm)1%
第3層 暗褐色土 10YR2/3 暗褐色土(10YR2/3)5%, 暗褐色土(10YR2/3)5%,
炭化物粒(φ1~2mm)1%
第4層 暗褐色土 10YR2/3 暗褐色土(10YR2/3)5%,
暗褐色土(10YR2/3)5%, 炭化物粒(φ1~2mm)1%
第5層 暗褐色土 10YR2/3 暗褐色土(10YR2/3)5%,
暗褐色土(10YR2/3)5%, 炭化物粒(φ1~2mm)1%
第6層 暗褐色土 10YR3/4 暗褐色土(10YR5/6)10%, 炭化物粒(φ1~2mm)1%
第7層 暗褐色土 10YR3/4 暗褐色土(10YR5/6)5%

第2号硬化面

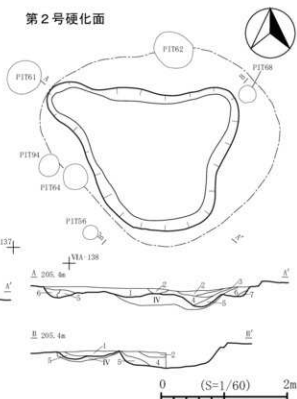


図31 B区第1・2号硬化面・出土遺物

1層から出土した削器1点(図30-3)である。

[時期] 埋設された土器から縄文時代後期前葉(十腰内I式)に帰属する遺構であると考えられる。

第4節 その他の遺構

1 硬化面

第1号硬化面(BSI-03:図31、写真11)

VIC-137グリッドに位置し、ほぼ平坦面の第Ⅲ層下面で確認した。調査時には堅穴住居跡として調査したが、炉や柱穴等は検出しなかった。第35号土坑と重複し、本遺構が古い。硬化範囲は、長軸4.0m、短軸3.2mの不整形形状であり、面積は9.5m²である。硬化面は1~3cm程度が硬化しており、硬化面下の第Ⅳ層には凹凸が確認できることから、黒色土等を貼り床状に充填して踏み固めた可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

第2号硬化面(BSI-06:図31、写真11)

VIA-138グリッドに位置し、ほぼ平坦面の第Ⅲ層下面で確認した。調査時には堅穴住居跡として調査したが、炉や柱穴等は検出しなかった。PIT62・64・68・94と重複し、PIT56・61が隣接する。本遺構はいずれのピットよりも古いか同時期であると考えられる。硬化範囲は、長軸径3.8m、短軸

径3.2mの不整形形状であり、面積は86㎡である。また、硬化面を掘り下げると長軸径3.2m、短軸径2.6mの落ち込みを検出した。落ち込みの深さは最大で35cmあり、平面形は不整形である。本々あった落ち込みに黒色土や粘土等を充填して踏み固めた可能性が考えられる。遺物は、第1層から十腰内1式土器の小破片8片が出土し2点を図示した(図31-1・2)。石器は覆土中から二次加工剥片2点が出土した。

2 小ピット (図32・33、表6、写真22)

小ピットは調査区全域にわたって83基検出した。確認面は、調査区中央部より東側は第Ⅲb層上面、西側はⅢ層下面である。開口部規模は50cm前後、深さは40cm前後のものが最も多い。堆積土は、調査区中央部より東側は第Ⅲa層相当の礫混じりの黒色土、西側は第Ⅱ層相当の黒色土中心である。遺物が出土した小ピットも数基あるが、時期は縄文時代後期前葉にかけての土器片が多い。なお、遺物が出土していない小ピットの帰属時期は不明であるが、堆積土の様相や掘り込み面などから、周囲の遺構に近い時期であると考えられる。個々の小ピットにおける基礎データ及び変更・欠番などの詳

表6 B区小ピット属性表

検出番号	計測値			アソシ	備考(出土遺物・産物等)	検出番号	計測値			アソシ	備考(出土遺物・産物等)
	開口径(cm)	長さ(cm)	深さ(cm)				開口径(cm)	長さ(cm)	深さ(cm)		
PT1	60×48	28×28	40	VX-136	覆土から十腰内1式等土器2片、石器	PT150	SR-04P09に欠番				
PT2	56×50	32×26	40	VX-136	覆土から十腰内1式等土器1片、二次加工剥片	PT151	SR-04P09に欠番				
PT3	90×84	46×52	42	VX-135	覆土から十腰内1式等土器1片	PT152	SR-04P10に欠番				
PT4	50(1×66)	28×24	50	VW-137	SK-17上取新	PT153	SR-04P11に欠番				
PT5	62×56	34×28	12	VX-136		PT154	SR-04P12に欠番				
PT6	40×28	18×16	50	VX-136		PT155	SR-04P09に欠番				
PT7	50×46	34×14	36	VX-135		PT156	SR-04P07に欠番				
PT8	54×50	18×14	18	VX-135		PT157	SR-04P04に欠番				
PT9	30×24	18×16	16	VX-134		PT158	SR-04P12に欠番				
PT10	20×18	10×8	36	VX-134		PT159	52×45	14×10	36	VV-138	
PT11	48×40	28×26	24	VX-134	覆土から十腰内1式等土器5片、石器	PT160	37×36	28×22	14	VV-138	
PT12	82×68	26×14	20	WA-134		PT161	55×51	14×12	32	WA-137	
PT13	50×44	44×32	36	VW-136		PT162	43×26	26×24	18	WA-138	覆土から縦林式土器1片
PT14-1	144(1×38)	18×14	30	VX-137		PT163	40×40	30×24	4	VV-138	
PT14-2	46×34	20×12	6	VW-137	覆土から十腰内1式等土器5片	PT164	40×40	16×14	36	WA-138	
PT14-3	34×28	22×20	14	VW-137		PT165	47×44	22×16	37	VW-138	
PT15	88×74	20×20	24	VX-134	覆土から十腰内1式等土器6片	PT166	SR-01に欠番				
PT16	SR-01P09に欠番					PT167	52×45	24×22	26	WD-141	
PT17	SR-01P10に欠番					PT168	55×48	24×18	46	WD-141	
PT18	SR-01P09に欠番					PT169	46×45	36×30	28	WD-141	
PT19	60×50	32×10	36	VX-138		PT170	60×31	44×36	10	WA-137	
PT20	62×50	14×12	36	VX-138		PT171	52×45	24×20	13	VV-143	
PT21	欠番					PT172	67×54	26×20	42	VV-142	
PT22	41×50	36×32	26	VX-138		PT173	40×34	30×20	28	WD-141	覆土から成層状土器2片
PT23	68×60	30×28	20	VX-138		PT174	29×26	12×10	16	WD-141	覆土から十腰内1式等土器2片
PT24	44×42	30×16	36	VW-139		PT175	40×29	26×18	20	WG-141	
PT25	欠番					PT176	50×41	26×24	26	WD-141	
PT26	72×64	46×20	36	VX-147		PT177	56×46	29×22	26	VV-143	
PT27	68×66	22×20	48	VX-147	覆土から成層状土器2片	PT178	46×35	24×20	31	VV-144	
PT28	46×40	28×20	44	VW-141		PT179	72×60	28×28	56	VV-145	
PT29	78×60	36×30	42	VW-141		PT180	73×60	38×32	44	VV-145	
PT30	52×42	14×14	32	VW-149		PT181	72×68	38×34	26	WD-142	
PT31	54×46	38×26	34	MC-142		PT182	48×48	28×24	22	WD-138	
PT32	81×66	40×30	38	MC-137		PT183	欠番				
PT33	74×68	46×24	26	WD-137		PT184	56×50	24×22	39	WD-136	
PT34	53×42	18×16	76	VW-146		PT185	32×28	22×20	13	WD-138	
PT35	56×44	32×28	20	VW-146		PT186	54×26	24×12	12	WA-138	
PT36	SR-56に欠番					PT187	16×16	6×6	21	WA-137	
PT37	72×58	44×28	26	MC-142		PT188	26×24	22×20	4	WA-138	覆土から縄文中期末葉～後期前葉土器1片
PT38	54×42	32×24	56	VW-136	覆土から縦林式土器7片	PT189	58×50	38×34	19	VV-136	
PT39	64×52	146(1×34)	36	VW-149		PT190	72×54	30×24	22	WG-137	
PT40	54×54	32×22	25	VW-149		PT191	90×68	40×32	30	WA-138	覆土から十腰内1式等土器11片
PT41	43×42	24×18	20	VW-149		PT192	78×66	30×24	50	VQ-144	
PT42	54×30	34×14	65	VW-149		PT193	70×36	44×20	40	VU-147	
PT43	44×42	180(1×24)	42	VW-149		PT194	80×52	62×46	14	VX-135	SK-09から変更、SK-02・03上取点
PT44	55×33	34×18	28	VW-149		PT195	60×28	30×40	16	VX-136	SK-19から変更、SK-01・02上取点
PT45	33×28	18×14	32	VW-138		PT196	欠番				
PT46	52×49	22×18	41	VW-138		PT198	80×62	96×48	30	VV-141	SK-44から変更
PT47	83×55	68×32	20	VX-148		PT199	78×74	52×50	24	VV-144	SK-46から変更
PT48	55×36	26×20	30	VX-148		PT200	86×66	42×34	12	WA-144	SK-03から変更
PT49	53×38	18×16	26	VW-149							

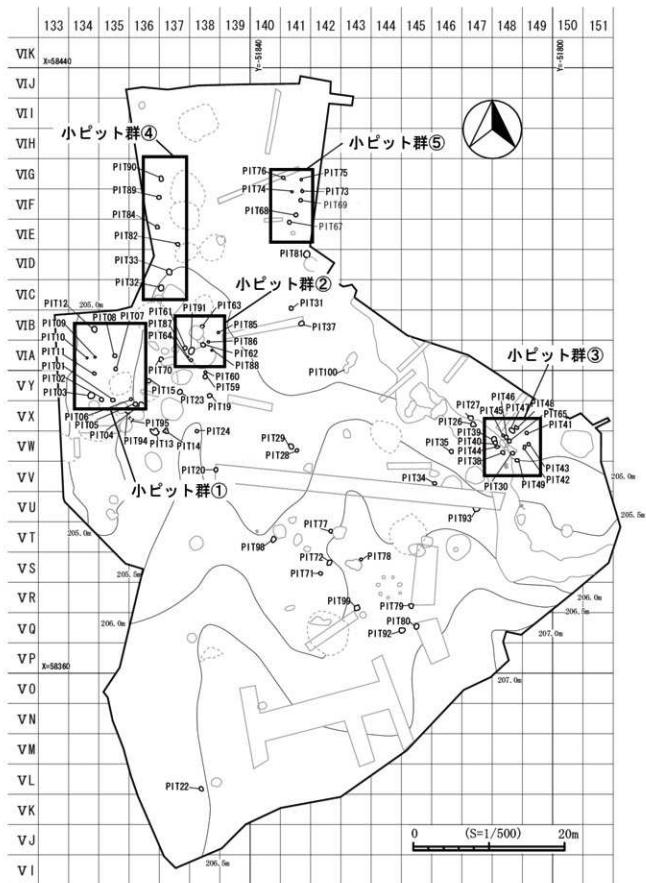


図32 B区小ビット配置図

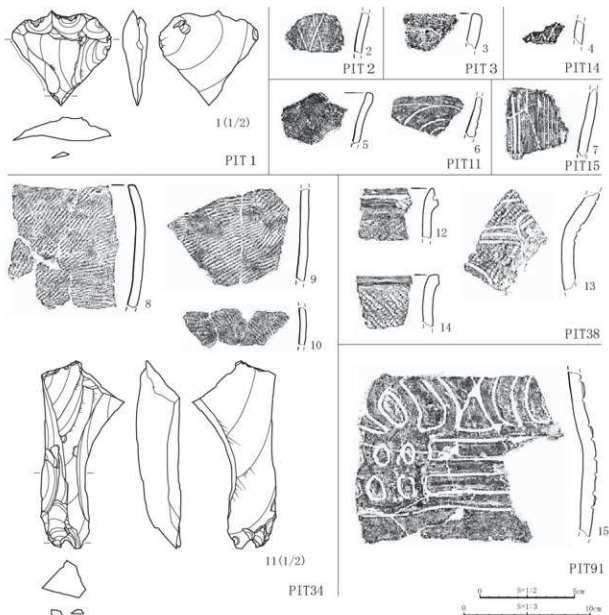


図33 B区小ピット出土遺物

細については表6にまとめた。

また、規則的な配置が見られる小ピットや、他の遺構に隣接する小ピットについては、小ピット群①～⑤ということで抜き出し、詳細について記述していくこととする。

小ピット群①

直線的な配置になる小ピットが複数集集中する群である。まず、東西にPIT06・01・02・03（約5m）、南北にPIT03・11・09・12（約9m）とPIT01・07・08（約5m）がそれぞれ直線上に並ぶ。開口部径は50cm、深さは40cmを超えるしっかりとした小ピットが多く、PIT02・03・11の堆積土中からは縄文時代後期前葉を中心とした遺物が出土している。建物跡とするにはややピット間の間隔が不規則であると思われる。なお、PIT03覆土中から出土した炭化物の炭素年代測定を行った結果、 1σ 2098BC-2039BC（52.5%）、 2σ 2142BC-2030BC（93.8%）を示した（第3編第2章）。

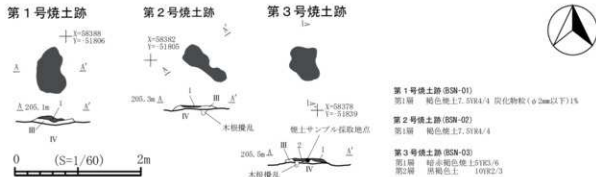


図34 B区焼土跡

小ピット群②

他の遺構との関連性が考えられる小ピット群である。まず、PIT60・61・62・64・86・87・88・91は第2号硬化面に重複または隣接する。位置は、第2号硬化面の北西側に集中し、開口部径は16～90cm、深さは8～39cmとばらつきがある。竪穴住居跡と考えるにはやや規則性に欠ける。次に、PIT63が第20号土坑に隣接する。PIT62・88・91の堆積土中からは縄文時代中期後葉や後期前葉を中心とした遺物が出土している。

小ピット群③

小ピットが弧状に配置される群である。やや不規則であるがPIT30・41・42・43・45・46・47・48・65である。第30・31号土坑も含めて関連性が考えられる。開口部径は30～64cm、深さは20～58cmとしっかりとした小ピットが多い。南西側にはPIT39・40・44・38・49がほぼ直線上に連なり、第1号焼土跡も隣接する。PIT38の堆積土中からは縄文時代中期後葉の遺物が出土している。

小ピット群④

直線的な配置になる群である。まず、南北にPIT84・89・90(約6m)、南北からやや東側に軸がずれてPIT32・33・82(約6m)がそれぞれ直線上に並ぶ。開口部径は48～81cm、深さは19～39cmとしっかりとした小ピットが多い。すぐ東側に風倒木痕が3基並ぶため、関連する遺構が壊されている可能性も考えられる。なお、いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

小ピット群⑤

直線的な配置になる群である。やや蛇行するが、南北にPIT67・68・69・73・75(約6m)が直線上に並ぶ。開口部径は28～48cm、深さは17～44cmとしっかりとした小ピットが多い。列状に並ぶ小ピット群の南側には第1号土器埋設遺構がある。PIT73・74の堆積土中からは縄文時代後期前葉の遺物が出土している。

3 焼土跡

焼土跡は3基した。いずれの焼土跡も基本層序の第Ⅲ層相当が被熱している。以下、それぞれの焼土跡について被熱規模等の記述を行う。

第1号焼土跡 (SN-01: 図34、写真11)

VV-148グリッドに位置し、沢1が埋没した後の第Ⅲ層相当で検出した。被熱の規模は約75×48

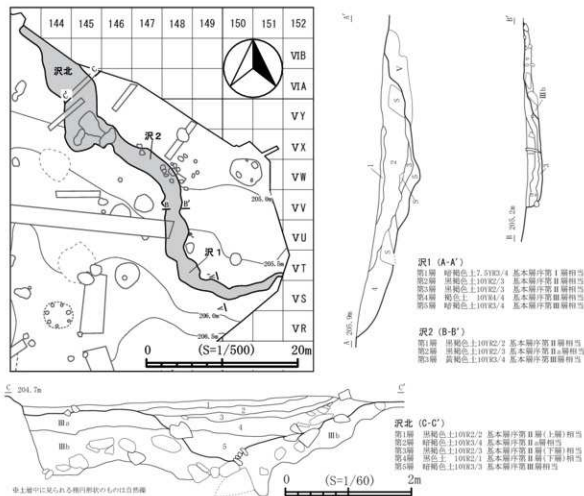


図35 B区埋没沢

cmの楕円形で、被熱の深さは約9cmである。北側には第30・31号土坑及び小ピット群③が隣接する。

第2号焼土跡 (SN-02 : 図34)

VU-148グリッドに位置し、基本層序第III層下面で検出した。被熱の規模は約80×33cmの楕円形で、被熱の深さは約3cmである。焼土の発達は弱い。すぐ南側には第7号土坑が隣接する。

第3号焼土跡 (SN-03 : 図34、写真11)

VT-140グリッドに位置し、基本層序第III層下面で検出した。被熱の規模は約60×53cmの不整形形で、被熱の深さは約5cmである。本遺構のすぐ東側の遺構外からは縄文時代中期後葉～後期前葉にかけての遺物がまとまって出土している。また、焼土層である第2層から土壌を採取し、水洗選別して確認された種実(炭化種実)を同定分析したところ、ツユクサが1点確認された(第3編第3章)。

第5節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、埋没沢からの出土が多数を占める。埋没沢は調査時に沢1～3の番号を付した(図35)が、沢内部から出土した遺物は、人為的に廃棄されたような痕跡はなく、沢が埋没する際に遺物と土砂と一緒に流入したものであると考えられる。

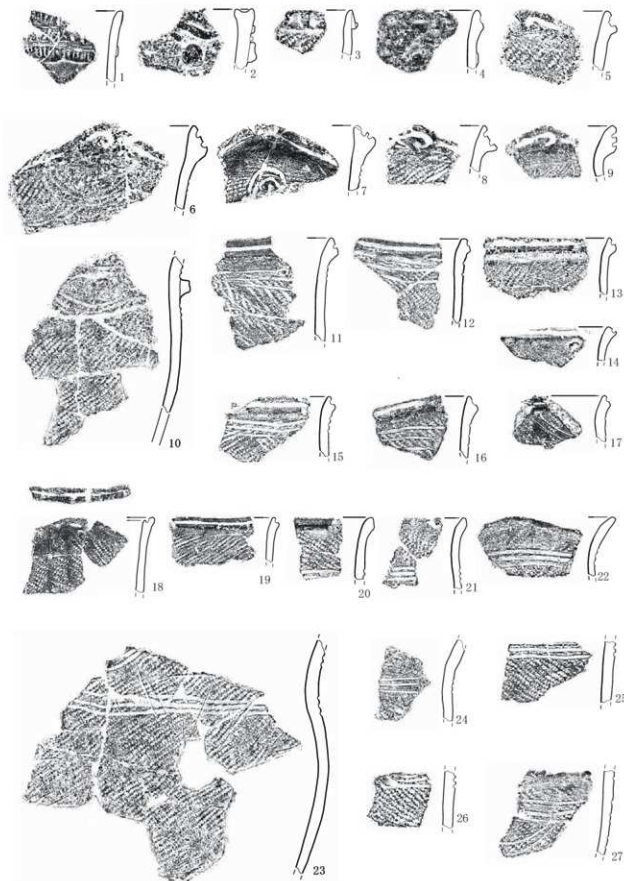


图36 B区遺構外出土遺物(1)

なお、沢1・2より出土した遺物の層位は、調査時の層位をそのまま用いるため、埋没沢の土層図(図35)を参照いただきたい。また、埋没沢の層位が基本層序の何層相当になるかは、土層図の注記に示した。

1 土器

遺構外から出土した土器の総重量は約26,252gである。復元個体は少なく、多くが破片資料である。時期別の土器の割合は縄文中期後葉の榎林式と後期前葉の十腰内I式が主体を占め、次いで縄文後期後葉から晩期の土器が多い。この他、縄文中期前葉から後期初頭の土器などが少数認められる。出土地点は、埋没沢からの出土が最も多く、第2号竪穴住居跡付近、小ピット群⑤付近などからも集中して出土している。

図36-1は円筒上層b式に相当する土器である。口縁部は外反し、波状口縁である。口縁部文様帯は隆帯で区画され、撫糸圧痕文と馬蹄形状の押圧文が施文されている。

図36-2・3は円筒上層d・e式に相当する土器である。2は口縁波頂部に突起をもつもので、波頂部下には弧状の隆帯文とボタン状貼付文が認められる。地文は単節LR原体の横回転施文である。3は口縁部が断面三角形に肥厚しているもので、波状の隆帯文が認められる。口縁部は無文で、胴部は単節LR原体の横回転施文である。

図36-4～27、図37-1～8は榎林式に相当する土器である。口唇部は外端部が肥厚する特徴があり、凹縁文が施文されるもの(図36-4～19)と、凹縁による施文が認められず、横方向のナア・ミガキ調整のみのもの(図36-20・21、図37-1～8)がある。前者は口縁波頂部に凹縁による渦巻文が施文されている。図36-18は口唇部の内端寄りに凹縁文が施文される例外的な資料で、波頂部において特にアクセントとなる文様は描出されていない。図36-22は口縁部が大きく外反するもので、口唇部は外傾するが、他と比較して顕著な肥厚がみられず、最花式に相当する可能性もある。胴部文様は、地文縄文に2～3条単位の沈線による横位区画文・弧線文が施文されるものや地文縄文のみのものなどがある。図36-7の胴部には波頂部下に沈線による渦巻文が施文されている。この他、胴部にはボタン状貼付文が認められるものもある(図36-6・10同一個体、図36-4)。地文は単節LR・RLが多く、他に無節、0段多条なども認められる。縄文原体の回転施文方向は横・縦・斜回転のものがある。

図37-9・10は最花式に相当する土器である。いずれも地文縄文に3条単位の沈線による懸垂文が施文されている。地文縄文は9が単節RL原体、10が単節LR原体で、いずれも横回転施文である。

図37-11～16は大木10式併行期の土器である。11・12は波状口縁で、波頂部下の内外面に鱗状隆帯の貼付文がみられる。13は口縁部が1条の横位沈線により区画され無文帯となり、胴部には方形区画沈線と充填磨消縄文がみられる。15・16は胴部の磨消帯と磨消帯の接点部分に鱗状隆帯の貼付文がみられ、充填縄文に単節RL原体が用いられている。

図37-17～21、図38-1～7は縄文中期後葉から中期末葉の範疇で捉えられる土器である。地文縄文のみのものと無文のものがある。口縁部は内湾気味に立ち上がるもの(図37-17)、わずかに外反するもの(図37-18・19、図38-1)などがあり、口唇部形状は丸みを帯びているものが多い。図37-18・19は口縁部が幅の広い無文帯となる。縄文は単節RL・LR原体が多く、他に複節原体(図37-

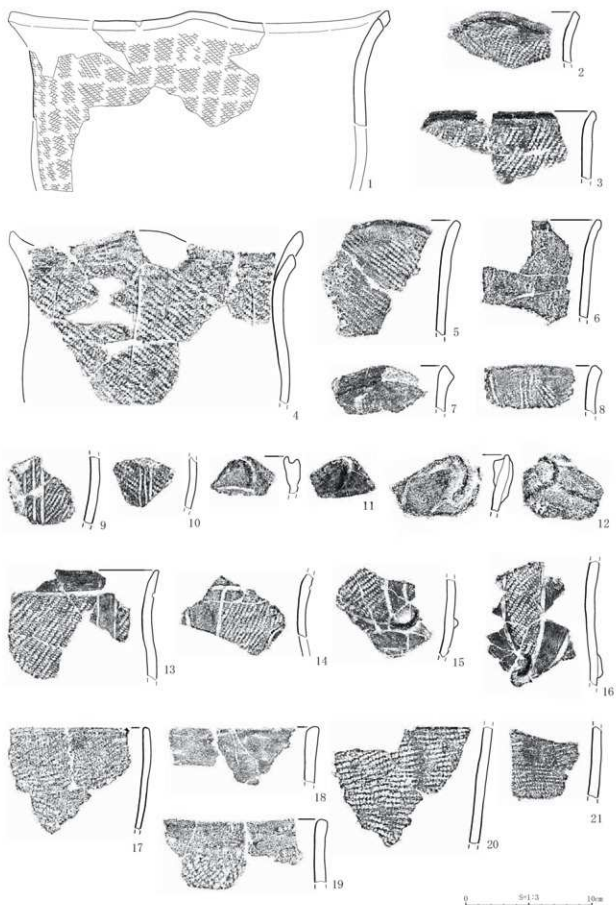


图37 B区遺構外出土遺物(2)

19)や単軸絡条体(図38-2・3・6)によるものも少数認められる。縄文原体の回転施文方向は横・斜回転のものがやや多く、縦回転のものもある。斜回転施文の場合、横走縄文(図37-20・21)と縦走縄文(図38-1)の双方が認められる。図38-7は底辺部が突出し、底部にはヘラ状の工具によるものとみられる調整痕が観察される。

図38-8～17、図39-1～28は十腰内I式に相当する土器である。器種は深鉢形土器が主体を占め、他に鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器などがある。全体的に焼成は良好で、堅緻なものが多い。

深鉢形土器は、口縁部が緩やかに外反し、波状口縁や折り返し状口縁のものが多く、口縁部および胴部の文様は隆沈線によるものや沈線によるものが主体的である。他に網目状撫糸文(図39-23)や無文(図39-24～28)のものなどがある。隆沈線による施文のものは、隆帯部分の反転文様として沈線部分が円形・楕円形の組み合わせ文様となるものが認められる(図38-8・9、図39-13)。沈線による施文のものは、円形文、楕円形文、S字状文、渦巻文、弧状文、格子状文などが認められる。沈線の条単位は2条のものがやや多く、3条のものも認められる。図38-17は口縁部が「く」の字状に大きく外反し、胴部には沈線による方形文がみられ、節の細かい単節LR原体が充填施文されている。

鉢形土器(図39-5・6)は、胴部上半が強く屈曲して膨らみ、口縁部が外反して立ち上がる特徴がある。5は波状口縁の波頂部下にいわゆる8字状の隆帯貼付文がみられる。口縁部文様は、B区土坑内出土の復元個体の土器(図27-1、図28-11)などと同様、口縁部に沿って円形文・楕円形文の組み合わせ文様が施文されている。

浅鉢形土器(図39-7)は、B区土坑内出土の土器(図27-17・18)と同様、口縁部が直立するように立ち上がる特徴がある。口縁部には隆沈線による三角形文、胴部には2～3条単位の沈線によるS字状文および弧状充填文が施文されている。

壺形土器(図39-8～10)はいずれも胴部破片で、全体的な形状は不明である。図39-8・9は沈線部分に赤色顔料付着の痕跡が認められる。図39-8は、B区土坑内出土の図27-21と同様、切断壺形土器の破片資料で、ヒゴ状工具の連続刺突による焼成前の切断痕跡が観察される。

図39-29・30は縄文中期末葉から後期前葉の範疇で捉えられる地文縄文のみの土器である。口縁部は外反し、口唇部が平坦に調整されるものが認められる。

図40-2は十腰内V群に相当する土器である。口唇部は平坦に調整され、口縁部に横位沈線と小さな貼瘤がみられ、単節LR原体が施文されている。

図40-3～7は縄文後期後葉の範疇で捉えられる土器である。口縁部は内湾して立ち上がる。口唇部は肥厚し、上面が平坦にミガキ調整されている。胴部は地文縄文のみのものや無文のものがある。上げ底状の底部資料も認められる。焼成は良好で堅緻なものが多い。胎土には粗砂粒が多く混入しているものが目立つ。

図40-8・9は大洞B式に相当する土器である。幅広の沈線による横位沈線と三叉文が施文されている。地文縄文には0段多条や単節の原体の横回転施文がみられる。8の器面に付着していた炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、 1σ 1130calBC-1055calBC(57.0%)、 2σ 1211calBC-1027calBC(95.4%)を示した(第3編第2章)。

図40-10は大洞BC式に相当する土器である。幅広の沈線による横位沈線と羊歯状文が施文されて

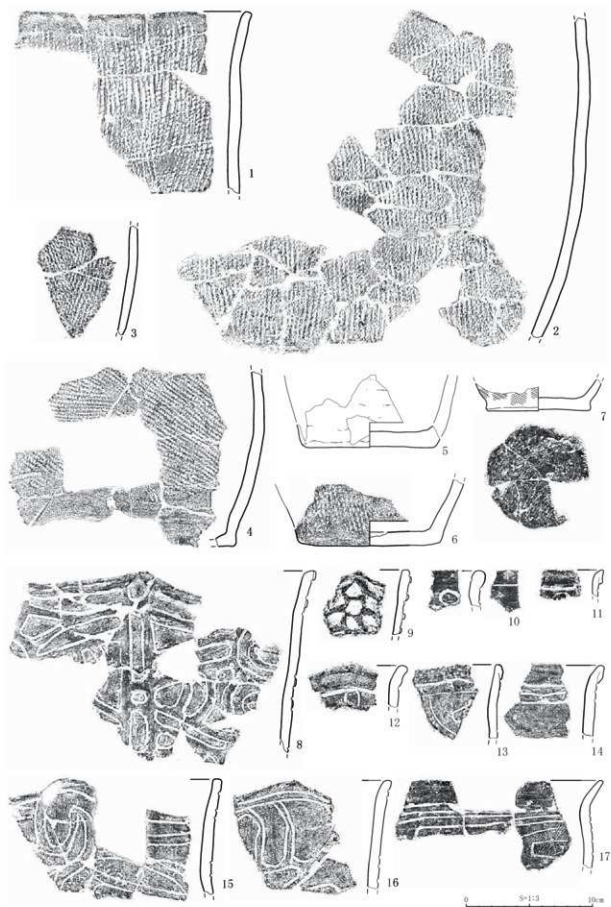


図38 B区遺構外出土遺物(3)

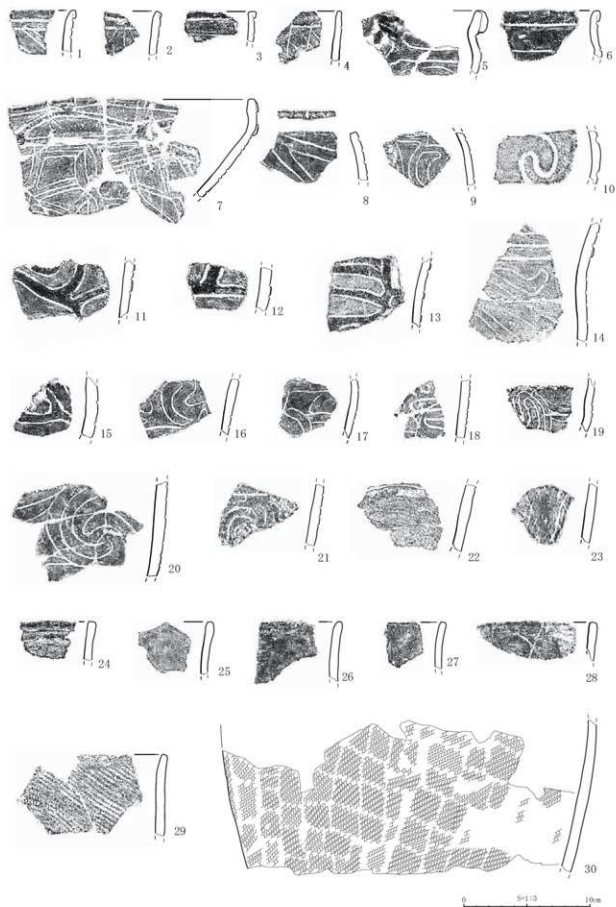


図39 B区遺構外出土遺物(4)

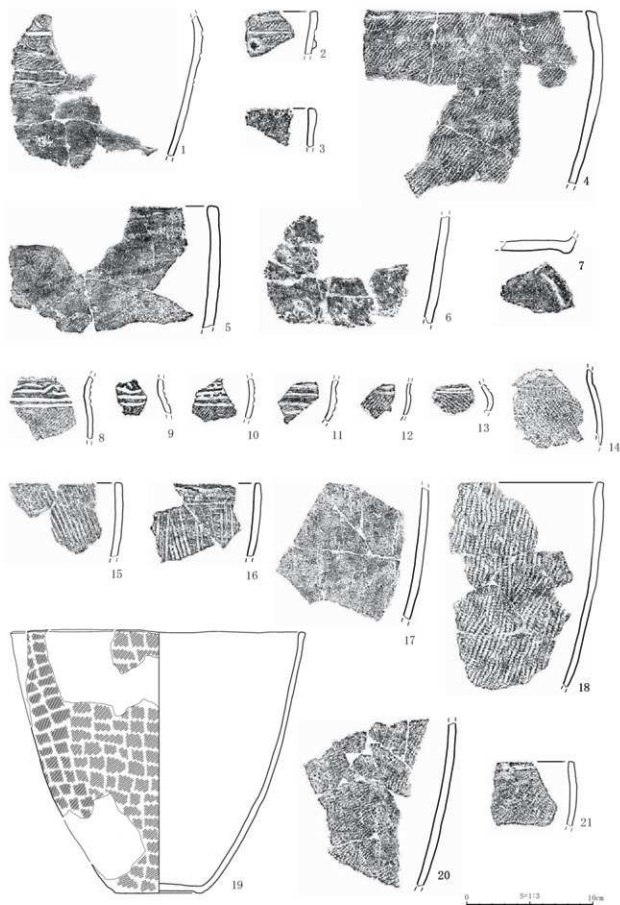


图40 B区遺構外出土遺物(5)

いる。地文は単節LR原体の横回転施文である。

図40-11～21は縄文晩期の範疇で捉えられる土器である。口縁部はわずかに内湾して立ち上がる。胴部には横位沈線や磨消縄文が認められるもの（11～14）、縦・斜位の条痕文が認められるもの（15～17）、地文縄文のみのもの（18～21）がある。19の器面付着していた炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、 1σ 1195calBC-1141calBC（40.0%）、 2σ 1213calBC-1052calBC（93.5%）を示した（第3編第2章）。図40-8と非常に近似した年代測定値である。

なお、図40-1は時期不明の土器で、胴部上半が屈曲して膨らむ深鉢形土器と思われる破片資料である。胴部の屈曲部付近には幅広い横位沈線が施文されており、横位沈線間には浅い沈線による粗雑な鋸歯状の文様が上下2段認められる。胴部上半には無節L原体が充填施文され、胴部下半は無文である。

2 石器

遺構外から出土した石器は大きく分けて、剥片石器類182点、石斧類3点、礫石器類24点、合計209点（総重量21942g）が出土した。出土地点は、沢1・沢2・沢北を合わせた埋没沢からの出土が目立った。その他、第2号竪穴住居跡付近、第3号焼土跡付近、小ピット群⑤付近から集中して出土している。出土層位は調査区西側ではⅡ・Ⅲ層、調査区東側ではⅡa・Ⅲa層からの出土が最も多い。その他、詳細な出土地点・層位、計測値、石材等については観察表にまとめた。以下、器種ごとに記載していく。

剥片石器類（図41・42）

剥片石器類は、石鏃2点、石槍1点、石筥6点、石錐7点、石匙1点、楔形石器1点、三脚石器1点、搔器3点、削器26点、石核7点、二次加工剥片71点、微小剥離痕のある剥片が56点、以上182点を本類で扱うこととし26点を図示した。なお、その他として、加工や使用した痕跡のない剥片は209点出土している。

石鏃（図41-1・2）はいずれも平基無茎鏃に分類されるが、作りは2の方が粗く、厚ぼったい。

石槍（図41-3）は長さが6.5cm程度の小型のものである。両面の調整は粗雑な印象を受ける。

石筥（図41-4～8）は器形の特徴から3つに分類できる。小型撥形類（5・6）、一端をつまみ状に作り出す類（7・8）、一端を尖頭状に作り出す類（4）である。4は、石槍とするには作りが厚ぼったく調整も粗い。7と8は背面にほとんど調整が入らないため、スクレイパー類という見方もできるだろう。

石錐は7点中4点を図示した（図41-10～13）。大きく分けて、錐部のみ二次加工したもの（11・13）、側縁に二次加工を施し成形したもの（10・12）がある。11・13はいずれも腹面のみを加工している。

石匙（図41-9）は縦形石匙としたが、つまみ部がやや斜位に作り出される特徴をもつ。調整は腹面の周縁と背面のつまみ部のみ顕著である。

楔形石器（図41-14）は上下両端の縁辺に剥離痕を形成し、剪断している様子が窺われる。

三脚石器（図42-9）は周縁を加工し平面形は三角状に成形し、背面を加工調整することで脚部をアーチ状に成形している。腹面の中央部は平坦になるように一部を成形し、断面形はアーチ状の三脚

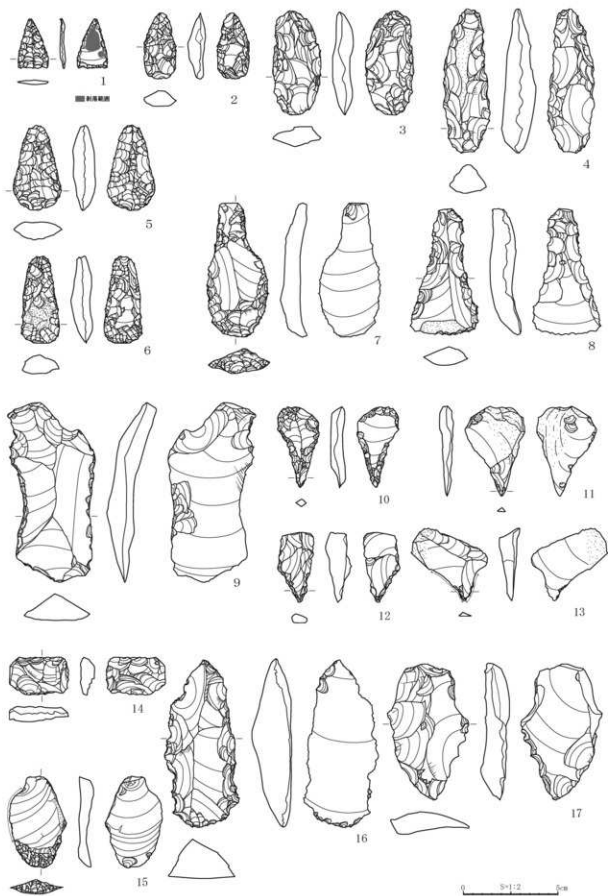


图41 B区遺構外出土遺物(6)

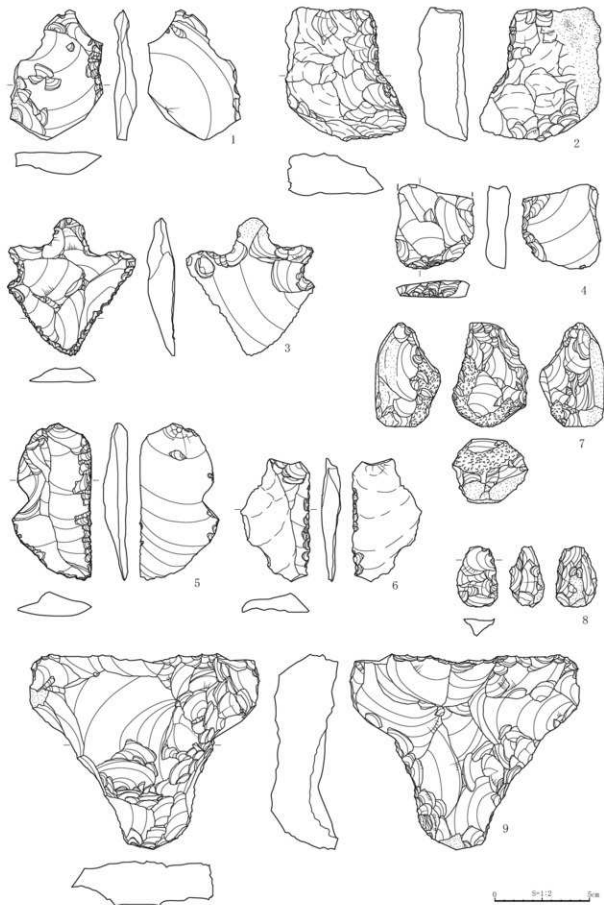


图42 B区遺構外出土遺物 (7)

で支える台形状の作りとなっている。

搔器は3点中2点を図示した(図41-15・図42-4)。いずれも末端に急角度の刃部を作り出している。15は一側縁に微小剥離痕を有する。

削器は26点中7点を図示した(図41-16・17、図42-1～3・5・6)。ほとんどが一側縁を加工して刃部を作り出しているが、3は周縁を加工した上、一部に抉りを作り出している。つまみ状の突起を有することから石匙という見方もできるだろう。

石核は7点中1点を図示した(図42-7)。背面は原礫面であり、周縁から剥片を剥ぎ取ったのち、敲き石に転用した痕跡がある。

二次加工剥片は黒曜石を使用したものを1点図示した(図42-8)。腹面と一側縁を加工している。また、図示しなかったが、二次加工剥片の中には、石錐未製品(7点)、石槍・石筈未製品(1点)、楔形石器未製品(3点)と思われるものも数点含まれている。

石斧類(図43)

石斧類は、磨製石斧3点が出土し、全て図示した(図43-1～3)。1は全面に敲打痕があり未研磨である。2と3は基部欠損後敲き石として使用した痕跡が見られる。

礫石器類(図43-45)

礫石器類は、磨り石1点、敲き石14点、凹み石4点、加工礫2点、石皿・台石類2点、砥石1点が出土し全て図示した。

磨り石(図43-4)は器面全体が摩耗しており、特に周縁が顕著である。

敲き石(図43-7～14、図44-1～6)は側縁・端部を使用するもの(10)と端部のみを使用するもの(7・8・9・11)、がある。また、球状の礫全体を使用するもの(13)、半面を使用するもの(12)、端部のみを使用するもの(14)がある。その他「敲き」と「磨り」の複合機能をもつもの(図44-1～6)も敲き石に分類した。5は球状の小円礫を使用している。

凹み石(図44-7・8、図45-1・2)は二面使用するもの(7・8・図45-2)、一面欠損しているため明確ではないが、一面のみ使用するもの(図45-1)がある。8は端部に敲打痕、図45-2は一面に擦痕がある。

加工礫(図43-5・6)は、扁平な円礫の1カ所に片面から剥離するものである。

石皿・台石類(図45-4・5)は原礫面をそのまま使用した石皿・台石である。5には明確な使用痕は見られないが、4には器面中央に敲打痕と擦痕が見られる。

砥石(図45-3)は一面を繰り返し研磨することによって擦り減った様子が窺える。

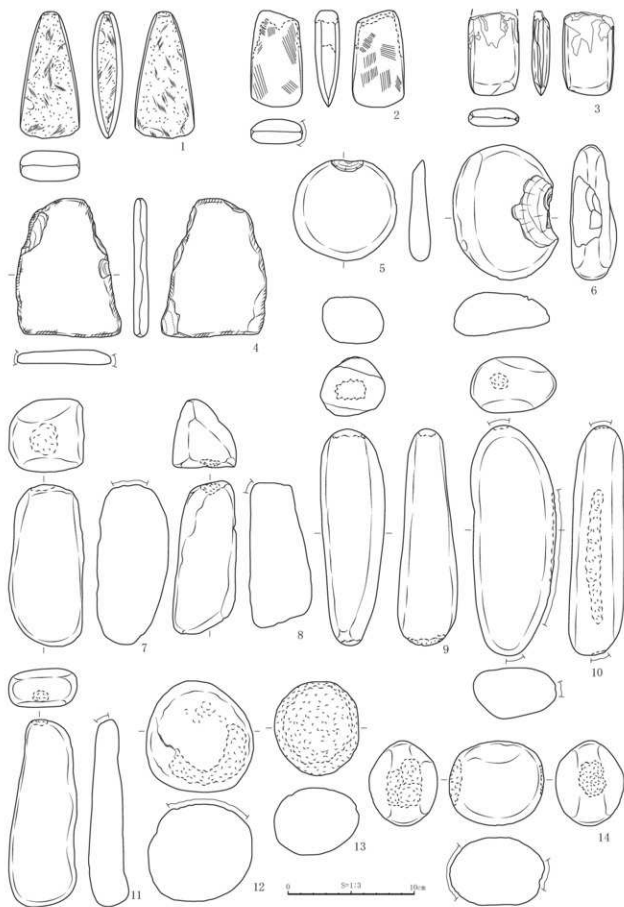


图43 B区遺構外出土遺物(8)

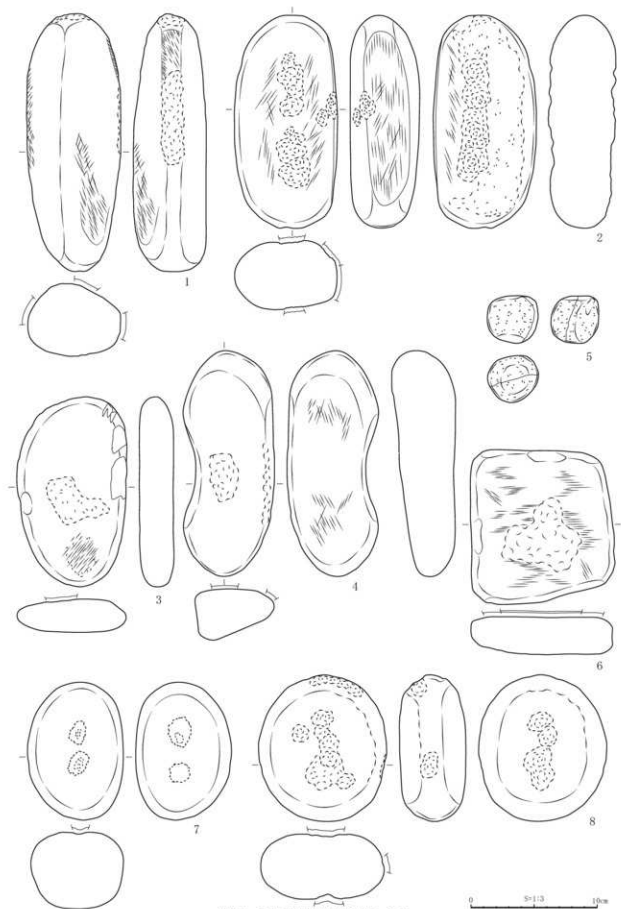


图44 B区遺構外出土遺物(9)

3 石製品

石製品は、有孔石製品1点、円盤状石製品1点が出土した。有孔石製品は第1・2・3号土坑付近の第Ⅲ層から出土している。円盤状石製品は沢1の第4層（基本層序第Ⅲ層相当）から出土している。その他、詳細な出土地点・層位、計測値、石材等については観察表にまとめた。以下、器種ごとに記載していく。

有孔石製品（図45-6）

板状の凝灰岩を素材とし、中央より端部に偏った位置に穿孔されるものである。形状は一端部側が破損しているため全体形は明確ではないが、長さは5～6cm程度、幅は3cmの隅丸長方形に近い楕円形になるものと思われる。穿孔は両側から行われており、断面形は真中が狭くなる。両面・側面には擦痕が明瞭に残存し、両面の縁辺部は面取りしたような痕跡も見られる。

円盤状石製品（図45-7）

円形の扁平礫を素材とし、全体を研磨して円盤状に成形している。両面及び側面には擦痕が残存する。



图45 B区遺構外出土遺物 (10)

第5章 B区西

概要

B区西は遺跡の南東部、県道28号線（岩崎西目屋弘前線）の南側に位置している。本調査を実施した調査区はIVJ～VC-102～107グリッドにあたり、国土座標ではX=58236～58308、Y=-51992～51972にあたる。調査区規模は、最大長約57m、最大幅約20m、面積は約800㎡であり、標高は208.8m～210.4mの河岸段丘上に立地している。B区が小規模な段丘の下段だとすると、B区西は一段上の上段となる。

調査は、平成22年度のみ実施され、トレンチにより遺構・遺物の有無を確認しながら進めたところ、北側から竪穴住居跡の炉と思われる焼土を検出した。これにより北側のみトレンチを拡張して本調査を実施することとなった。なお、南側は6本（約300㎡）のトレンチにより確認調査をしたが、遺物が数十点出土したのみで遺構は確認されなかった。

調査の結果検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡3件、土坑9基、土器埋設遺構1基、その他の遺構として小ピット15基である。

出土遺物は、縄文時代の土器・石器がほとんどである。遺構内では第2号竪穴住居跡覆土からの出土が多く、遺構外では散発的であるが埋没沢から出土したものがある。

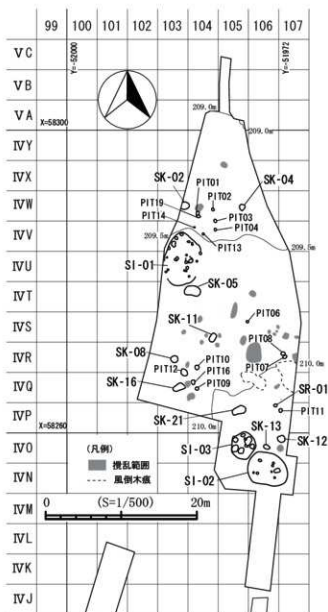


図46 B区西遺構配置図

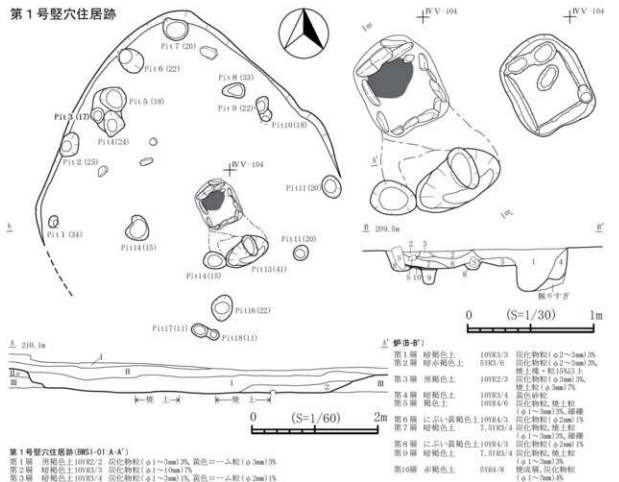
第1節 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡（BWSI-01：図47、写真12・27）

【位置・確認】IVU・V-103・104グリッドに位置する。トレンチ掘削作業中に第Ⅲ層中に焼土を検出した。平面的に明確な焼土であり、竪穴住居跡の炉として捉え精査した。

【平面形・規模】規模は東西方向に約5m、南北方向に約6mの大きさをもち、形状は不整形である。床面積は凡そ17.4㎡程とみられる。

第1号竪穴住居跡



- 第1号竪穴住居跡(ⅡS1-01 A-A')
- 第1層 暗褐色土 10YR2/2 炭化物粒(φ1~3mm) 3%, 黄色ローム粒(φ3mm) 3%
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物粒(φ1~10mm) 7%
- 第3層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物粒(φ1~3mm) 1%, 黄色ローム粒(φ3mm) 1%

(出土遺物集計表)

器種	縄文土器		石器				その他の遺物
	深鉢形	その他	刮片石器類	石斧類	礫石器類		
出土							
土	床面	23(149.5g)		1(15.3g)		1(7111.3g)	
数	その他	P11.3 : 4(41.2g)					

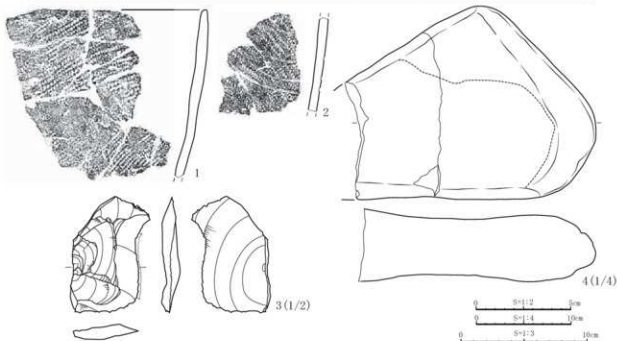


図47 B区西第1号竪穴住居跡・出土遺物

〔壁・床面〕南側の壁面を削平してしまったが、壁高は12～16cm程度である。床面はほぼ平坦で部分的に硬化しており、第Ⅳ層をそのまま床にしている。

〔炉〕炉は住居の南側に偏在してつくられている。前庭部をもつ石囲炉で、約50cm×70cmの長方形の掘り方に大きさ8cm～34cmの楕円形礫を13個配置している。礫面の被熱は明瞭で、その北端内部には約25cm×30cmの範囲で赤褐色の焼成面が検出されている。焼成層は厚く明確である。

〔ピット〕竪穴住居範囲内に18個の小ピットを検出している。これらの多数が柱穴として機能したもののと思われ、一部重複しているピットから柱穴が作り替えられている可能性もある。間隔は不規則であるが配置からみて、この内Pit 4・8・11・13・15が所謂主柱穴として機能したと思われる。また炉の南側につくられているPit13は最も深く斜めに掘られているもので、主柱穴の一部でありながら、さらに柱に付帯した他の機能を有していた可能性がある。また、石囲炉焼成面の下に、楕円形の深さ10cm程の小ピットを検出しているが、この小ピットの機能は不明である。

〔堆積土〕2層に分けられる。炭化物粒と焼土粒を混合させる黒色土と褐色土で、自然堆積層である。

〔付帯施設〕石囲炉の南端で、Pit13・14の間に硬化面を検出している。硬化は明瞭で炉の前庭部として捉えられるが、前述のPit13とも関連している可能性が考えられる。

〔出土遺物〕出土遺物は集計表に示したように、土器および石器ともに少ない。

図47-1は床面出土の土器でLRが、図47-2はPit13の覆土出土で弧状沈線と地文LRが施文されている。

石器は床面から微細な剥離のみられる二次加工剥片が1点(図47-3)と、台石が1点(図47-4)出土している。台石は石囲炉北側の組石である。ほかに破砕した扁平な礫が床面から4点出土しているが、顕著な使用痕跡はみられない。

〔時期〕出土遺物は少ないが、床面出土およびPit13出土土器から縄文時代中期後葉、榎林式期に帰属する可能性が考えられる。

第2号竪穴住居跡 (BWSI-02: 図48・49、写真13・27)

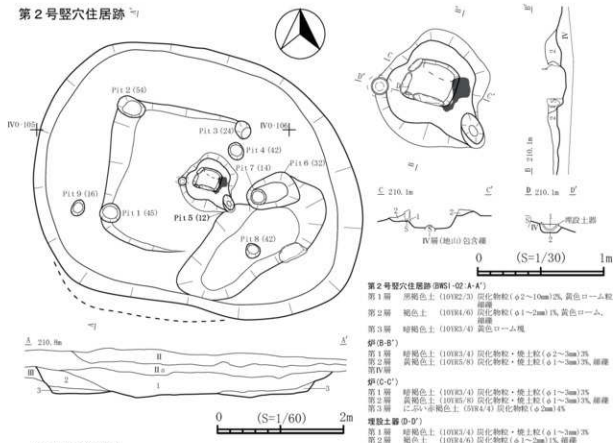
〔位置・確認〕IVN・O-106・107グリッドに位置する。第Ⅲ層面に土器を多量に包含した、黒色土の不整なプランで検出された。第3号竪穴住居跡に近接する。

〔平面形・規模〕東西方向に約5.4m、南北方向に約4.1mの大きさを持ち、形状は楕円形である。床面積は約13.3㎡である。

〔壁・床面〕掘り込み面は第Ⅱ層中と思われる、検出面からの深さ(壁高)は20cm～30cmである。住居の東側と炉周辺は第Ⅳ層面を床面としており、西側には段状施設と浅い掘り込みを検出した。

〔炉〕周堤を伴う石囲炉で住居のほぼ中央につくられている。約35cm×45cmの長方形の掘り方に、大きさ12cm～25cmの長楕円形礫を設置しており、掘り方の北側の礫を掘り下げ時に誤って取り上げてしまったが痕跡から、礫は東側が開いたコの字状に配置されていたようである。周堤は石囲炉を巡るようにある。住居の東側と炉周辺は第Ⅳ層面を床面としており、調査時にはこの上に黄褐色のローム質土が築かれているものと捉えたが、石囲炉周辺の第Ⅲ層を掘り残している可能性もある。

〔ピット〕竪穴住居内に9個の小ピットを検出しており、これらが柱穴として機能したもののと思われる。特にPit 1・2・3・8はほぼ同じ深さで、Pit 1とPit 8の間隔がすこし開くものの主柱穴として

第2号竪穴住居跡⁷⁾

第2号竪穴住居跡跡W51-02(A-A')

第1層 赤褐色土 (10182/3) 炭化物粒(φ2~10mm)2%, 黄色ローム粒

第2層 褐色土 (10184/6) 炭化物粒(φ1~2mm)1%, 黄色ローム、

層

第3層 暗褐色土 (10183/4) 黄色ローム塊

炉(B-B')

第1層 暗褐色土 (10183/4) 炭化物粒・焼土粒(φ1~2mm)2%

第2層 黄褐色土 (10185/8) 炭化物粒・焼土粒(φ1~3mm)3%, 層

第4層

炉(C-C')

第1層 暗褐色土 (10183/4) 炭化物粒・焼土粒(φ1~2mm)2%

第2層 黄褐色土 (10185/8) 炭化物粒・焼土粒(φ1~3mm)3%, 層

に赤い赤褐色土 (5184/4) 炭化物粒(φ2mm)4%

埋設土器(D-D')

第1層 暗褐色土 (10183/4) 炭化物粒・焼土粒(φ1~3mm)2%

第2層 褐色土 (10184/6) 炭化物粒(φ1~2mm)1%, 層

(出土遺物集計表)

器種	縄文土器		石器			
	深鉢形	その他(変形)	割片石器類	石斧類	石器類	その他の遺物
出土	493 (4618, 8g)	1 (50, 4g)	13 (486, 8g)	-	-	-
土	-	-	-	-	-	-
床面	-	-	-	-	-	-
敷	埋設: 11 (239, 7g)	-	-	-	-	-

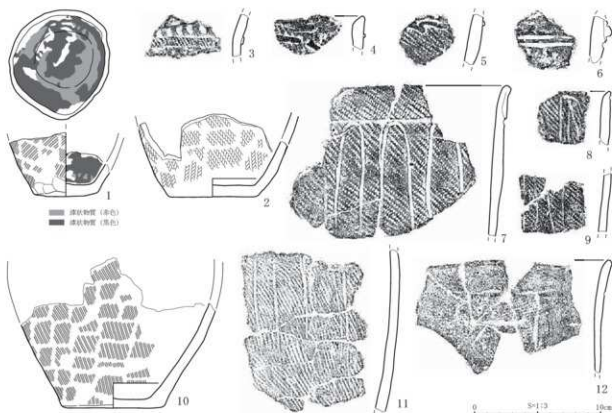


図48 B区西第2号竪穴住居跡・出土遺物

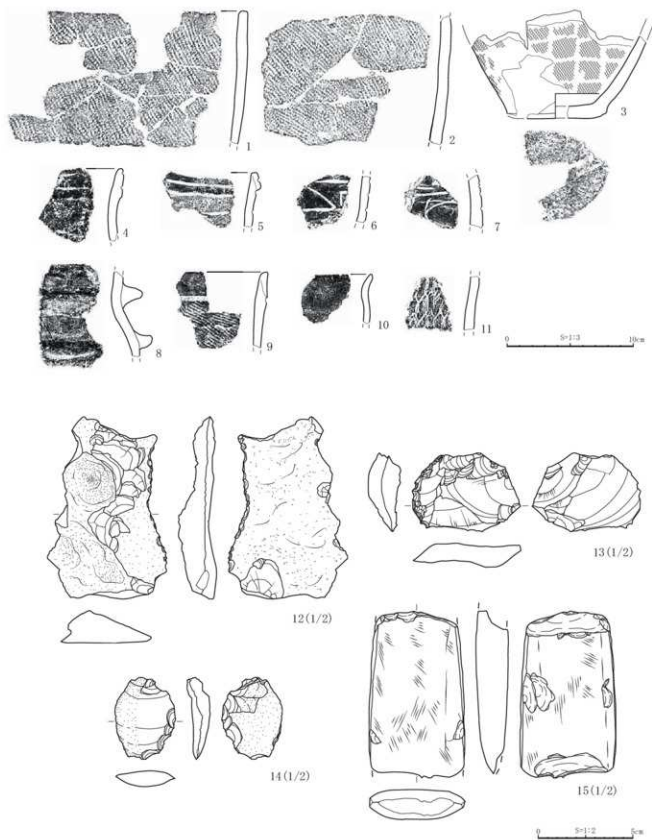
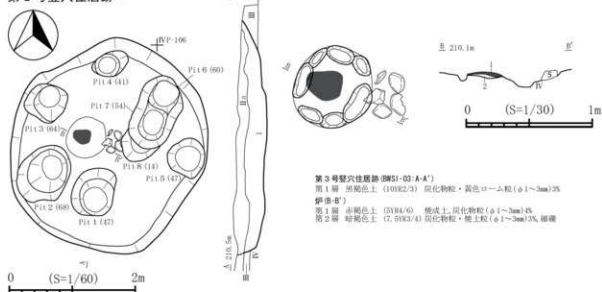


图49 B区西第2号竖穴住居跡出土遺物

第3号竪穴住居跡²⁾

第3号竪穴住居跡(断面1-031A-4*)

第1層 赤褐色土 (10)R2/3) 炭化物粒・黄色ローム粒(φ1~3mm)3%

炉(遺骨*)

第1層 赤褐色土 (5)R4/6) 堆積土,炭化物粒(φ1~3mm)4%

第2層 暗褐色土 (7,5)R3/4) 炭化物粒・堆土粒(φ1~3mm)3%, 燧石

(出土遺物集計表)

器種	縄文土器				その他の遺物
	深鉢形	その他	割片石器類	石器類	
出	28 (200.9g)	--	2 (64.9g)	--	--
土	--	--	--	--	--
床面	--	--	--	--	--
数	--	--	P11内: 1 (23.7g)	--	--



図50 B区西第3号竪穴住居跡・出土遺物

機能したと思われる。

【堆積土】3層に分けられる。炭化物粒と焼土粒を混合させる黒色土と黒褐色土で、第2・3層は自然堆積層と思われるほか、遺物を多量に混入する第1層は、一時期に土器の廃棄はみられるが自然堆積と捉えている。

【付帯施設】床面に埋設土器、段状施設と浅い掘り込みを検出している。埋設土器は石囲炉の南西隅につくられている。石囲炉を巡る周堤を約20cm程の円形に掘り込んだ掘り方に深鉢形土器の底部が設置されている。炉に付随して使用されたものと考えられる。段上施設は、住居の中央部から西側の壁際の床面が周堤石囲炉の周りより一段高くつくられている。段差は8cm~13cmである。コの字状の段状施設は、壁際から南側で60cm、北側で80cm、西側で1mの幅がある。浅い掘り込みは、不整な長楕円形で大きさが約1.2m×2.6mあり住居の東側に炉と接してある。この掘り込みの壁際から扁平な大型礫が出土しており、礫には特に明確な使用痕跡は見られなかったが使用されていた可能性もある。

【出土遺物】出土遺物は集計表に示した。土器は23点を図示した。これら土器の多くは、堆積土第1層からの出土である。図48-2は埋設土器で、RL縄文が施文される。図48-1～5は円筒上層式土器である。図48-6は榎林式、図48-7～11は最花式に比定される。7は折り返し口縁で、地文縄文（RL）に逆U字状懸垂文が施文されている。図48-12は太木10式併行期の土器と思われる。図49-4～7は後期前葉の十腰内I式土器で横位の沈線文が施されている。石器も土器と同様に、堆積土第1層より出土している。これら石器の内訳は剥片石器類の削器3点（図49-12～14）、石核1点、二次加工剥片7点、微小剥離痕のある剥片4点、石斧類の磨製石斧1点（図49-15）である。

【時期】本堅穴住居跡は、床面の埋設土器と段状施設をもつ住居の特徴から縄文時代前期末葉または中期初頭（円筒下層d式または円筒上層a式）に帰属すると思われる。堆積土第1層からは、縄文時代中期前葉から後期前葉までの土器が出土しており、この中でも中期後葉から後期前葉（最花式～十腰内I式）の土器が多く、本堅穴住居廃絶後に埋没途中に窪地利用の廃棄が行われているものと思われる。遺物廃棄の時期は第1号および第3号堅穴住居跡の帰属時期に概ね符号する。

第3号堅穴住居跡（BWSI-01：図50、写真14・27）

【位置・確認】IVN・O-105・106グリッドに位置し、第2号堅穴住居跡の北西に近接してある。黒色土の円形プランとして検出した。

【平面形・規模】東西方向に約3.1m、南北方向に約3.4mの大きさで、形状は歪な楕円形である。床面積は約66㎡で比較的小さい堅穴住居跡である。

【壁・床面】壁高は20cm程度であるが、掘り込みは第II層からであると考えられ、本来は40cm～50cmの深さがあったものと思われる。床面はほぼ平坦で第IV層をそのまま床にしている。

【炉】住居の中央からやや西よりに、30cm程の範囲で不整な形状の焼土を検出した。焼土の周囲には黒色土がドーナツ状に巡り、東側に大きさが20cm以内の礫が5個まとまっていた。黒色土の大きさは約70cmの歪な円形で、当初は浅く掘り窪めた内で火が焚かれた地床炉として捉えた。焼土は4cm程の厚さがあり、黒色土を撤去したところ礫を抜き取った痕跡を確認した。楕円形の抜き取り痕で、7個程の礫がほぼ円形に設置されていたようである。焼土の脇にまとまっていた5個の礫が抜き取られた炉石であった可能性があるが、礫の被熱の有無までは確認していない。

【ピット】堅穴住居内に8個のピットを検出している。これら内、深さの浅いPit 8と深い重複するPit 7を除いたPit 1～Pit 6の距離（底面中心間）は、Pit 1～Pit 2の間が85cmと狭く、Pit 1～Pit 5の間が1.6mと開くが、残るPit 2～Pit 5の間は1mと1.1mで近似し、Pit 1～Pit 7までが配置と深さから柱穴であったものと思われる。これらピットは他の堅穴住居跡の柱穴と比べて規模が数段大きく、堅穴として掘られた本住居のプランと比べても大きい。本ピットだけを見ると寸詰まりな6本柱の亀甲形の掘立柱建物跡と類似する。

【堆積土】炭化物粒と黄色ローム粒を含む黒褐色土の単一層で、自然堆積層と思われる。

【出土遺物】出土遺物は集計表に示したとおり少ない。土器は3点を図示した。図50-1は刺突と沈線が施されるもので最花式に比定されるものと思われる。図50-3は0段多条が施文される粗製土器で、口唇は平坦に面取り整形されている。図50-2は薄手で節の細かなLRにより縦走縄文が施文されており、晩期の可能性がある。



図51 B区西土坑・出土遺物

出土石器の器種内訳は、剥片石器類の二次加工剥片1点、微小剥離痕のある剥片1点である。また、どのピットであるか不明だがピット内から二次加工剥片1点(図50-4)が出土している。

[時期] 床面出土遺物が無く時期を特定できない。堆積土出土遺物から縄文時代中期後葉以降のものと思われる。竪穴のプランに比べ柱穴と考えられるPitの占める割合の大きな特異な住居形態である。

第2節 土坑(図51、表7、写真15・16・28)

土坑は9基検出した。他の遺構に変更になったり、土坑と断定できず欠番になったりしたものは表7の「土坑属性表」に示した。また、個々の土坑における基礎データ(位置・規模・出土遺物等)及び図版番号、写真番号等も表7に示した。以下、分類(第2編第2章)毎に記述することとする。なお、A類に分類された土坑はなかった。

表7 B区西土坑属性表

遺構名	分類	計画値			グリッド	遺物出土状況		遺構 図版	遺物 図版	写真 図版	新旧関係	備考 (埋戻時期など)
		開口部(cm)	底面部(cm)	深さ (cm)		土器(層土中)	石器					
第1号土坑	擾乱に要変											
第2号土坑	BⅡ	1160×92	101×71	19	IVF-103 IVF-104	—	—	図51	—	写真15		
第3号土坑	擾乱に要変											
第4号土坑	CV	85×74	39×36	25	IVF-105	—	—	図51	—	—		
第5号土坑	BⅡ	210×124	145×96	43	IVF-103 IVF-104	唐花式等19片	—	図51	図51	写真15		縄文中期後葉?
第6号土坑	擾乱に要変											
第7号土坑	擾乱に要変											
第8号土坑	CV	94×92	53×39	17	IVF-103	—	—	図51	—	写真16		
第9号土坑	擾乱に要変											
第10号土坑	擾乱に要変											
第11号土坑	BⅡ	119×76	89×63	38	IVF-104	唐花式5片	—	図51	図51	写真15・28		縄文中期後葉
第12号土坑	CV	102×92	81×72	23	IVF-106 IVF-107	—	—	図51	—	—		
第13号土坑	BⅡ	88×56	78×46	17	IVF-106	—	—	図51	—	写真15		
第14号土坑	擾乱に要変											
第15号土坑	擾乱に要変											
第16号土坑	BⅣ	150×83	90×51	50	IVF-103	縄文中期後葉1片	—	図51	—	写真16		縄文中期後葉
第17号土坑	擾乱に要変											
第18号土坑	擾乱に要変											
第19号土坑	擾乱に要変											
第20号土坑	擾乱に要変											
第21号土坑	BⅡ	185×96	143×77	23	IVF-105	—	—	図51	—	写真16		
第22号土坑	擾乱に要変											

B類 楕円形

B類に分類された土坑は6基である。以下、断面形の形態でⅡ・Ⅲ・Ⅳ類に細分した。

BⅡ類 (楕円形—深箱形)

第5・11号土坑の2基が属する。

〔検出状況〕 調査区はほぼ中央部で検出した。確認面はいずれも第Ⅲ層上面である。

〔規模〕 底面の規模は長軸径89cmと145cm、深さは38cmと43cmでいずれも第5号土坑の方が大きい。

〔堆積土〕 いずれも自然堆積の様相を呈し、基本層序第Ⅱ層相当の黒色土が中心である。第5号土坑のみが2層に分けられる。

BⅢ類 (楕円形—浅箱形)

第2・13号土坑の2基が属する。

〔検出状況〕 調査区西端 (SK-02) と南側 (SK-13) で検出した。確認面はいずれも第Ⅲ層上面である。

〔規模〕 底面の規模は長軸径78cmと101cm、深さは17cmと19cmでいずれも第2号土坑の方が大きい。

〔堆積土〕 いずれも自然堆積の様相を呈し、基本層序第Ⅱ層相当の黒色土中心である。

BⅣ類 (楕円形—不整形)

第16・21号土坑の2基が属する。

〔検出状況〕 調査区中央部よりやや南側で検出した。確認面はいずれも第Ⅲ層上面である。

〔規模〕 底面の規模は長軸径99cmと143cmで第21号土坑の方が大きく、深さは23cmと50cmで第16号土坑の方が深い。

〔堆積土〕 いずれも自然堆積の様相を呈し、基本層序第Ⅱ層相当の黒色土中心である。

C類 不整形

C類に分類された土坑は3基である。以下、断面形の形態でⅣ類に細分した。底面形状が壘で定ま

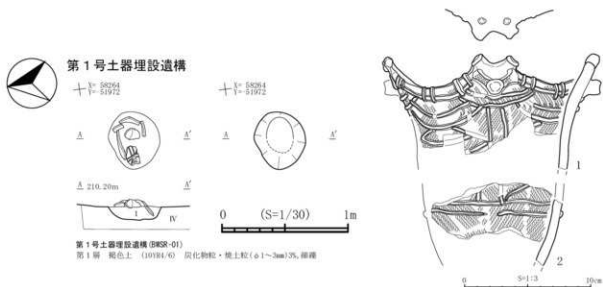


図52 B区西第1号土器埋設遺構・出土遺物

らないのは、遺構の基底となる第V層が礫を多量に包含していることに起因するものと考えられる。

CV類（不整形—不整形）

第4・8・12号土坑の3基が属する。

【検出状況】調査区中央部から北側（SK-04）、南西側（SK-08）、南東側（SK-12）で検出した。確認面はいずれも第Ⅲ層上面である。

【規模】底面の規模は、径36~81cmであり、第12号土坑が一番大きい。深さは17~25cmの範囲内に収まる。

【堆積土】いずれも自然堆積の様相を呈し、基本層序第Ⅱ層相当の黒色土中心である。

第3節 土器埋設遺構

第1号土器埋設遺構（BWSR-01：図52、写真16・28）

【位置・確認】調査区東側のIVP-106グリッドに位置する。表土撤去時に検出され、本遺構の検出がこの地区を面的に調査する契機となった。検出面は第Ⅲ層上面である。

【埋設状況・堆積土】底部破片が土器内部にあり、深鉢形土器が倒立した状態で埋設された可能性が高い。掘り方は40×45cmの楕円形で、検出面からの深さは約10cmである。埋土は、炭化物粒と焼土粒が混合する黒褐色土である。

【出土遺物】図52-1・2は同一個体の円筒上層d式土器で、胴部下半が大きく破損している。口径は約17cm、器高は推定で約17~20cmである。波状口縁で、口縁部には隆帯と刺突文が施され、胴部には羽状縄文が施文されている。内面は工具により横位方向にミガキが施されている。

【時期】埋設された土器から縄文時代中期中葉に帰属する遺構であると考えられる。

表8 B区西小ピット属性表

遺構名	計測値			グリッド	備考
	開口部(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)		
PIT01	54×37	22×17	21	IVF-104	
PIT02	39×32	14×12	32	IVF-104	
PIT03	45×34	31×22	12	IVF-104 IVF-104	
PIT04	38×29	27×16	49	IVF-105	
PIT05	複基に變更				
PIT06	34×21	26×16	24	IVS-105	
PIT07	26×39	36×19	21	IVF-107	
PIT08	55×43	40×22	48	IVF-107	
PIT09	44×42	36×13	51	IVQ-104	
PIT10	59×54	30×24	45	IVF-104	

遺構名	計測値			グリッド	備考
	開口部(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)		
PIT11	50×41	39×32	17	IVF-107	
PIT12	102×79	59×52	47	IVQ-103 IVF-103	
PIT13	27×25	21×16	44	IVV-104	
PIT14	17×16	13×12	38	IVV-104	
PIT15	複基に變更				
PIT16	59×(56)	40×33	17	IVQ-104	
PIT17	欠番				
PIT18	欠番				
PIT19	37×(34)	29×12	51	IVF-104	

第4節 その他の遺構

小ピット (図53、表8)

B区西には15個の小ピットがある。調査時点では、この個数以上のプランを検出し掘り下げ精査したが、大多数は木の根や攪乱と判断された。確認面は第Ⅲ層中である。

小ピットの規模は、開口部の最大がPIT12の約100cmから最小がPIT14の約18cmであるが、概ね40～50cm程度の大きさのものが多く、深さは12～51cmである。形状は主として楕円形であるが円形のほか不整形もある。各ピット内の堆積土は、第Ⅱ層相当の黒色土が主体となっている。堆積状況は記録に止めていないが、柱痕跡は確認されず埋土の状況はおおよそ単層ないしは2層程であった。これら小ピットのなかで時期を特定できるものはない。おそらく各堅穴住居の時期に各々がつくられた可能性がある。個々の小ピットにおける基礎データ及び変更・欠番などについては表8にまとめた。

小ピットのつくられている位置は、調査区北側と各堅穴住居跡に挟まれた東・西側のおよそ3地点に分けられる。

小ピット群①

調査区北側第1号堅穴住居跡の北、IV・W-104グリッドに7基の小ピットがつくられている。円形に配置されているように見え、住居跡の柱穴の可能性もあるが炉跡は検出されていない。

小ピット群②

調査区東側IVQ・R-103・104グリッドに4基の小ピットがまとまってつくられているが、特に規則性はみられない。

小ピット群③

調査区西側IVP-R-106・107グリッドに4基の小ピットがつくられている。位置的には散在した状態で規則性はみられない。

第5節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、北側調査区とトレンチからの出土である。トレンチでは、WTR-04 (図53) 内の埋没沢と思われる黒色土から出土する遺物が多かった。人為的に廃棄された様相はなく、沢が埋没する過程で自然流入したものと考えられる。各トレンチの位置・番号については、トレンチ配置図 (図53) に示した。

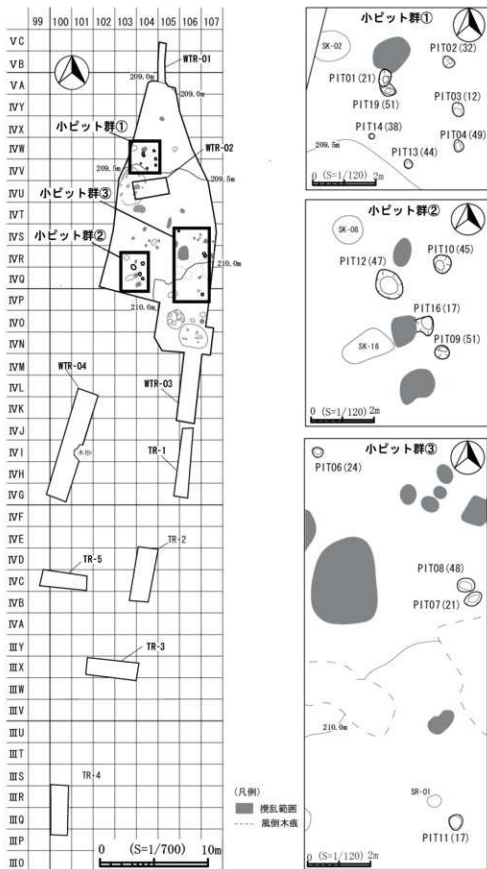


図53 B区西小ビット・トレンチ配置図

1 土器

遺構外から出土した土器は総重量約9.576gである。復元個体は少なく、多くが破片資料である。土器型式の割合は縄文中期後葉の最花式土器が主体を占め、次いで縄文後期前葉の十腰内I式土器が多い。その他、縄文中期中葉の円筒上層d式、縄文中期末葉の太木10式併行土器や縄文後期後葉の粗製土器などが少数認められる。出土地点は、竪穴住居跡とその周辺およびWTR-04の埋没沢からの出土が目立った。

図54-1・2は円筒上層d式に相当する土器である。地文縄文施文後に横走隆帯が貼り付けられている。

図54-3～12は最花式に相当する土器である。器形は胴部上半が大きく膨らみ、口縁部が外反するものが多く、中には口縁部と胴部の境目において屈曲をなすものもある(11)。文様は沈線による逆U字状懸垂文が施文されるものが主体的である。11は口縁部無文帯と胴部文様帯の区画として、列状に上下2段の刺突文が施文されている。地文縄文は単節RL原体による施文が主体的で、回転施文方向は横回転施文のもの(3～7)や斜回転施文による横走縄文(11)・縦走縄文(8～10・12)が認められる。

図54-13は太木10式併行土器の胴部破片である。沈線による波頭状文が施文されており、地文縄文は単節RL原体の横回転施文である。

図54-14～19は十腰内I式土器である。器形は胴部上半がわずかに膨らみ、口縁部が外反する深鉢形土器が主体的である。口縁部の外反の度合いは、胴部から直線的に立ち上がり、わずかに外反するものが多いが、15のように「く」の字状に大きく外反するものも少数認められる。14は、口縁部が無文で、胴部上半には2条～3条単位の沈線により横位に展開する波状文が施文されており、沈線間は節の細かいLR原体が充填されている。15も同様の文様と思われるが、破片資料のため全体的な文様モチーフは不明で、焼成は良好で胎土も精製されており、内外面ともに丁寧なミガキ調整がなされている。

図54-20は縄文中期末葉から後期初頭の範疇で捉えられる土器である。胴部には単節RL原体の横回転施文、底部には網代痕とナデ調整痕が観察される。

図54-21・22は縄文後期後葉の粗製深鉢形土器である。21は器厚が薄く、口縁部が内湾し、口唇部は平坦にナデ調整されている。22は上げ底状の底部破片で、胴部下端には底部との接合部付近に1条の横位沈線が施文されている。

図54-23は縄文晩期末葉の範疇で捉えられる台付鉢の破片資料である。胴部には単節LR原体の斜回転施文による縦走縄文が認められる。

2 石器

遺構外から出土した石器は大きく分けて、剥片石器類28点、礫石器類3点、合計31点(総重量2491.3g)が出土した。出土地点は、WTR-04の埋没沢からの出土が目立った。出土層位は第IIa層からが最も多く、表土(第I層)からの出土も数点ある。なお、SK-18は整理段階で攪乱に変更されたため、遺構外扱いとする。その他、詳細な出土地点・層位、計測値、石材等については観察表にまとめた。以下、器種ごとに記載していく。

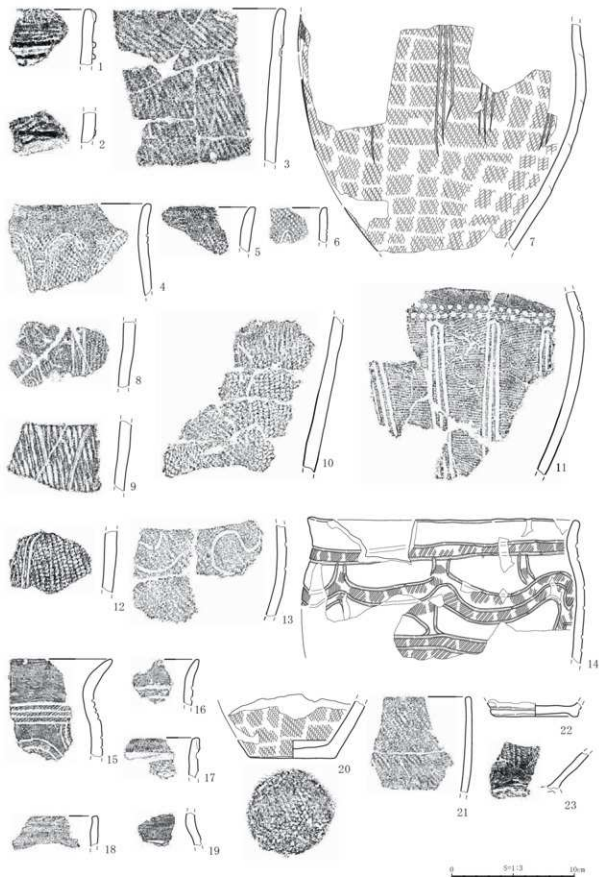


图54 B区西遺構外出土遺物(1)

剥片石器類 (図55)

剥片石器類は、石筥1点、石錐2点、石匙1点、削器3点、石核1点、二次加工剥片11点、微小剥離痕のある剥片が9点、以上28点を本類で扱うこととし6点を図示した。なお、その他として、加工や使用した痕跡のない剥片は43点出土している。

石筥(図55-1)は短冊形の直刃形である、全体的に粗い調整で、側縁部は片側のみを調整する。

石匙(図55-2)は横形石匙としたが、つまみ部からの挟りが弱く、全体的な調整は粗い。

石錐(図55-3・4)はいずれも不定形剥片の一端を錐部としたものであるが、錐部の調整は粗い。

削器は3点中2点を図示した(図55-5・6)。5は腹面の両側縁部を加工して刃部を作り出している。6は腹面の4カ所を加工しているが、いずれも加工は粗い。

石核・二次加工剥片・微小剥離痕のある剥片は図示しなかったが、二次加工剥片の中には、石錐の未製品と思われるものも数点含まれている。

礫石器類 (図55)

礫石器類は、磨り石1点、敲き石2点が出土し、全て図示した。

磨り石(図55-7)は両面に明瞭な磨りの痕跡が見られる。

敲き石(図55-8・9)は一側縁と端部を使用するもの(8)と端部のみを使用するもの(9)がある。いずれも敲きの痕跡は弱い。

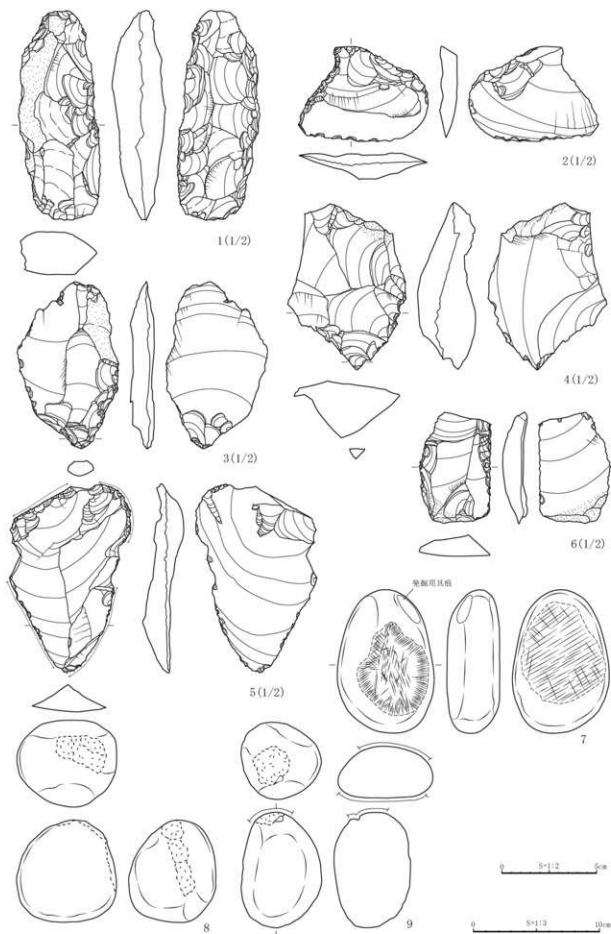


图55 B区西遺構外出土遺物(2)

第6章 C区東

概要

C区東は遺跡の南西部、県道28号線（岩崎西目屋弘前線）の南側に位置している。本調査を実施した調査区はIVQ～VC-85～100グリッドにあたり、国土座標ではX=58264～58308、Y=-52060～-52000にあたる。規模は、最大長約64m、最大幅約15m、面積は約800㎡であり、標高は208.8m～209.6mの河岸段丘上に立地している。B区が小規模な段丘の下段だとすると、C区東は、B区西と同じ一段上の上段となる。

調査は、平成20・22年度に行った。22年度は20年度に遺物が確認された周辺を拡張して調査した。調査の結果検出された遺構は、縄文時代の土坑2基、ピット14基、焼土跡1基、集石遺構1基である。出土遺物は、縄文時代の土器・石器がほとんどである。遺構外からの出土が多く、調査区東側の低地部分から出土したものが多数を占める。

第1節 土坑（図57、表9、写真17・29）

土坑は2基検出した。土坑の平面形および断面形により分類すると、第3号土坑がBⅡ類、第5号土坑がCⅣ類に属する（第2編第2章第1節参照）。なお、調査時5基を土坑として精査したが、整

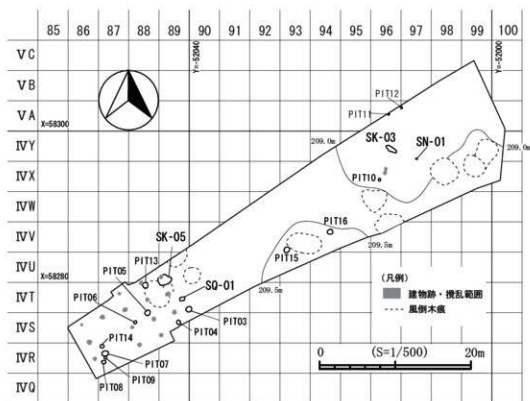
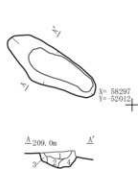
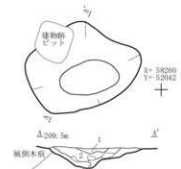


図56 C区東遺構配置図

第3号土坑



第5号土坑



第3号土坑 (ZSK-03)

- 第1層 黒褐色土 10YR2/2 炭化物粒(φ1mm)2%
 第2層 黒褐色土 10YR2/3 炭化物粒(φ1mm)2%
 第3層 褐色土 10YR4/4
 第4層 暗褐色土 10YR3/4 ローム(φ150mm)10%

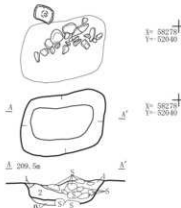
第5号土坑 (ZSK-05)

- 第1層 暗褐色土 10YR2/3 ローム(φ2~5mm)3%, 円礫(φ1~30mm)1%, 炭化物(φ1mm以下)1%
 第2層 暗褐色土 10YR2/3 ローム(φ1~5mm)5%, 円礫(φ1~20mm)10%, 炭化物(φ1~2mm)2%
 第3層 黄褐色砂 10YR5/9 円礫(φ1~6mm)2%

第1号焼土跡



第1号集石遺構



第1号焼土跡 (ZSN-01)

- 第1層 暗褐色土 7.5YR3/4 炭化物(φ1mm)1%
 第2層 褐色土 10YR4/4 暗褐色土塊, 焼土3%

第1号集石遺構 (ZSD-01)

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4 褐色ローム(φ1~10mm)10%, 円礫(φ20~150mm)10%
 第2層 褐色土 10YR4/6 暗褐色土塊, 円礫(φ8~60mm)10%

0 (S=1/60) 2m

0 (S=1/30) 1m



図57 C区東土坑・焼土跡・集石遺構・出土遺物

表9 C区東土坑属性表

遺構名	分類	計測値			グリッド	遺物出土状況		遺構図版	遺物図版	写真図版	新旧関係	備考
		開口部(cm)	底面部(cm)	深さ(cm)		土器(埋土中)	石器					
第1号土坑	風割木版に変更											
第2号土坑	PT15に変更											
第3号土坑	BⅡ	160×60	112×32	28	IV-96	—	—	図57	—	写真17		
第4号土坑	PT16に変更											
第5号土坑	CV	180×136	92×56	32	IV-99	縄文中期後葉1片	—	図57	図57	写真17・29	風割木版より新埋納物跡(近・現構文中期後葉代)より古	縄文中期後葉代

表10 C区東小ピット属性表

遺構名	計測値			グリッド	備考
	開口部(cm)	底面部(cm)	深さ(cm)		
PT101	楕円形				
PT102	楕円形				
PT103	80×67	61×32	74	IV-89 IV-90	
PT104	56×50	32×24	61	IV-89 IV-88	
PT105	76×66	44×39	24	IV-88 IV-88	
PT106	42×36	32×23	14	IV-88	
PT107	90×67	71×42	54	IV-87	
PT108	37×37	37×34	14	IV-87	
PT109	53×49	39×25	30	IV-87	
PT110	38×32	27×19	33	IV-96	
PT111	31×21	22×14	9	VA-96	
PT112	30×28	9×8	24	VA-96 VA-97	
PT113	77×71	48×35	46	IV-88	
PT114	53×48	38×38	40	IV-87	
PT115	81×69	70×56	24	IV-93	SK-02から変更 縄文中期後葉1片
PT116	71×64	55×47	17	IV-94	SK-04から変更

理作業の段階でピットや風倒木痕に変更したものがあつた。個々の土坑における基礎データ及び図版番号、写真番号、変更、欠番などの詳細については表9にまとめた。

BI類 (第3号土坑)

〔検出状況〕 調査区東側のIVY-96グリッドに位置している。確認面は基本層序第IV層上面である。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 土坑の規模は長軸約160cm、短軸約60cm、確認面からの深さが約28cmである。

〔堆積土状況〕 4層に分けられる。第1層・第2層は黒褐色土が主体で炭化物粒が混入している。

〔出土遺物〕 なし。

〔小結〕 遺物が出土していないため帰属時期は不明である。

CV類 (第5号土坑)

〔検出状況〕 調査区西側のIVT・IVU-89グリッドに位置している。確認面は基本層序第IV層上面である。

〔重複〕 建物跡(近・現代)、風倒木痕と重複している。風倒木痕よりは新しい。

〔規模〕 土坑の規模は開口部径約180～136cm、底部径約56～92cm前後、確認面からの深さが約32cmである。平面形は不整形で、壁の立ち上がりは緩やかである。

〔堆積土状況〕 3層に分けられ、自然堆積の様相を呈している。第1層・第2層は暗褐色土が主体で、第3層は基本層序第III層相当の黄褐色砂を主体とする暗褐色土の混入土層である。

〔出土遺物〕 堆積土中から縄文時代中期後葉の土器片1片が出土している(図57-1)。

〔小結〕 出土遺物から、縄文時代中期後葉に帰属するものと推測される。

第2節 その他の遺構

1 小ピット (表10)

小ピットは14基検出した。調査区西側にはPIT03・04・05・06・07・08・09・13・14の9基、調査区東側の緩斜面にはPIT10・11・12の3基、調査区中央の台地平坦部にはPIT15・16の2基が分布している。確認面はいずれの小ピットも基本層序第IV層上面である。

小ピットの規模は開口部径約50～70cm前後、底面径約30～50cm前後のものが多い。確認面からの深さは約20～40cm前後のものが多く、50cm以上の比較的深いものも認められる。堆積土は黒褐色土や暗褐色土主体の単層のものがほとんどである。遺物は、PIT15から縄文時代中期後葉の土器小破片が出土している。個々の小ピットにおける基礎データおよび変更・欠番などの詳細は表10にまとめた。

2 焼土跡 (図57、写真17)

調査区東側から焼土跡を1基検出した。IVY-97グリッドに位置している。確認面は基本層序第III層中である。焼土範囲は長軸約42cm、短軸約34cmの不整形で、厚さ4cmほどが被熱している。焼土下部には掘方が認められ、基本層序第III層中が掘り込まれている。掘方の規模は、焼土跡の確認時に周囲を掘り下げ過ぎたため平面形が不明瞭であるが、深さ約10cmである。遺物が出土しておらず、帰属時期は不明である。

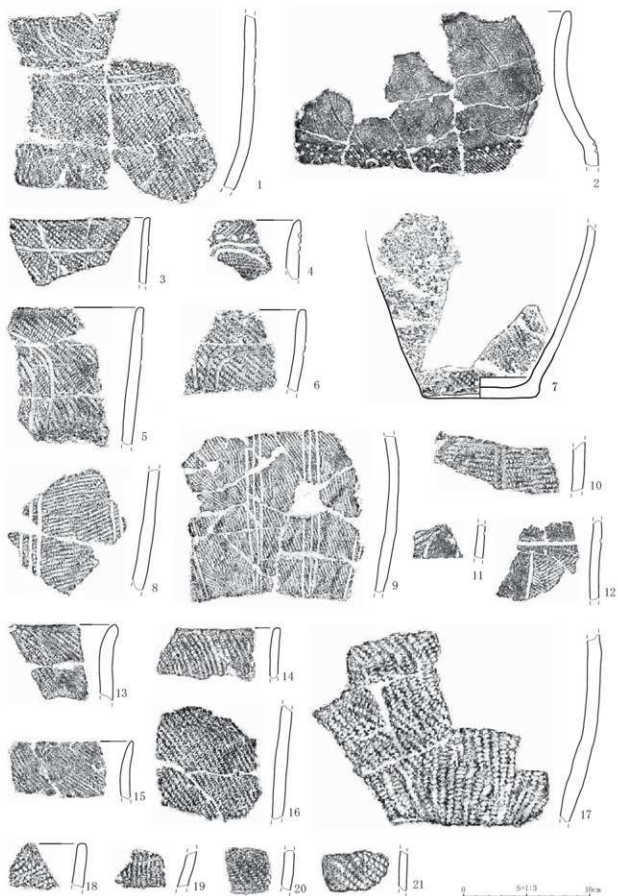


図58 C区東遺構外出土遺物(1)

3 集石遺構 (図57、写真17)

調査区西側から集石遺構を1基検出した。本遺構は覆土中に多量の礫を包含する土坑であり、その性質から土坑とは区別した。IVT-89グリッドに位置し、確認面は基本層序第Ⅲ層上面である。集石の規模は長さ約56cm、幅約44cmの範囲で認められた。集石は主に直径約20cm～150cmの自然円礫で構成されている。土坑は長軸約64cm、短軸約48cmの隅丸長方形で、確認面からの深さが約18cmである。土坑の主軸方位はほぼ東西方向である。土坑の堆積土は2層に分けられる。集石の礫は第1層の暗褐色土中に混入している。遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

第3節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、調査区東側の低地部分からの出土が多数を占める。平成20年度の確認調査でも同様の位置から遺物が多数出土したが、その遺物については報告済みである（青森県教委：2010）。低地部分は、調査に用いたグリッドではIVV～VA-93～99グリッドの範囲内で、国土座標ではX = 58284～58304、Y = -52028～-52000の範囲内にあたる。遺物は、IVX・Y-96・97グリッド付近に多くが分布しており、出土層位はⅡ層またはⅡa層がほとんどである。低地部分から出土した遺物は人為的に廃棄されたような痕跡はなく、窪んだ地形が埋没する際に遺物と土砂と一緒に流入したものであると考えられる。

1 土器

遺構外から出土した土器の総重量は約16,345gである。復元個体は少なく、多くが破片資料である。時期別の土器の割合は縄文中期後葉の最花式が主体を占める。この他、中期末葉の大木10式併行土器、後期初頭の馬立式、縄文後期前葉の十腰内1式に比定される土器などが少数認められる。出土地点は、調査区東側の遺物包含層第Ⅱ層からの出土が最も多い。

図58-1～10は最花式に相当する土器である。口縁部は胴部から直線的に外傾して立ち上がるもの（3～5）や、わずかに内湾して立ち上がるもの（6）、胴部上半から大きく屈曲して長く外反気味に立ち上がるもの（2）などがある。胴部には2～3条単位の沈線による逆U字状懸垂文が施文されるものが主体的で、胴部文様帯の区画として刺突列がめぐるもの（2・4）も認められる。1は破片資料のため全体的な器形は不明であるが、胴部下半が膨らむ深鉢形土器であると推測される。胴部上半には2条単位の沈線による弧状文と方形区画文が施文されており、青森市内沢部遺跡（青森県教育委員会1978）などに類似資料がある。地文は単節RL原体の横回転施文である。榎林式に相当する可能性もある。

図58-11・12は大木10式併行期の土器である。12は口縁部無文帯と胴部文様帯が1条の横位沈線で区画され、胴部には方形区画の沈線文と単節LR原体の充填施文が認められる。

図58-13～21、図59-14～16・18・19は縄文中期後葉から末葉の範疇で捉えられる土器である。器厚は厚く、口縁部は外反するものが多い。文様は地文縄文のみで、単節RL・LR原体の横・斜回転施文のものなどがある。図58-17の縄文原体は他と比較して節が太い特徴がみられる。底部資料には網代痕が認められ、図59-18のようにナデ調整されているものもある。

図59-1～4は馬立式に相当する土器である。1は口縁部が直線的に立ち上がり、口縁部に沿って

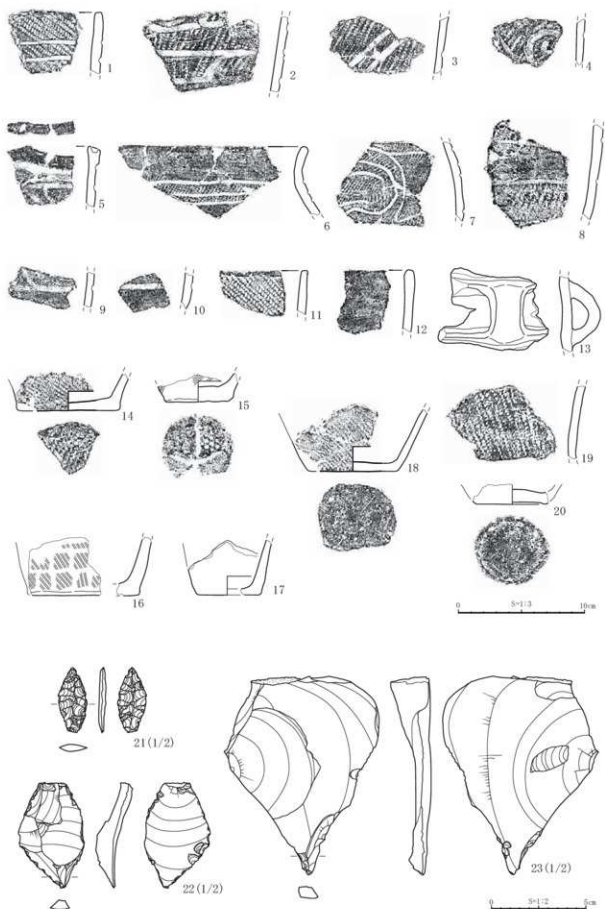


図59 C区東遺構外出土遺物(2)

2条の横位沈線が施文されている。いずれも小破片で胴部文様の全体的なモチーフは不明であるが、3は三角形文を主文様とするもので、沈線間に唐消縄文手法が認められる。4には渦巻文が施文されている。

図59-5～10は十腰内I式に相当する土器である。器種は深鉢形と壺形が認められる。5の口縁部は折り返し状の波状口縁で、口唇頂部に円形突起がみられる。6・7は壺形土器の同一個体で、3条単位の沈線文と単節LR原体の充填施文が認められる。

図59-11～13・17は後期初頭から前葉の範疇で捉えられる土器である。器種は深鉢形と壺形が認められる。口縁部はわずかに外反するものや直線的に立ち上がるものなどがみられる。文様は地文縄文のみのものと無文のものがある。13は壺形土器で、頸部に橋状把手が認められる。内外面は丁寧にミガキ調整されている。

図59-20は後期後葉の範疇で捉えられる土器である。上げ底状の底部資料で胎土に粗砂粒が多く混入している。

2 石器

遺構外から出土した石器は大きく分けて、剥片石器類44点、礫石器類4点、合計48点（総重量8877.5g）が出土した。出土地点は、調査区東側の遺物包含層第II層からの出土が際立つ。なお、SK-01は調査段階で風倒木痕に変更になったため、遺構外扱いとした。その他、詳細な出土地点・層位、計測値、石材等については観察表にまとめた。以下、器種ごとに記載していく。

剥片石器類（図59・60）

剥片石器類は、石鏃1点、石錐2点、石匙1点、削器8点、二次加工剥片17点、微小剥離痕のある剥片15点、以上44点を本類として扱うこととし6点を図示した。なお、その他として、加工や使用した痕跡のない剥片は96点出土している。

石鏃（図59-21）は基部が若干欠損しているが尖基無茎鏃である。石材は黒曜石である。

石錐（図59-22・23）はいずれも不定形剥片の一端を錐部としたものである。22は両側縁部も加工し、刃部を作り出している。

石匙（図60-1）は縦形石匙であるが、全体的に厚はったく、一側縁部を除き両面調整している。

削器は8点中2点を図示した（図60-2・3）。いずれも一側縁部を両面調整して刃部を作り出している。3は一端部を尖頭状に加工しているため、石錐とする見方もある。

二次加工剥片・微小剥離痕のある剥片は図示しなかったが、二次加工剥片の中には、石錐の未製品と思われるものが5点、石篋・搔器の未製品と思われるものがそれぞれ1点ある。

礫石器類（図60）

礫石器類は、敲き石2点、台石2点が出土し、全て図示した。

敲き石（図60-4・5）は両側縁を使用するもの（4）と全面使用し、捺痕が見られるもの（5）がある。いずれの敲打痕も弱い。

台石（図60-6・7）は原礫面をそのまま使用している。縁辺に敲打による剥離が見られる。

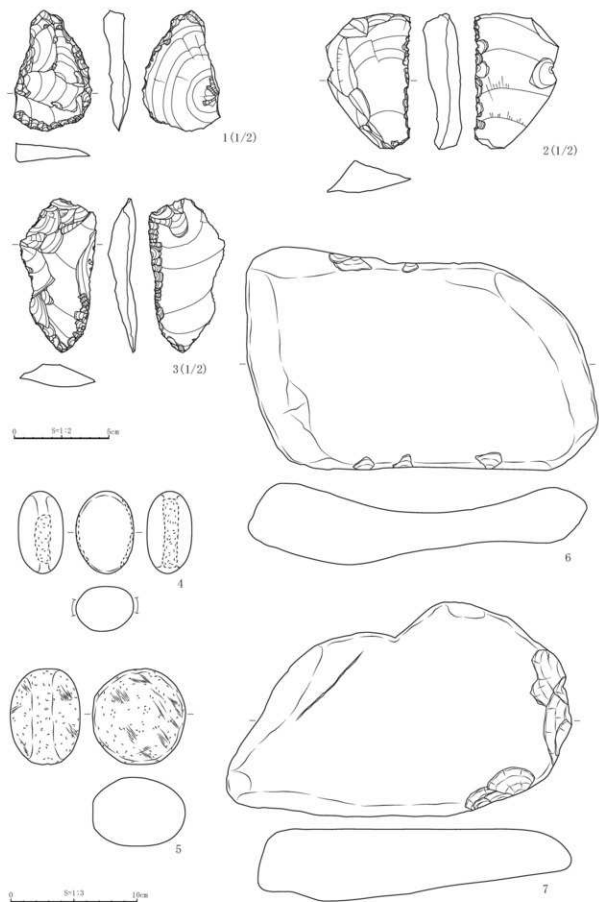


图60 C区東遺構外出土遺物(3)

第3編 理化学的分析

第1章 火山灰分析

大川添(2) 遺跡の火山灰について

弘前大学大学院理工学研究科
柴 正敏

西目屋村・大川添(2)遺跡より採集された火山灰サンプル3試料について、以下の観察を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表1に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる(町田・新井, 2003)。

ガラスの形態及び構成鉱物(表1)、ならびに軽石ガラスの発泡度・色・粒径より、ガラスは十和田八戸テフラ起源のガラスに属される。すなわち、発泡度の良い軽石ガラスを主とし、針状のホルンブレンドが認められる。ガラス及び鉱物粒子は良く円磨されており、再堆積したものと判断される。

試料No.3(C基本層序、IIa層)の火山灰に含まれるガラスについてEPMA(電子プローブマイクロアナライザー)を用いて化学分析を行った。使用したEPMAは弘前大学大学院理工学研究科所有の日本電子製JXA-8800RLである。分析条件は、加速電圧15 kV、照射電流 6×10^{-9} A、ビーム径 10μ mである。3粒子の平均化学組成は次の通りである(カッコ内の数字は標準偏差)：

$\text{SiO}_2=76.84$ (0.314), $\text{TiO}_2=0.39$ (0.039), $\text{Al}_2\text{O}_3=12.37$ (0.064), $\text{FeO}=1.71$ (0.092), $\text{MnO}=0.82$ (0.061),
 $\text{MgO}=0.36$ (0.056), $\text{CaO}=2.01$ (0.035), $\text{Na}_2\text{O}=4.68$ (0.261), $\text{K}_2\text{O}=1.56$ (0.047).

上記ガラスの化学組成は、青木・町田(2006)に報告されている十和田八戸テフラのガラス組成と良い一致を示す。

各試料について多数のガラス及び鉱物粒子を観察することにより、以上のような同定することができるが、単独のガラス粒子でその帰属が明らかに行きとせは限らないことを付記しておく。

参考文献

- 青木かおる・町田 洋(2006)。日本に分布する第四紀後期広域テフラの主要組成 - $\text{K}_2\text{O}-\text{TiO}_2/\text{NaI}$ によるテフラの識別。地質調査研究報告, 第37巻, 第7/8号, 239-258。
Hayakawa, Y. (1985). Pyroclastic geology of Towada Yokoku. Bulletin of Earthquake Research Institute, vol.60, 507-592。
Machida, H. (1999). Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan: Recent progress. 第四紀研究, 第38巻, 194-201。
町田 洋・新井隆夫(2003)。新編火山灰アトラス - 日本列島とその周辺 -。東京大学出版会, pp.336。
柴 正敏・重松直樹・佐々木 実(2000)。青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成(1)。弘前大学理工学部研究報告, 第1巻, 第1号, 11-19。
柴 正敏・中道哲郎・佐々木 実(2001)。十和田火山, 降下軽石の化学組成変化 - 字標部の一露頭を例として -。弘前大学理工学部研究報告, 第4巻, 第1号, 11-17。
柴 正敏・佐々木 実(2006)。十和田火山噴出物のガラス組成変化, 月刊地球, 第28巻, 第5号, 323-325。

表1 大川添(2)遺跡の火山灰

試料No.	採取位置	サンプル名	層位	構成鉱物及び火山ガラス	ガラスの種類	特記事項	
1	調査区1基本層序火山灰サンプリング	1a層	火山ガラス(50-200 μ m)	軽石ガラス, 軽石, 軽石集合体, 軽石集合体, ホルンブレンド, 軽石	両層型(1a)層	調査区1a, 調査区1b, 調査区1c, 調査区1d, 調査区1e, 調査区1f	
2	調査区1基本層序火山灰サンプリング	1b層	火山ガラス(50-200 μ m)	軽石ガラス, 軽石, 軽石集合体, 軽石集合体, ホルンブレンド, 軽石	両層型(1a)層	調査区1a, 調査区1b, 調査区1c, 調査区1d, 調査区1e, 調査区1f	
3	調査区1基本層序	火山灰サンプリング	1a層	火山ガラス(50-200 μ m)	軽石ガラス, 軽石, 軽石集合体, 軽石集合体, ホルンブレンド, 軽石	両層型(1a)層	調査区1a, 調査区1b, 調査区1c, 調査区1d, 調査区1e, 調査区1f

pp. 軽石ガラス, bn. ナブルウォール型ガラス, To-H. 十和田八戸テフラ, * EPMA分析を行った試料

第2章 放射性炭素年代測定

大川添(2)遺跡における放射性炭素年代

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

大川添(2)遺跡は、青森県中津軽郡西目屋村大字川原平字大川添(北緯40°31'28"、東経140°13'19")に所在する。測定対象試料は、BSK-08 出土木炭(OOKAWA(2)-01:IAAA-92225)、BSK-14 出土木炭(OOKAWA(2)-02:IAAA-92226)、BPIT-3 出土木炭(OOKAWA(2)-03:IAAA-92227)、B区沢1と遺構外より出土した土器片の表面に付着した炭化物(OOKAWA(2)-04:IAAA-101010、OOKAWA(2)-05:IAAA-101011)、BSK-53 覆土出土炭化物(OOKAWA(2)-06:IAAA-110706)、ASK-03の4層出土炭化物(OOKAWA(2)-07:IAAA-110707)、ASK-17 覆土出土炭化物(OOKAWA(2)-08:IAAA-110708)の合計8点である。

2 測定の意義

土坑の年代と土器の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除き、必要量の試料を採取、乾燥させ、秤量する(付表「処理前試料量」)。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させ、秤量する(付表「処理後試料量」)。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。
- (3) 必要量を採取、秤量(付表「燃焼量」)した試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製、定量する。この二酸化炭素中の炭素相当量を算出する(付表「精製炭素量」)。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。測定回数と¹⁴Cカウント数を付表に示す。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比は付表に記載する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下一桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した^{*註1}。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」 (または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

^{14}C 年代は、BSK-08出土のOOKAWA(2)-01が $4190 \pm 20\text{yrBP}$ 、BSK-14出土のOOKAWA(2)-02が $4330 \pm 20\text{yrBP}$ 、BPIT-3出土のOOKAWA(2)-03が $3700 \pm 20\text{yrBP}$ 、B区遺構外出土土器附着炭化物 OOKAWA(2)-04が $2930 \pm 20\text{yrBP}$ 、B区沢1出土土器附着炭化物 OOKAWA(2)-05が $2920 \pm 20\text{yrBP}$ 、BSK-53出土のOOKAWA(2)-06が $350 \pm 20\text{yrBP}$ 、ASK-03出土のOOKAWA(2)-07が $420 \pm 20\text{yrBP}$ 、ASK-17出土のOOKAWA(2)-08が $110 \pm 20\text{yrBP}$ である。OOKAWA(2)-01は縄文時代中期後葉頃、OOKAWA(2)-02は縄文時代中期中葉頃、OOKAWA(2)-03は縄文時代後期前葉頃に相当する年代値となった。OOKAWA(2)-04とOOKAWA(2)-05の値は誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲で重なり、近い年代を示す。縄文時代晩期前葉頃に相当する。暦年較正年代 (1σ) は、OOKAWA

(2)-04 と OOKAWA (2)-05 がいずれも 1200 ~ 1050cal BC 頃の間に複数の範囲、OOKAWA (2)-06 が 1478 ~ 1620cal AD の間に 2 つの範囲、OOKAWA (2)-07 が 1445 ~ 1463cal AD の範囲、OOKAWA (2)-08 が 1695 ~ 1917cal AD の間に 5 つの範囲で示される。

試料の炭素含有率は 50% を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

※註 1 OOKAWA(2)-01・02・03 の試料については、暦年校正年代の計算に、IntCal04 データベース (Reimer et al. 2004) を使い、OxCalv4.1 校正プログラム (Bronk Ramsey 1995; Bronk Ramsey 2001; Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

参考文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the radiocarbon calibration program, Radiocarbon 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46(3), 1029-1058
- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150

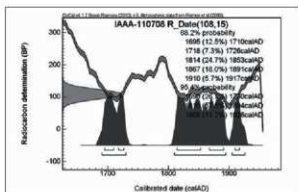
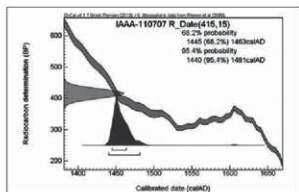
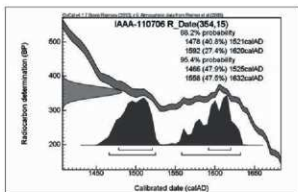
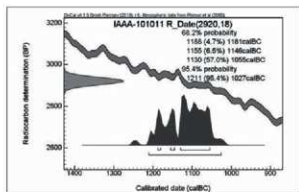
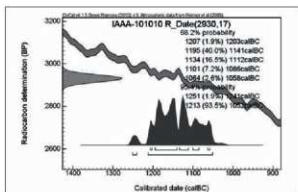
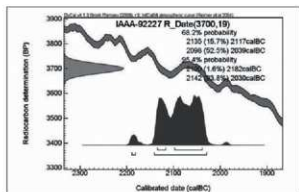
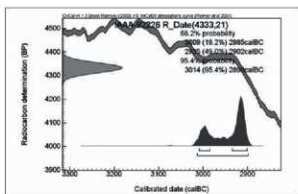
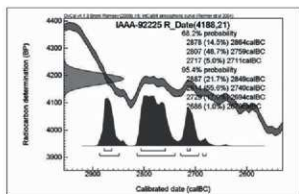
表 1

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-92225	OOKAWA(2)-01	BSK-08 層位: 底面直土	木炭	AAA	-26.72 ± 0.27	4,190 ± 20	59.37 ± 0.16
IAAA-92226	OOKAWA(2)-02	BSK-14 層位: 床面直土	木炭	AAA	-23.6 ± 0.27	4,300 ± 20	58.31 ± 0.16
IAAA-92227	OOKAWA(2)-03	BPT-3 層位: 覆土	木炭	AAA	-24.7 ± 0.21	3,700 ± 20	63.09 ± 0.15
IAAA-101010	OOKAWA(2)-04	B区遺構外 層位: 1層	土器炭化物	AAA	-23.11 ± 0.29	2,900 ± 20	69.44 ± 0.16
IAAA-101011	OOKAWA(2)-05	B区沢1 層位: 1層	土器炭化物	AAA	-26.57 ± 0.27	2,920 ± 20	69.52 ± 0.16
IAAA-110706	OOKAWA(2)-06	BSK-53 覆土	炭化物	AAA	-23.42 ± 0.28	350 ± 20	95.68 ± 0.18
IAAA-110707	OOKAWA(2)-07	ASK-03 4層	炭化物	AAA	-23.8 ± 0.23	420 ± 20	94.95 ± 0.18
IAAA-110708	OOKAWA(2)-08	ASK-17 覆土	炭化物	AAA	-25.53 ± 0.21	110 ± 20	98.65 ± 0.19

表 2

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-92225	4,220 ± 20	59.16 ± 0.15	4,188 ± 21	2878BC - 2864BC (14.5%) 2807BC - 2759BC (48.7%) 2717BC - 2711BC (5.0%)	2887BC - 2849BC (21.7%) 2814BC - 2740BC (55.6%) 2729BC - 2694BC (17.0%) 2686BC - 2679BC (1.0%)
IAAA-92226	4,310 ± 20	58.48 ± 0.15	4,333 ± 21	3009BC - 2985BC (19.2%) 2935BC - 2902BC (49.0%)	3014BC - 2899BC (95.4%)
IAAA-92227	3,700 ± 20	63.13 ± 0.15	3,700 ± 19	2135BC - 2117BC (15.7%) 2098BC - 2039BC (52.5%)	2190BC - 2182BC (1.6%) 2142BC - 2030BC (93.8%)
IAAA-101010	2,900 ± 20	69.71 ± 0.15	2,930 ± 17	1207calBC - 1203calBC (1.9%) 1195calBC - 1141calBC (46.0%) 1134calBC - 1112calBC (16.5%) 1101calBC - 1086calBC (7.2%) 1064calBC - 1058calBC (2.6%)	1251calBC - 1241calBC (1.9%) 1213calBC - 1052calBC (93.5%)
IAAA-101011	2,950 ± 20	69.3 ± 0.16	2,920 ± 18	1188calBC - 1181calBC (4.7%) 1155calBC - 1146calBC (6.5%) 1130calBC - 1055calBC (57.0%)	1211calBC - 1027calBC (95.4%)
IAAA-110706	330 ± 10	95.99 ± 0.17	354 ± 15	1478calAD - 1521calAD (40.8%) 1592calAD - 1620calAD (27.4%)	1466calAD - 1525calAD (47.9%) 1558calAD - 1632calAD (47.5%) 1440calAD - 1481calAD (95.4%)
IAAA-110707	400 ± 20	95.18 ± 0.18	415 ± 15	1445calAD - 1463calAD (68.2%)	
IAAA-110708	120 ± 20	98.55 ± 0.19	108 ± 15	1695calAD - 1710calAD (12.5%) 1718calAD - 1726calAD (7.3%) 1814calAD - 1853calAD (24.7%) 1867calAD - 1891calAD (18.0%) 1910calAD - 1917calAD (5.7%)	1690calAD - 1730calAD (26.7%) 1810calAD - 1894calAD (57.5%) 1905calAD - 1926calAD (11.2%)

【参考値】



[参考] 暦年較正年代グラフ

第3章 種実同定分析

大川添(2)遺跡B区から出土した炭化種実

佐々木由香・バンダリ スタルシャン（パレオ・ラボ）

1. はじめに

大川添(2)遺跡は青森県中津軽郡西目星村大字川原平に位置し、岩木川右岸の河岸段丘上に広がる川原平地地北西部に立地する。川原平地地は、標高および現河川の開析状態から高位面・低位面に区分され、大川添(2)遺跡は高位面の平坦地に立地する。標高は約205～210mである。遺跡の東側にあたるB区では、縄文時代後期を主体とする集落跡が見つかっており、縄文時代中期から晩期の遺物が出土している。ここではB区で検出された縄文時代の竪穴住居跡と土坑、焼土跡から産出した炭化種実の同定を行い、当時の植生や植物の利用状況を明らかにする一端とした。

2. 試料と方法

試料は、竪穴住居跡であるSI-01の埋設土器と、SI-04の土器埋設炉、土坑であるSK-27、焼土跡であるSN-03から採取された計18試料である。SI-04の土器埋設炉では内部の土壌（3・4層）全量が土壌試料として採取された。SK-27では堆積物（主に1層）に炭化物が含まれていたため、土層観察用ベルトの1層とⅢa層から約3cm幅で柱状に土壌試料が採取された。SN-03では4～5m四方のやや窪む場所で焼土が検出され、土層観察用ベルトの2層から約5cm幅で柱状に土壌試料が採取された。SI-01とSI-04は出土土器型式から縄文時代中期末葉、SK-27は埋設沢2が埋没してから作られた遺構であり、埋設沢2から出土する土器型式から縄文時代中期末葉～後期前葉以後、SN-03は付近の遺構外から出土する土器型式から縄文時代後期前葉と考えられている。

試料はフローテーションおよび水洗選別後、種実などが抽出済みの試料で、層ごとにある程度分類されてフィルムケース内に乾燥保管されていた。試料の採取と水洗、分類までの作業は青森県埋蔵文化財調査センターによって行われた。水洗前の土壌重量は表1を参照されたい。水洗は最小0.5mm目の篩を用いて行われた。試料は水洗単位で保管されていたが、同一遺構と同一層位の試料は同定後に産出数をまとめた。

種実の抽出・同定・計数は肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損しても1個体とみなせるものは完形として1点と数えた。同定された試料は、青森県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

3. 結果

同定した結果、未炭化種実と炭化種実、炭化した子囊菌が見いだされた。しかし、遺跡の立地条件を考慮すると、縄文時代の種実が未炭化のまま遺存するとは考えにくく、未炭化種実は後世の混入である可能性が高いと判断される。したがって本報告では、表1にのみすべての産出数を示し、以下の記載では炭化したもののみを扱う。炭化種実では木本植物のキハダ炭化種子とミスキ炭化核の2分類群、草本植物のタマ属炭化果実とツクササ炭化種子、イネ科炭化種子の3分類群が得られた。そのほ

表1 大川浜(2)遺跡B区から出土した炭化種実

試料No.	3		1-2	1-4	2-3	2-2	1-3	2-4
	遺構名	SI-01	SI-04		SK-27		SN-03	
採取位置	埋設土器		土器埋設が		-		焼土	-
層位	埋設土器		1層	2層	1層	2層	2層	
時期	縄文時代 中期末葉		縄文時代中期末葉		縄文時代中期末葉-後期 前葉		縄文時代後期前葉	
分類群	水洗量(g)	5500	1300	1200	2550	600	900	1150
キハダ	炭化種子				(1)			
ミズキ	炭化核				(1)			
タデ属	炭化果実				(1)			
ツユクサ	炭化種子						1	
イネ科	炭化種子	1						
不明A	炭化種実	1						
不明B	炭化種実		(1)					
同定不能	炭化種実				(2)			
虫えい					1			
子囊菌	炭化子囊	9 (6)		(1)	5 (20)	(1)	2 (5)	23 (2)
イヌタデ	果実						1	
ウシハコベ	種子		1				(1)	
アカザ属	種子			1				1

(括弧内は破片を示す)

かに科以下の同定ができないものを不明A・B炭化種実とタイプ分けし、識別点が遺存していない一群を同定不能炭化種実とした。種実以外には、炭化した虫えいと子囊菌が得られた。未炭化種実ではイヌタデ果実とウシハコベ種子、アカザ属種子が得られた。

産出した炭化種実を遺構別にみると、SI-01の埋設土器からイネ科種子が1点、不明A種実が1点、SI-04の1層から不明B種実の破片1点、SK-27の1層からキハダ種子とミズキ核、タデ果実の破片各1点、SN-03の2層(焼土)からツユクサ種子1点が得られた。

以下に、炭化種実の記載を行い、また図版1に写真を示して同定の根拠とする。

(1)キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. 炭化種子 ミカン科

破片であるが、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は三日月形。表面に亀甲状で大きさのやや揃った網目模様がある。壁は厚く硬い。残存長18mm、残存幅13mm。

(2)ミズキ *Cornus controversa* Hemsl. ex Prain 炭化核 ミズキ科

破片であるが、完形ならば楕円体~ゆがんだ球体で、上端がやや尖る。基部に裂けたような大きな着点がある。壁は厚い。縦方向に深い溝と隆起が走る。残存長2.1mm、残存幅1.9mm。

(3)タデ属 *Polygonum* sp. 炭化果実 タデ科

上面観は円形、側面観は倒卵形。先端は突出し、下端には円形の着点がある。表面は平滑で強い光沢がある。残存長1.4mm、残存幅1.1mm。

(4)ツユクサ *Commelina communis* L. 炭化種子 ツユクサ科

上面観は扁平、側面観は切削形。表面には不規則な凹凸がある。長さ1.8mm、幅2.3mm。

(5)イネ科 Poaceae 炭化種子

上面観は楕円形、側面観は楕円形。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の胚?がある。胚?の長さは全長の1/3程度。長さ1.4mm、幅1.1mm。

(6)不明A Unknown A 炭化種実

上面観は楕円形、側面観は卵形か。下端がやや尖る。表面は平滑。科以下の同定はできなかった。

長さ2.8mm、幅1.8mm。

(7)不明B Unknown B 炭化種実

上面観は円形、側面観は円形。表面は平滑。一部破損しており、科以下の同定はできなかった。長さ1.3mm、幅1.2mm。

(8)子囊菌 Ascomycota 炭化子囊

球形で、表面には微細な模様がある。長さ1.1～1.2mm、幅1.1～1.2mm程度。

4. 考察

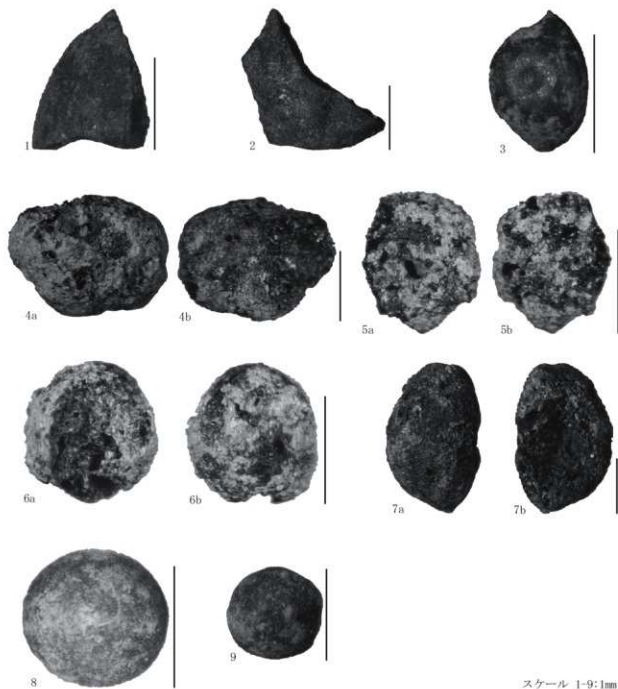
炭化種実の残存状況は全体に悪く、縄文時代中期末葉のSI-01の埋設土器からイネ科と不明Aが各1点、縄文時代中期末葉のSI-04の埋設土器炉の1層から不明Bの破片1点、中期末葉～後期前葉の土坑であるSK-27の1層からキハダとミズキ、タデ属の破片各1点、後期前葉の焼土跡であるSN-03の2層からツエクサ1点が得られたのみであった。このうち、食用可能なため、人間が利用した可能性があるのはSK-27から出土したキハダとミズキである。キハダの果実は甘酸っぱく、食用のほか、薬用としての利用も想定される。キハダは炭化しており、何らかの用途で利用された可能性がある。また、キハダは1点の産出であるが破片であり、加工時の状況を反映している可能性もある。北海道南部や青森県では、縄文時代の住居跡や土坑などでオニグルミヤトチノキ、クリなどと共にキハダが一定量産出することが知られている。例えば青森市に位置する中平遺跡では、縄文時代後期前葉の土坑や包含層からオニグルミヤクリ、トチノキといった堅果類やキイチゴ属やブドウ属、ニワトコ属などの液果にともなってキハダが破片で一定量産出する（佐々木・バンダリ，2009）。イネ科には栽培種と野生種があるが、SI-01の埋設土器から産出した種子は状態が非常に悪く、どちらか判断できなかった。形状からは野生種に近かった。タデ属は種によっては食用可能であるが、属以下の同定はできなかった。ツエクサは道端に普通に生育する草本であり、周辺に生育していたものが何らかの要因で偶発的に炭化し、焼土内に混入したと考えられる。

竪穴住居跡や焼土跡から人間の利用したあるいは利用の可能性のある炭化種実が得られなかった理由としては、採取位置が穿や焼土であったため熱により灰となった可能性、当時の種実が生の状態であったため残存しなかった可能性、堆積物中に炭化種実が含まれていなかった可能性、水洗した土壌量が1試料あたり約1.5kg未満と少なかったため、検討した試料中には種実が含まれていなかった可能性などが考えられる。

子囊菌や虫えいは、土壌中や炭化材などの植物に付着しており、偶発的に炭化して出土したと考えられるが、その由来は不明である。

引用文献

佐々木由香・バンダリ スダグルシャン（2009）炭化種実同定. 青森県埋蔵文化財調査センター編「中平遺跡（第2分冊）」：25-31. 青森県教育委員会.



図版1 大川添(2)遺跡B区から出土した炭化種実

1. キハダ炭化種子 (SK-27, No. 2-3), 2. ミズキ炭化核 (SK-27, No. 2-3), 3. タデ属炭化果実 (SK-27, No. 2-3),
4. ツユクサ炭化種子 (SN-03, No. 1-3), 5. イネ科炭化種子 (SI-01, No. 3), 6. 不明A炭化種実 (SI-01, No. 3),
7. 不明B炭化種実 (SI-04, No. 1-2), 8. 子囊菌炭化子囊 (SI-01, No. 3) 9. 子囊菌炭化子囊 (SN-03, No. 2-4)

第4編 総括

第1章 検出遺構について

この章では、大川浜(2)遺跡全体における竪穴住居跡と土坑を主に取り上げ、両遺構の形態・規模、時期変遷等についてまとめることとする。

形態・規模等について

竪穴住居跡

竪穴住居跡はB区とB区西から合計8軒検出した。以下、詳細について記載していくが、各竪穴住居跡の構造等については表11にまとめている。

平面形は、円形（B区SI-01・04・07）、楕円形（B区西SI-02・03）、不整形・不整形円形（B区SI-02・B区西SI-01）に分けられる。床面積は平面形とは関係なく、B区の住居跡は全て10㎡以下と小規模で、B区西は10㎡以上の中規模のものが2軒あった（SI-01・02）

柱穴配置は、主柱穴のみのもの（B区SI-02、B区西SI-02・03）、主柱穴と小ピットで構成されるもの（B区SI-01・04、B区西SI-01）、小ピットのみのもの（B区SI-05）に分けられる。主柱穴のみのものは、2本柱（B区SI-02b）・4本柱（B区西SI-02）で構成されるものの他、亀甲形の6本柱と考えられる特殊な配置のもの（B区西SI-03）もある。主柱穴と小ピットで構成されるB区SI-01・04は、主柱穴はいずれも浅く、竪穴の外側に小ピットが配置されるという類似した特徴を有する。

炉の構造は、土器埋設炉（B区SI-01・04）、石囲炉（B区西SI-01・02・03）、地床炉（B区SI-05）がある。土器埋設炉は、ほぼ完形のもの（B区SI-01）と口縁部と底部が欠損するもの（B区SI-04）が埋設されるという違いがある。石囲炉は、炉の南東側に前庭部と思われる硬化面を有するもの（B区西SI-01）、周堤を伴うもの（B区西SI-02）がある。

その他、竪穴住居跡の付帯施設として、B区西SI-02床面から埋設土器、段状施設、浅い掘り込みが検出された。

土坑

土坑は全ての調査区から合計66基検出した。以下、平面形・断面形、規模等について詳細を記載していくが、土坑の分類に基づく検出数については表12にまとめている。

まず平面形で見ると、A類（円形）が31基、B類（楕円形）が16基、C類（不整形）が19基であ

表11 竪穴住居跡構造一覧表

区	遺構名	平面形	床面積	柱穴配置	炉構造	備考
B区	SI-01	円形	5.1㎡	主柱穴+小ピット	土器埋設炉	竪穴外側に小ピット
	SI-02a	-	-	-	-	硬化面と同レベルに焼土跡
	SI-02b	不整形円形	9.2㎡	主柱穴のみ	-	床面に硬化面
	SI-04	円形	4.9㎡	主柱穴+小ピット	土器埋設炉	竪穴外側に小ピット
	SI-05	-	-	小ピットのみ	地床炉	-
	SI-07新	-	-	-	-	床面?に焼土跡
	SI-07古	円形	7.0㎡	なし?	-	-
B区西	SI-01	不整形	17.4㎡	主柱穴+小ピット	石囲炉(前庭部)	-
	SI-02	楕円形	13.3㎡	主柱穴のみ	石囲炉(周堤)	付帯施設として段状施設・埋設土器
	SI-03	楕円形	6.6㎡	主柱穴のみ	石囲炉(抜取痕)	柱穴配置は亀甲形?

り、A類が一番多いことがわかる。B区以外は検出数が少ないため一概には言えないが、A類はA・B区のみ、B類は全区、C類はA区以外の区から検出しているという特徴をもつ。規模は底面径(長軸)で100cmを越えるものが、A類が11基(35%)、B類が11基(69%)、C類が7基(37%)である。C類の中には200cmを越えるものが2基(B区SK-04・33)あるが、B区SK-33はトレンチにより壊されて全体形が明らかでないため本類に区分されたが、底面に小ピットを有することから考えても、小規模な竪穴住居跡の可能性もある。A類には190×188cmの大型のもの(B区SK-29)があるが、底面のほぼ中央部に開口部径120×90cm程度のピットを有するという特徴をもつ。類似した形態の土坑は、近隣の大川添(1)遺跡(第10・20号土坑)でも検出されている。また、底面径(長軸)100cmを越えるものにはB区SK-01・02・03・04・06(SK-02は中端が100cmを越える)があるが、これらの土坑は調査区西側に集中しており、覆土中からは縄文時代後期前葉の遺物が出土するという類似した特徴を持つ。

次に断面形で見ると、I類(フラスコ形)が1基、II類(深箱形)が15基、III類(浅箱形)が36基、IV類が14基であり、III類が一番多いことがわかる。ただし、III類としたものの中には、後世の耕作や土地の削平により上半部が壊されたものや、確認面より上からの掘り込みであったものも含まれると考えられる。I・II・IV類で深さが50cmを越えるものは、I類が1基(100%)、II類が3基(20%)、IV類が1基(7%)であった。III類はほとんどが深さ30cm未満であり、底面径との比により30cmを越えるものは1基のみ(A区SK-03)であった。

表12 土坑分類別一覧表

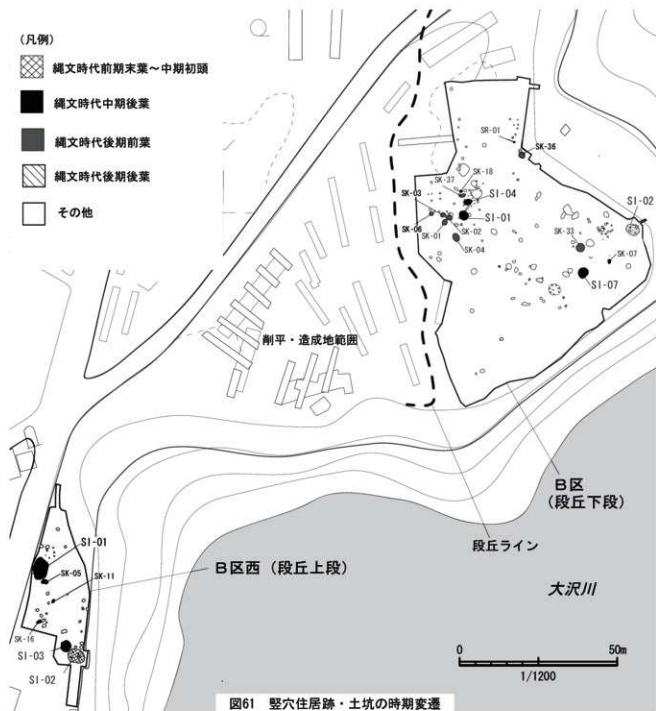
	A類				B類				C類				合計
	I類	II類	III類	IV類	I類	II類	III類	IV類	I類	II類	III類	IV類	
A区		3					5						8
B区	1	4	20	3		2	2			3	7	5	47
B区西						2	2	2					9
C区東						1							1
合計	1	7	20	3	0	5	9	2	0	4	6	9	66

時期変遷について

ここでは、出土遺物から帰属時期が特定できる竪穴住居跡と土坑をもとに、遺跡内における時期変遷についてまとめ、若干の考察をしてみたいと思う。なお、竪穴住居跡が検出されたのはB区とB区西のみであったため、この2地区を重点的に見ていくこととする(図6)。

B区西において一番古い時期の遺構はB区西SI-02である。これは、石囲炉を巡る周堤部に埋設された土器と段状の施設という特徴から縄文時代前期末葉～中期前葉と考えられる。B区西SI-01は床面と住居内Pit出土遺物から縄文時代中期後葉と考えられる。B区西SI-03は遺物が少なく判断は難しいが、覆土中の遺物から縄文時代中期後葉以前に位置づけられるであろう。土坑は、B区西SK-05・11・16の覆土中から縄文時代中期後葉の遺物が出土しており、それ以前に位置づけられる。

B区では、B区SI-01・04が土器埋設炉を有する竪穴住居跡であり、炉体土器から縄文時代中期後葉に位置づけられる。B区SI-02・07は床面出土遺物がほとんど無く、覆土中の遺物からSI-02が縄文時代後期後葉以前、SI-07が縄文時代中期後葉以前と考えられる。土坑は全て覆土中の遺物ということになるが、縄文時代中期後葉以前に帰属するものが2基(B区SK-07・18)、縄文時代後期前葉以前に帰属するものが最も多く8基(B区SK-01・02・03・04・06・33・36・37)検出された。



まとめると、B区西は縄文時代前期末葉～中期後葉まで、B区は縄文時代中期後葉～後期後葉までの遺構が検出されたということになり、縄文時代中期後葉を分岐点として生活の場が変遷していることがわかる。地形的な観点から見ると、B区の西側に小規模な段丘があり(図61)、B区西は段丘上段、B区は段丘下段に位置するということになるが、この小規模な段丘ラインを境界として上段から下段へと生活の場が変遷してきたことがわかる。なお、図61には示さなかったが、小ピットについても同様のことが言え、B区西には時期の分かる小ピットは無かったものの、B区は縄文時代中期後葉以前に帰属するものが2基(PIT38・62)、後期初頭～前葉以前に帰属するものが最も多く11基(PIT1・2・3・11・14・15・27・73・74・88・91)、後期後葉以前に帰属するものが1基

(PIT34)である。また、B区のみ(段丘下段)で変遷を考えると、縄文時代中期後葉～後期前葉までの遺構は調査区西側に多く、後期後葉の遺構は調査区東側の次の段丘ライン付近のみで検出されているという特徴をもつ。

遺構の検出数が少なく、特に段丘上段は造成・削平により得られる成果が少ない状況での考察になるが、大川添(2)遺跡における集落は小規模ではあるものの、河川の影響による土地形成に合わせて段丘上段から下段へ生活の場が変遷しているものと考えられる。(新山)

第2章 出土遺物について

この章では、遺跡全体における土器・石器について時期別や器種別に集計し、本遺跡における出土遺物の特徴や傾向についてまとめるものである。

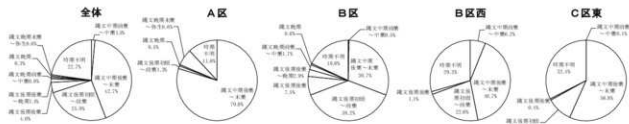
第1節 土器

本節では平成21・22年度の本調査における出土土器(総重量約77.1kg)を主な対象として、土器の特徴・分布傾向などについて若干記述する。集計表の作成および本遺跡出土土器の特徴・傾向の記述にあたっては、本来平成20年度調査分(青森県教育委員会2010)などの資料も集成し、他遺跡との比較検討も含め、総合的な検討が不可欠であるが、当該資料は本文中の記載に添えることとした。

本遺跡からは、縄文時代中期、後期、晩期～弥生時代の土器が出土している。出土量は、遺跡南東端のB区において最も多く、全区域の出土土器の約半数近くを占める。土器の時期別の量比については、縄文中期後葉の最花式および後期前葉の十腰内I式に属する土器群が主体的な位置を占める。また、時期別の量比は区域によって若干相違がみられる。縄文中期は円筒上層式がB区西の竪穴住居跡と土器埋設遺構、榎林式がB区の竪穴住居跡とその周辺から主に出土している。最花式はA区・B区西・C区において主体的となるのに対し、B区からの出土量は極端に少ない。縄文後期の土器はB区、縄文晩期以降の土器はA区・B区において主体的である。以下、時期別に諸特徴をまとめる。

中期前葉から中葉の土器は、A区を除く各区域において円筒上層b式・d式に比定される資料が断片的に認められる。当該期の資料は、B区西から比較的まとまって出土しており、第2号竪穴住居跡の床面埋設および覆土中(図48)、第1号土器埋設遺構(図52)の資料などが相当する。

中期後葉の土器は全区域において出土している。榎林式に比定される資料は、B区から主体的に出土しており、調査区西側では第1・4竪穴住居跡、第18・20号土坑などとその周辺、および調査区南東側では第7号竪穴住居跡、沢1などから比較的まとまって出土する傾向が看取される。口唇波頂部には凹線による渦巻文や円形刺突文、胴部文様は地文縄文に2～3条単位の沈線による重層弧線文や横位区画文が施文されるものが多く、ボタン状貼付文が認められるものもある(図36-6・10同一個体)。地文縄文は単節LR・RLが主体的で、原体の回転施文方向は横・縦回転がやや多く、斜回転も少数認められる。最花式に比定される資料は、A区の沢2、B区西の第1号竪穴住居跡周辺や沢1、C区東の調査区東側からまとまって出土しているが、B区からの出土量は少ない傾向がある。口唇部は先細りの形状を呈するものが多く、折り返し状口縁の資料も認められる。胴部文様は、地文縄文に沈線による逆U字状懸垂文が施文されるものが主体的であるが、他に縦位の条痕を地文として沈線に



全体

種類	中期前半	中期後半	中期全量	前期後葉	後期後葉	前期前半	前期後半	前期全量	後期前半	後期後半	後期全量	割合	割合(%)	割合(%)
縄文	17,121	10,124	27,245	1,000	1,000	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	1,000
弥生	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	1,000
合計	18,121	11,124	29,245	2,000	2,000	2,000	2,000	4,000	2,000	2,000	4,000	2,000	2,000	2,000

A区

種類	中期前半	中期後半	前期後葉	後期後葉	割合	割合(%)	割合(%)
縄文	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
弥生	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
合計	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000

B区

種類	中期前半	中期後半	中期全量	前期後葉	後期後葉	前期前半	前期後半	前期全量	後期前半	後期後半	後期全量	割合	割合(%)	割合(%)
縄文	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	1,000
弥生	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	1,000
合計	2,000	2,000	4,000	2,000	2,000	2,000	2,000	4,000	2,000	2,000	4,000	2,000	2,000	2,000

B区西

種類	中期前半	中期後半	中期全量	前期後葉	後期後葉	割合	割合(%)	割合(%)
縄文	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
弥生	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
合計	2,000	2,000	4,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000

C区東

種類	中期前半	中期後半	中期全量	前期後葉	後期後葉	割合	割合(%)	割合(%)
縄文	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
弥生	1,000	1,000	2,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
合計	2,000	2,000	4,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000

図62 出土土器時期別比率

よる懸垂文が施文されるもの(図33-7)や、粗雑な縦位沈線が認められるもの(図11-17~19)もある。地文条痕の資料や粗雑な縦位沈線の資料は、大川添(1)遺跡(青森県教育委員会2011)、階土町野場(5)遺跡(青森県教育委員会1993)などに類例がみられる。地文縄文は単節LR・RLが主体的で、回転施文方向は横・斜回転が多い。斜回転施文のものは横走縄文・縦走縄文の双方が認められる。

中期末葉から後期初頭の土器は、全区域において出土しているが、全体的に出土量が少なく大木10式併行期、馬立式などに比定される破片資料が断片的に認められるのみである。

後期前葉の土器は全区域において出土しており、十腰内I式の古相に位置づけられるものが主体的である。B区からの出土量が最も多く、特に第1・36号土坑とその周辺、第1号土器埋設遺構、沢2などの調査区北西側から出土している。この他、B区西では沢1において分布が集中するが、A区・C区においては極端に出土量が少ない。器種は深鉢形・鉢形・浅鉢形・壺形などが認められる。口縁部は波状口縁や折り返し状口縁のものが多く、波頂部下には隆帯貼付文が認められるものもある。胴部文様は隆沈線や沈線によるものが主体的で、他に網目状熱糸文や無文のものなどがある。沈線文には、円形文・楕円形文の組み合わせ文様、波状入組文、S字状文、弧状文、鋸歯状文、格子状文など多種が認められる。沈線は2条単位のものが多い。また、縄文が充填施文される資料には、節の細かい単節原体が用いられる場合もある(図38-17、図54-14・15)。図27-21・図39-8は切断壺形土器の破片資料である。

後期後葉の土器は、A区を除く各区域から出土しているが、全体的に出土量は少ない。B区では第2号竪穴住居跡覆土、平成20年度調査の埋没沢、C区では平成20年度調査のTR-49などから、十腰内V群に相当する破片資料が断片的に認められる。深鉢形、壺形、貼瘤を起点とする弧線文が施文さ

れる注口土器片などが認められる。また、当該期に属する粗製深鉢形土器には、口縁部は内湾して立ち上がり、口唇部が内傾するものやわずかに肥厚するものなどが認められる。胎土は粗砂粒が多く混入しているものが多い。

晩期前葉から中葉の土器は、B区の沢1から主に出土しているが、全体的に出土量は少ない。大洞B式・大洞BC式に比定される土器小破片が数点ある。また、当該期に属する粗製深鉢形土器には、縦・斜位の条痕、地文縄文のみのものなどがある。

縄文晩期末葉から弥生前期の土器は、A区・B区から出土しているが、全体的に出土量は少ない。A区では沢2、B区では平成20年度調査の埋没沢などから、大洞A式から砂沢式の範疇で捉えられる資料が認められる。深鉢形土器や口縁部突起の上面に3本の刻目が施される台付鉢などが認められる。胴部文様には多条の平行沈線、連続的に途切れる横位沈線、矢羽状沈線文ないしは変形工字文と推測される斜行沈線などが認められる。(最上)

第2節 石器

石器は、遺構内から159点、遺構外から332点、合計491点、総重量62,224kgである。剥片石器類、石斧・礫石器類それぞれの内訳は図63の表とグラフに示した通りであるが、以下、詳細について記載する。

剥片石器類は合計443点で、石器全体の割合で見ると90.2%であり、大多数を占めていることがわかる。器種別で見ると、石鏃(1.4%)・石槍(0.9%)・石鏑(2.5%)・石錐(4.1%)・石匙(1.6%)・楔形石器(0.2%)・三脚石器(0.2%)といった、いわゆる定形石器の類はそれぞれ5%にも満たないほど少量であることがわかる。一方、刮器(10.8%)・二次調整のある剥片(42.2%)・微小剥離痕のある剥片(31.8%)といった、いわゆる不定形石器の類は、剥片石器類の約8割を占める出土量であることがわかる。

剥片石器類集計表

器種	石鏃	石槍	石鏑	石錐	石匙	楔形	三脚	刮器	調整	石鏃	二次調整	微小剥離	小計	剥片	合計
数量(個)	6	4	11	18	7	1	1	6	48	13	197	141	443	493	936
重量(g)	14.3	66.9	544.4	434.6	182.3	6	292.9	399.8	1933.5	1948.6	3387.2	2945.9	12046.4	6267.7	18314.1
比率(%)	1.4	0.9	2.5	4.1	1.6	0.2	0.2	1.4	10.8	2.9	42.2	31.8	100.0	-	-
剥片比率(%)				5.1					5.8	3.4	20.0	15.0	47.3	52.7	100.0
全体の比率(%)	1.2	0.8	2.2	3.7	1.4	0.2	0.2	1.2	9.8	2.6	38.1	28.7	90.2	-	-

石斧・礫石器類集計表

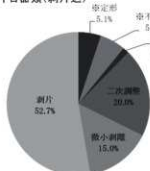
器種	磨製石斧	磨石石	礫石石	石斧	石槍	加工礫	石鏃・石匙	礫石	小計
数量(個)	4	3	26	4	1	2	7	1	48
重量(g)	473.8	727.4	12188.5	2363	35.5	477.6	33820.5	92.2	50178.5
比率(%)	8.3	6.3	84.2	8.3	2.1	4.2	14.6	2.1	100.0
全体の比率(%)	0.8	0.6	5.3	0.8	0.2	0.4	1.4	0.2	9.8

石器全体の合計	
数量(個)	491
重量(g)	62224.9
比率(%)	100.00

剥片石器類



剥片石器類(剥片込)



※定形=石鏃・石槍・石鏑・石錐・石匙・楔形石器・三脚石器
※不定形=礫器・刮器

石斧・礫石器類

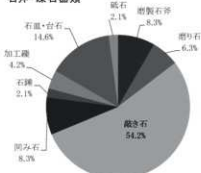
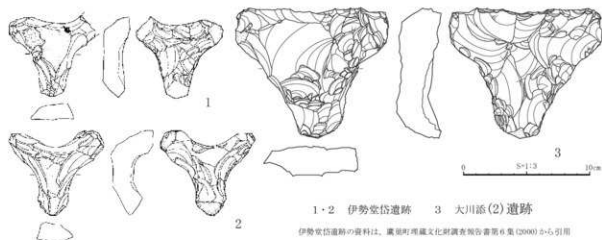


図63 出土石器器種組成

石斧・礫石器類は合計48点で、石器全体の割合で見ると9.8%と少ないことがわかる。本類の中では敲き石が54.2%と半数以上を占めるが、石器全体で見ると5.3%程度であることがわかる。その他、磨製石斧(8.3%)、磨り石(6.3%)、凹み石(8.3%)、石錘(2.1%)、加工礫(4.2%)、砥石(2.1%)が10%以下、石器全体で見るといずれも1パーセントに満たない。

まとめると、石器の全体的な傾向としては、剥片石器類の特に不定形石器の類が多いという特徴が見られるが、その原因について若干考察してみたい。まず、近隣の大川添(1)遺跡では、剥片石器が石器全体の大多数(約97%)を占めていることや、剥片石器のうち削器(27%)、微細剥離痕を有する剥片(26%)、二次加工剥片(19%)、が多いという、本遺跡と同じような成果が得られている。これは、剥片石器の石材となる珪質頁岩が大川添(1)・(2)遺跡近隣で容易に採取でき、定形石器の類に仕上げなくても、いわゆる「使い捨て」状態で剥片を利用できる背景があったものと考えられる。このことは本遺跡から出土した、加工・使用痕の無いただの剥片が493点(剥片石器も含めた割合で約53%)を数えたことから言えるであろう。ただし、大川添(1)遺跡と違う点は、本遺跡で約3%しか出土しなかった石核が約18%と多数を占めていることである。これは、大川添(1)遺跡側に珪質頁岩の採取場もしくは石器製作場があったことを物語るのか、大川添(2)遺跡の石核は遺棄・廃棄されたり、他の場所へ持ち込まれたりしたのかなど、はっきりしないことが多く、今後の課題となり得る点である。

最後に、特殊な器種として三脚石器について触れておきたい。三脚石器は本遺跡のB区遺構外、グリッドで示すとVI A-143グリッド、層位は第Ⅱ層より1点のみ出土した。同グリッド内には不整形で大型の第55号土坑が検出されているが、本遺跡と関連性があるかどうかは不明である。三脚石器は青森県内をはじめ、秋田県、山形県、新潟県と日本海側(東日本)に出土例はあるが、太平洋側の地域では出土していないようである。特に多く出土しているのが秋田県伊勢堂岱遺跡で、環状列石や土壘墓、遺構外などから約200個を越える量の三脚石器が出土している。伊勢堂岱遺跡出土資料で最も大きいと思われる資料2点と、本遺跡出土資料を比較してみる(図64)と、いくつかの相違点・類似点があることがわかる。まず相違点では、伊勢堂岱遺跡の資料は三角形の頂点から頂点までの長さが7~8cm程度であるのに対し、本遺跡出土資料は約12cmあり、2倍近い大きさであることがわかる。また、三角形の3辺全てに深い抉りが入るのが伊勢堂岱遺跡資料の特徴であるのに対し、本遺跡資料



1・2 伊勢堂岱遺跡 3 大川添(2)遺跡

伊勢堂岱遺跡の資料は、東北府理蔵文化財調査報告書第6集(2000)から引用

図64 三脚石器の比較

は三角形の1辺はほぼ平坦で、2辺に軽い傾りが入る程度である。類似点としては平坦な台部を有するという点と、脚部がアーチ状になっており、台部が上げ底状に持ち上げられているということである。

第3節 石製品

石製品は遺構内から1点、遺構外から2点、合計3点の出土である。遺構内から出土したのは円盤状石製品(図17-15)であり、B区第2a号竪穴住居跡覆土中から出土している。遺構外から出土したのは、有孔石製品(図45-6)と円盤状石製品(図45-7)である。遺構外出土の円盤状石製品は、B区埋没沢(沢1)第4層中(基本層序第Ⅲ層相当)から出土しており、B区第2a号竪穴住居跡からは約15mと近距離である。2点の円盤状石製品は、いずれも円形の扁平礫を素材とし、全体を研磨して円盤状に成形するという特徴を持つ。大きさも直径5cm前後と似通っている。また、周縁を打ち欠いた痕跡が見られ、B区第2a号竪穴住居跡出土の資料はそれが顕著であるが、遺構外出土の資料はよく観察しなければ分からないほどの弱い痕跡である。成形の手段なのか使用のための痕跡なのかは不明である。有孔石製品は、VX-135グリッド第Ⅲ層中から出土しているが、このグリッド周辺には縄文時代後期前葉(十腰内I式期)のB区第1～6号土坑が集中しており、本資料も同時期である可能性が高い。(新山)

第3章 まとめ

大川添(2)遺跡は、津軽地域の西部、岩木川右岸の河岸段丘上に広がる川原平台北西部に位置する。川原平土地は、岩木川及び支流の暗門川・大沢川・大川沿いに分布する砂礫台地である。遺跡は、標高約205～210mのほぼ平坦地に立地しており、既存の県道・村道を境界としてA・B・C区に区割りされているが、B区の西側には小規模な段丘があり、その段丘を境界にA区(北西側)・B区西・C区は段丘上段、A区(南東側)・B区は段丘下段に区別される。遺跡の大部分は宅地造成・田畑の開墾等により盛土や削平区域となっており、現況は主に畑地や植林された杉林である。

発掘調査により検出した遺構は、A・B・C区合わせて竪穴住居跡8軒、土坑64基、土器埋設遺構2基、その他の遺構として、硬化面2箇所、ピット143基、焼土跡4基、集石遺構1基である。いずれも縄文時代の遺構であり、住居跡が検出されたのはB区・B区西のみで、A・C区東からは確認されなかった。

出土した遺物は土器・石器・石製品で、段ボール箱で67箱分である。時期は、縄文時代中期・後期・晩期及び弥生時代である。

調査の結果、大川添(2)遺跡では、小規模な段丘を境に、上段(B区西)からは縄文時代前期末葉～中期後葉、下段(B区)からは縄文時代中期後葉～後期後葉にかけての竪穴住居跡が見つかった。集落自体は小規模であるが、河川の影響による土地形成に合わせて段丘上段から下段へと生活の場が変遷しているものと考えられる。土坑についても同様のことが言え、上段(B区西・C区東)では縄文時代中期後葉中心、下段(B区)では縄文時代中期後葉～後期後葉までと、構築時期に違いが見られる。今後、周辺の遺跡においても段丘を境に時期変遷が見られるかどうか注目されるところである。(新山・最上)

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1978 『三内沢部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第41集
- 青森県教育委員会 1986 『今津遺跡・間沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第95集
- 青森県教育委員会 1993 『野場(5)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第150集
- 青森県教育委員会 2006 『川原平(1)・(4)遺跡・大川添(2)遺跡・水上遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第409集
- 青森県教育委員会 2010 『砂子瀬遺跡Ⅱ・大川添(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第482集
- 青森県教育委員会 2011 『大川添(1)遺跡・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第500集
- 青森県立郷土館 1988 『名川町剣吉町遺跡(第2地区)』青森県立郷土館調査報告書第22集・考古-7
- 青森市営沢遺跡発掘調査団 1979 『営沢遺跡』
- 名川町教育委員会 1984 『剣吉町遺跡発掘調査報告書』
- 弘前市教育委員会 1991 『砂沢遺跡発掘調査報告書』
- 鷹巣町教育委員会 2000 『伊勢堂岱遺跡詳細分布調査報告書(3)』鷹巣町埋蔵文化財調査報告書第6集
- 五十嵐一治 2000 『環状列石構築直前の土壌墓と祭祀関連遺物-伊勢堂岱遺跡の事例から-』『青森県考古学第12号』
- 葛西 勲 1979 『十腰内Ⅰ式土器の編年の細分』『北奥古代文化』第11号
- 葛西 勲・小幡育忠 2003 『切断壺形土器(切断土器)の研究』『市史あおり』6
- 小林圭一 2010 『亀ヶ岡式土器成立期の研究-東北地方における縄文時代晩期前葉の土器様式-』早稲田大学総合研究機構先史考古学研究所
- 鈴木克彦 1997 『注口土器の研究』『研究紀要』第2号青森県埋蔵文化財調査センター
- 鈴木克彦 1998 『東北地方北部の縄文中期後半の土器』『研究紀要』第3号青森県埋蔵文化財調査センター
- 鈴木克彦 1998 『東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・2(上)』『考古学雑誌』第83巻2号
- 鈴木克彦 1998 『東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・2(下)』『考古学雑誌』第83号3号
- 鈴木克彦 2000 『東北地方北半部の中期・後期区分に関する編年学的研究(上)-大曲1式などの中期末葉の土器群-』『縄文時代』第11号
- 鈴木克彦 2001 『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣出版
- 関根達人 2005 『「十腰内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ群土器」に関する今日的な理解』『北奥の考古学』葛西勲先生還暦記念論文集刊行会
- 成田滋彦 1981 『青森県の土器』『縄文文化の研究4』雄山閣
- 成田滋彦 1986 『入江・十腰内式土器様式』『縄文土器大観4 後期・晩期・続縄文』小学館
- 本間 宏 1987 『縄文時代後期初頭群の研究(1)』『よねしろ考古』第3号

土器観察表

調査番号	調査区	出土位置	出土層位	器種	部位	文様等の属性	時期	取上番号	備考
11-1	A	VI-117 VII-138	黒御木 黒色土	深鉢形	口縁部	直交口縁?, 口唇部肥厚, 凹線文, 丸模 同転	複様式		
11-2	A	PC1 VII-138	3層	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚, 凹線文, 丸模同転	複様式	P-20	
11-3	A	PC1 VII-138	3層	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚, 丸模同転	複様式	P-14	
11-4	A	PC1 VII-138	3層 5層	深鉢形	口縁部~胴部	口唇部肥厚, 丸模~縦同転	複様式	P-3, 8, 11, 35	煤状炭化物付着
11-5	A	PC1 VII-138	3層	深鉢形	胴部	横位沈線, 丸斜同転	複様式	P-20	煤状炭化物付着
11-6	A	VI-117 VII-138	黒御木 黒色土	深鉢形	胴部	横位沈線, 縦位沈線, 丸模同転	複様式		
11-7	A	PC2 VII-133	4層	深鉢形	口縁部	口縁折直し状, 丸模同転	最古式	P-54	
11-8	A	PC2 VII-133	4層	深鉢形	口縁部	口縁折直し状, 沈線(逆T字状懸垂 文), 丸模同転	最古式	P-42	図11-9-30と同一
11-9	A	PC2 VII-133	4層	深鉢形	胴部	沈線(逆T字状懸垂文), 丸模同転	最古式	P-39, 42, 49	図11-9-30と同一
11-10	A	VI-132	IIIa層	深鉢形	胴部	沈線(懸垂文), 丸模同転	最古式		
11-11	A	VI-133	IV層	深鉢形	胴部	沈線(懸垂文), 丸模同転	最古式		
11-12	A	VI-133	IV層	深鉢形	胴部	沈線(懸垂文), 丸斜同転	最古式		
11-13	A	PC2 VII-133	4層	深鉢形	胴部	沈線(逆T字状懸垂文), 丸模同転	最古式	P-52	
11-14	A	PC2	4層	深鉢形	胴部	沈線(逆T字状懸垂文), 丸模同転	最古式	P-2	
11-15	A	PC1 VII-138	3層	深鉢形	胴部	沈線(逆T字状懸垂文), 丸斜同転	最古式	P-19	
11-16	A	PC2 VII-133	4層	深鉢形	胴部	沈線(懸垂文), 丸斜同転	最古式		
11-17	A	VI-131 VII-131	黒御木 黒色土	深鉢形	胴部	縦位沈線	最古式?		図11-18-19と同一
11-18	A	VI-131 VII-131	黒御木 黒色土	深鉢形	胴部	縦位沈線	最古式?		図11-17-19と同一
11-19	A	VI-131 VII-131	黒御木 黒色土	深鉢形	胴部~底部	縦位沈線, 底部同一・工具による調整	最古式?		図11-17-18と同一, 底径8.6cm
11-20	A	PC2	3層	深鉢形	底部	底部網代底	縄文中期後葉 ~中期末葉	P-6, 7, 8	底径8.0cm
11-21	A	PC1 VII-138	3層 5層	深鉢形	口縁部	口縁部無文, 丸模同転	縄文中期末葉	P-17, 31	
11-22	A	VI-133 VII-134	黒御木 黒色土	深鉢形	口縁部	口縁部無文, 丸模同転	縄文中期末葉		
11-23	A	PC4	4層	深鉢形	口縁部	内外面3'8	縄文中期末葉		
11-24	A	PC2 VII-134	4層	深鉢形	口縁部	丸模同転, 内面網毛状工具7'	縄文中期後葉	P-9	
11-25	A	PC4	4層	深鉢形	口縁部	丸模同転	縄文中期後葉		
11-26	A	PC1 VII-138	3層	深鉢形	胴部	単純網毛体(葉)型	縄文中期後葉	P-27	
11-27	A	PC4	4層	深鉢形	胴部	丸模同転	縄文中期後葉		粗砂和混入
11-28	A	VI-133	IV層	深鉢形	胴部	丸斜同転	縄文中期後葉		煤状炭化物付着
11-29	A	PC4	4層	深鉢形	胴部	丸斜同転	縄文中期後葉		粗砂和混入
11-30	A	PC2 VII-133	4層	深鉢形	胴部~底部	丸模同転, 底部網代底	最古式	P-39	図11-9-9と同一, 底径12.0cm
12-1	A	PC1 VII-138 VII-139	3層 5層	深鉢形	胴部	沈線(三角形文), 丸模同転, 磨消	馬立式	P-32, 33	
12-2	A	PC2 VII-136	4層	深鉢形	胴部	沈線(糸帯状), 丸光磨	十楯内1式	P-17	
12-3	A	PC2 VII-132	4層	付付	右部	内外面3'8	十楯内1式	P-22	
12-4	A	VI-133	IIIa層	深鉢形	胴部	縦位糸帯	縄文晩葉		
12-5	A	PC4	4層	深鉢形	胴部	縦位糸帯	縄文晩葉		煤状炭化物付着
12-6	A	PC4	4層	深鉢形	胴部	縦位糸帯	縄文晩葉		煤状炭化物付着, 粗砂和混入
12-7	A	PC2 VII-131	4層	深鉢形	口縁部	平口縁, 口縁内面沈線, 横位平行沈線 (上5-5, 3, 5目節起沈線), 丸模同転	縄文晩葉末葉 ~弥生初期	P-37	図12-9-9と同一
12-8	A	PC2 VII-131	4層	深鉢形	口縁部~胴部	平口縁, 口縁内面沈線, 横位平行沈線 (上5-5, 3, 5目節起沈線), 丸模同転	縄文晩葉末葉 ~弥生前期	P-33, 35, 37, 38	図12-9-9と同一, 煤状炭化物付着
12-9	A	PC2 VII-131	4層	深鉢形	胴部~底部	丸模同転	縄文晩葉末葉 ~弥生前期	P-35, 37, 38	図12-9-9と同一, 器高(11.7cm), 底径6.2cm
12-10	A	PC2 VII-131	4層	付付鉢	口縁部	突起上面糸帯刻み, 口縁内面沈線, 横位 平行沈線, 斜行沈線, 丸模同転	縄文晩葉末葉 ~弥生前期	P-28, 31, 32	図12-11と同一
12-11	A	PC2 VII-131	4層	付付鉢	胴部	横位平行沈線, 丸模同転	縄文晩葉末葉 ~弥生前期	P-27, 29	図12-10と同一, 器高(4.7cm)
15-1	B	SI-01	4層	深鉢形	胴部~底部	丸模~斜同転	縄文中期後葉		煤状炭化物付着, 器高30.0cm, 底径9.5cm
15-2	B	SI-01	4層	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚, 内外面7'	複様式		
16-1	B	SI-02b	4層	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚, 凹線文, 横位沈線	複様式		

調査番号	調査区	出土位置	出土層位	器種	部位	文様等の属性	時期	取上番号	備考
16-2	B	S1-02b	覆土上層	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚, 紅顔回転	複様式		
16-3	B	S1-02b	覆土上層	深鉢形	胴部	横位沈線, 1, 8線回転	複様式	P-15	
16-4	B	S1-02b	覆土下層	深鉢形	胴部	弧状沈線, 0段多条(斜)縦回転	複様式	P-10	煤状炭化物付着
16-5	B	S1-02b	覆土下層	深鉢形	口縁部	横位沈線, 紅顔回転	複様式	P-16	
16-6	B	S1-02b	覆土上層	深鉢形	胴部	沈線(横位文), 紅顔回転	複様式		
16-7	B	S1-02b	覆土上層	深鉢形	口縁部	口縁折返し状, 2条単位沈線	十層内1式	P-5	
16-8	B	S1-02b	覆土下層	深鉢形	胴部	2条単位沈線	十層内1式	P-12	
16-9	B	S1-02b	覆土	深鉢形	口縁部	紅顔回転	縄文中期後葉	P-2	
16-10	B	S1-02b	覆土上層	深鉢形	胴部	内外面3/4	縄文後期前葉		
16-11	B	S1-02b	覆土上層	深鉢形	胴部	1, 8線・斜回転	縄文中期末葉～後期前葉?		煤状炭化物付着
16-12	B	S1-02b	深面	深鉢形	胴部	1, 8線回転	縄文中期末葉～後期前葉?	P-17	
16-13	B	S1-02a	深面	深鉢形	底部	1, 8線回転, 波線副代痕(1/4調整)	縄文中期後葉 ～中期末葉		底径7.0cm
17-1	B	S1-02b	覆土上層	注口	胴部	胎線, 沈線, 1, 8線消	十層内V群併行		図17-2～6と同-
17-2	B	S1-02b	覆土上層	注口	胴部	胎線跡のみ, 沈線(連結帯状文), 1, 8線消	十層内V群併行		図17-1-2～4-6と同-
17-3	B	S1-02b	覆土上層	注口	胴部	胎線, 沈線(連結帯状文), 1, 8線消	十層内V群併行		図17-1-2-4-6と同-
17-4	B	S1-02b	覆土上層	注口	胴部	横位沈線, 1, 8線消	十層内V群併行		図17-1-3-5-6と同-
17-5	B	S1-02b	覆土上層	注口	胴部～底部	底部上/下底状	十層内V群併行		図17-1-4-6と同-, 底径3.7cm
17-6	B	S1-02b	覆土上層	注口	注口部	外面3/4	十層内V群併行		図17-1-5と同-
18-1	B	S1-04	埋設	深鉢形	胴部	1, 8線・斜回転	縄文中期後葉		器高(18.8cm), 胴部最大径 22.8cm
18-2	B	S1-04	覆土	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚, 1, 8線回転	複様式		
18-3	B	S1-04	覆土下層	深鉢形	胴部	横位沈線, 1, 8線回転	複様式	P-15	
18-4	B	S1-04	覆土上層	深鉢形	口縁部	底状口縁, 口縁折返し状, 2条単位沈線	十層内1式	P-13	
18-5	B	S1-04	覆土	深鉢形	胴部	横位沈線(横位形式)	十層内1式		
18-6	B	S1-04	覆土	深鉢形	胴部	2条単位沈線(弧状文)	十層内1式		
18-7	B	S1-04	覆土	深鉢形	胴部	沈線	十層内1式		
18-8	B	S1-04	覆土	深鉢形	胴部	沈線	十層内1式		
18-9	B	S1-04	覆土下層	深鉢形	口縁部	内外面3/4	縄文後期前葉?	P-14	煤状炭化物付着
18-10	B	S1-04	覆土	深鉢形	胴部	1, 8線回転	縄文中期末葉?	P-4	
18-11	B	S1-04	覆土	深鉢形	胴部	1, 8線回転	縄文中期後葉 ～後期前葉		
18-12	B	S1-04	覆土下層	深鉢形	胴部	紅顔回転	縄文中期後葉 ～後期前葉	P-8	
21-1	B	S1-07	1層+2層	深鉢形	胴部～底部	1, 8線回転	縄文中期後葉		煤状炭化物付着, 器高(15.8cm), 底径6.2cm
21-2	B	S1-07	2層	深鉢形	口縁部	底状口縁, 口唇部肥厚, 副線文(円形刺突), 紅顔回転	複様式		図21-3-4と同-, 煤状炭化物付着
21-3	B	S1-07	2層	深鉢形	口縁部	底状口縁(大小波状), 口唇部肥厚, 副線文(垂条文, 小波状部に円形刺突), 紅顔・斜回転	複様式		図21-2-4と同-, 煤状炭化物付着
21-4	B	S1-07	2層	深鉢形	胴部～底部	紅顔回転	複様式		図21-2-3と同-, 煤状炭化物付着
21-5	B	S1-07	2層	深鉢形	胴部	横位沈線, 1, 8線消	十層内1式		
27-1	B	SK-01	覆土	深鉢形	口縁部～底部	4単位底状口縁, 波頭部隆起帯付, 口縁折返し状, 沈線(人組波状文, 円形文, 横位形式)	十層内1式		煤状炭化物付着, 器高21.0cm, 口径17.7cm, 底径18.5cm
27-2	B	SK-01	覆土	深鉢形	胴部	沈線	十層内1式		内面炭化物付着
27-3	B	SK-01	覆土	深鉢形	胴部	横位沈線	十層内1式		
27-4	B	SK-01	覆土	深鉢形	胴部	横位沈線赤文	十層内1式		
27-6	B	SK-02	覆土	深鉢形	胴部	横位沈線(横位)	十層内1式		内面炭化物付着
27-7	B	SK-02	覆土	深鉢形	胴部	沈線	十層内1式		内面炭化物付着
27-8	B	SK-02	覆土	深鉢形	胴部	内外面3/4	十層内1式		内面炭化物付着
27-10	B	SK-03	覆土	甬形	口唇部	底状口縁, 波頭部隆起帯付の底縁, 口縁折返し状, 沈線(横位形式)	十層内1式		図27-10と同-, 赤色顔料付着
27-11	B	SK-03	覆土	深鉢形	胴部	2条単位沈線	十層内1式		
27-12	B	SK-03	覆土	深鉢形	口縁部	底状口縁, 波頭部跡のみ	十層内1式		
27-13	B	SK-03	覆土	甬形	胴部	沈線(横位形式)	十層内1式		図27-10と同-, 赤色顔料付着
27-14	B	SK-03	覆土	深鉢形	胴部	2条単位沈線	十層内1式		煤状炭化物付着
27-17	B	SK-04	覆土	深鉢形	口縁部～胴部	沈線(人組波状文, 弧状文)	十層内1式		
27-18	B	SK-04	覆土	浅鉢形	口縁部	沈線(人組波状文?), 弧状文?	十層内1式		
27-19	B	SK-04	覆土	深鉢形	胴部	沈線(人組波状文)	十層内1式		
27-20	B	SK-04	覆土	深鉢形	口縁部	口縁折返し状, 口縁部内面に1条の横位沈線	十層内1式		
27-21	B	SK-04	覆土	甬形	胴部	横位沈線(口縁折返し状の連続刺突に上る凸部跡), 斜行沈線	十層内1式		赤色顔料付着
27-22	B	SK-04	覆土	深鉢形	胴部	横位沈線, 内外面3/4	十層内1式		
27-23	B	SK-04	覆土	深鉢形	胴部	横位沈線赤文(半輪的赤条第1輪部)	十層内1式		煤状炭化物付着
27-25	B	SK-06	覆土	深鉢形	口縁部	口縁折返し状, 横位沈線	十層内1式		
27-26	B	SK-06	覆土	深鉢形	胴部	2条単位沈線(弧状文)	十層内1式		

国政番号	選挙区	出土位置	出土層位	器種	部位	文様等の属性	時期	取上番号	備考
28-1	B	SK-18	壇土	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚, 凹線文, 横位沈線	複様式		
28-2	B	SK-18	壇土	深鉢形	口縁部	口唇部内縁, 斜斜凹輪	縄文後期後葉?		図28-3と同-, 粗砂粒混入
28-3	B	SK-18	壇土	深鉢形	口縁部	口唇部内縁, 斜斜凹輪	縄文後期後葉?		図28-2と同-, 粗砂粒混入
28-5	B	SK-20	壇土	深鉢形	胴部~底部	1段横・斜凹輪	縄文中期後葉		底径12.1cm
28-6	B	SK-20	壇土	深鉢形	口縁部	廣状口縁, 口唇部肥厚, 凹線文(廣部僅存文)	複様式		
28-7	B	SK-24	1層	深鉢形	口縁部	口唇部平坦化 ⁴ , 条痕	縄文中期		
28-8	B	SK-33P1C1	壇土	深鉢形	胴部	沈線	十層内1式		
28-9	B	SK-33	壇土	深鉢形	口縁部	1段横凹輪	縄文後期前葉?		
28-11	B	SK-36	壇土下層	深鉢形	口縁部~胴部	5単位廣状口縁, 廣部部隆帯陥付, 口唇部隆状縁(内形文, 横凹形文), 胴部沈線(S字状文, 内凹形文, 横凹形文)	十層内1式	P-1~7, 12, 14, 15	器高(30.0cm), 口径20.7cm
28-12	B	SK-36	壇土下層	深鉢形	口縁部	廣状口縁, 廣部部隆帯陥付, 沈線(内形文, 横凹形文)	十層内1式		縄文後期物付着
28-13	B	SK-36	壇土下層	深鉢形	口縁部	口唇部平坦化 ⁴ , 沈線(横凹形文), 1段条痕	十層内1式		
28-14	B	SK-36	壇土	深鉢形	口縁部	沈線(内形文, 横凹形文), 1段条痕	十層内1式		
28-15	B	SK-36	壇土	深鉢形	口縁部	口唇部平坦化 ⁴ , 横位沈線, 1段条痕	十層内1式		
28-16	B	SK-36	壇土	深鉢形	口縁部	口唇部平坦化 ⁴ , 横位沈線, 1段条痕	十層内1式		
28-17	B	SK-36	壇土下層	深鉢形	口縁部	廣状口縁, 口唇部折衷化 ⁴ , 沈線(内形文, 横凹形文), 1段条痕	十層内1式		縄文後期物付着
28-18	B	SK-36	壇土	深鉢形	口縁部	口唇部折衷化 ⁴ , 内外面 ⁴	十層内1式		54と同-
28-19	B	SK-36	壇土	深鉢形	胴部	2条単位沈線(S字状文), 斜行沈線	十層内1式		
28-20	B	SK-36	2層	深鉢形	胴部	沈線(横凹形文, 弧状文)	十層内1式	P-1, 6	
28-21	B	SK-36	壇土下層	深鉢形	口縁部~底部	4単位廣状口縁, 内外面 ⁴	十層内1式		縄文後期物付着
28-22	B	SK-36	壇土	深鉢形	胴部~底部	内外面 ⁴	十層内1式		
29-1	B	SK-37	壇土下層	深鉢形	胴部	沈線(内形文)	十層内1式	P-21	
29-2	B	SK-37	壇土上層	深鉢形	口縁部	口唇部平坦化 ⁴ , 内外面 ⁴	縄文後期前葉?	P-10	
29-3	B	SK-37	壇土	深鉢形	口縁部	内外面 ⁴	縄文後期前葉	P-4	
29-4	B	SK-37	壇土上層	深鉢形	胴部~底部	内外面 ⁴	縄文後期前葉		
30-1	B	SK-01	1層~3層	深鉢形	口縁部~底部	6単位廣状口縁, 3条単位沈線(S字状文)と斜行沈線の組合せによる人組状沈文, 弧状文, 縦条痕文	十層内1式	P-1~20	縄文後期物付着, 器高34.5cm, 口径25.5cm, 底径16.4cm
30-2	B	SK-01	1層	煎形?	胴部	隆状縁	十層内1式	P-7	
31-1	B	SK-02	壇土	深鉢形	胴部	隆状縁(横凹形文)	十層内1式		
31-2	B	SK-02	壇土	深鉢形	胴部	網目状横条文(単軸筋条体第1類)	十層内1式		
32-2	B	FT62	壇土	深鉢形	胴部	沈線(格子状)	十層内1式		
32-3	B	FT63	壇土	深鉢形	口縁部	口唇部平坦化 ⁴ , 内外面 ⁴	縄文後期前葉		
32-4	B	FT14	壇土	深鉢形	胴部	網目状横条文(単軸筋条体第1類)	十層内1式		
32-5	B	FT11	壇土	深鉢形	口縁部	廣状口縁, 内外面 ⁴	十層内1式		縄文後期物付着
32-6	B	FT11	壇土	深鉢形	口縁部	沈線	十層内1式		
32-7	B	FT15	壇土	深鉢形	胴部	沈線(點条文), 縦位条痕	最古式?		
32-8	B	FT34	1層	深鉢形	口縁部	1段横・斜凹輪	縄文後期後葉		図33-9と同-
32-9	B	FT34	1層	深鉢形	胴部	1段横・斜凹輪	縄文後期後葉		図33-9と同-
32-10	B	FT34	1層	深鉢形	胴部	1段横・斜凹輪	縄文後期後葉		縄文後期物付着
32-12	B	FT38	壇土	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚, 凹線文, 1段横凹輪	複様式		縄文後期物付着
32-13	B	FT38	壇土	深鉢形	胴部	沈線(条条文), 1段横凹輪	複様式		
32-14	B	FT38	壇土	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚, 1段横凹輪	複様式		縄文後期物付着
32-15	B	FT91	1層	煎形	胴部	隆状縁(内形文, 横凹形文)	十層内1式	P-1	
36-1	B	VZ-134	煎層	深鉢形	口縁部	廣状口縁, 隆帯陥付, 1層内・8層内	内層上層6式		
36-2	B	VZ-138	煎層	深鉢形	口縁部	口唇部隆帯突起, ボタン状陥付, 隆帯, 1段横凹輪	内層上層6~8式		
36-3	B	VZ-146	煎層	深鉢形	口縁部	口唇部折衷化 ⁴ , 廣状隆帯陥付, 1段横凹輪	内層上層6~8式		
36-4	B	VZ-140	煎層	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚, 凹線文, ボタン状陥付	複様式		
36-5	B	VZ-148	-	深鉢形	口縁部	廣状口縁, 口唇部肥厚, 凹線文(条条文), 1段横凹輪	複様式		
36-6	B	IC1	1層	深鉢形	口縁部	廣状口縁, 口唇部肥厚, 凹線文(条条文), 沈線(縦線文), 1段横凹輪	複様式		図36-10と同-
36-7	B	IC東端	1層	深鉢形	口縁部	廣状口縁, 口唇部肥厚, 凹線文(条条文), 沈線(縦線文), 1段横凹輪	複様式		
36-8	B	IC1	1層	深鉢形	口縁部	廣状口縁, 口唇部肥厚, 凹線文(条条文), 沈線(縦線文), 1段横凹輪	複様式		
36-9	B	IC-137	煎層	深鉢形	口縁部	廣状口縁, 口唇部肥厚, 凹線文(条条文), 1段横凹輪	複様式		
36-10	B	IC1	1層	深鉢形	胴部	ボタン状陥付文, 沈線(縦線文), 1段横凹輪	複様式		図36-6と同-
36-11	B	IC2	-	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚, 凹線文, 沈線(縦線文), 1段横凹輪	複様式		
36-12	B	VZ-147	煎層	深鉢形	口縁部	廣状口縁, 口唇部肥厚, 凹線文, 沈線, 1段横凹輪	複様式		
36-13	B	IC1	1層	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚, 凹線文, 1段横凹輪	複様式		縄文後期物付着

調査番号	調査区	出土位置	出土層位	器種	部位	文様等の属性	時期	取上番号	備考
36-14	B	VY-148	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	直状口縁、口唇部肥厚、凹線文、1段横凹筋	複様式		
36-15	B	VU-149	I層	深鉢形	口縁部	直状口縁、口唇部肥厚、凹線文、沈線(帯線文)、1段横凹筋	複様式		煤状炭化物付着
36-16	B	PC2	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	直状口縁、口唇部肥厚、凹線文、横位沈線、1段横凹筋	複様式		
36-17	B	VH-144	Ⅱc層	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚、凹線文、沈線(帯線文)、1段横凹筋	複様式	P-29	
36-18	B	PC1	Ⅱ層土層	深鉢形	口縁部	直状口縁、口唇部肥厚、口唇部内縁、凹線文、1段横凹筋	複様式		煤状炭化物付着
36-19	B	VU-149	I層	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚、凹線文、1段横凹筋	複様式		煤状炭化物付着
36-20	B	PC1	I層	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚、横位沈線、1段横凹筋	複様式		36-20と同一
36-21	B	VW-148	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚、横位沈線、1段横凹筋	複様式		
36-22	B	VY-137	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	直状口縁、横位沈線、1段横凹筋	複様式?	P-12	
36-23	B	PC1	I層	深鉢形	胴部	沈線(帯線文)、1段横凹筋	複様式		煤状炭化物付着
36-24	B	VH-144	Ⅱc層	深鉢形	胴部	横位沈線、0段多糸(0)横凹筋	複様式	P-26	
36-25	B	PC1	I層	深鉢形	胴部	横位沈線、1段横凹筋	複様式		36-20と同一
36-26	B	VX-148	—	深鉢形	胴部	横位沈線、1段横凹筋	複様式	P-6	
36-27	B	VH-144	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線(帯線文)、1段横凹筋	複様式		
37-1	B	PC1 VT-150 VS-151	4層	深鉢形	口縁部～胴部	直状口縁、口唇部肥厚、1段横凹筋	複様式	P19, 21, 25	煤状炭化物付着
37-2	B	PC1	I層	深鉢形	口縁部	直状口縁、口唇部肥厚、1段横凹筋	複様式		煤状炭化物付着
37-3	B	VH-137	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	直状口縁、口唇部肥厚、1段横凹筋	複様式		
37-4	B	PC1 VS-151	4層	深鉢形	口縁部～胴部	直状口縁、口唇部肥厚、1段横凹筋	複様式	P-24, 25, 26	煤状炭化物付着
37-5	B	VX-148	—	深鉢形	口縁部	直状口縁、1段横凹筋	複様式	P-1	煤状炭化物付着
37-6	B	VX-148	—	深鉢形	口縁部～胴部	口縁折反し状、1段横凹筋	複様式		煤状炭化物付着
37-7	B	VW-148	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚	複様式		粗砂粒混入
37-8	B	PC2	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚、1段横凹筋	複様式		煤状炭化物付着
37-9	B	PC1	I層	深鉢形	胴部	沈線(帯線文)、1段横凹筋	複様式		
37-10	B	PC1 VS-149	Ⅳ層	深鉢形	胴部	沈線(帯線文)、1段横凹筋	景花式	P-26	煤状炭化物付着
37-11	B	VH-141	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	直状口縁、直溝部内外面に横状隆帯、沈線	大木10式併行		
37-12	B	VH-142	Ⅱa層	深鉢形	口縁部	直状口縁、直溝部内外面に横状隆帯	大木10式併行		
37-13	B	VH-141	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口縁折反文、沈線(方形区画文)、1段横凹筋、光筋	大木10式併行		
37-14	B	VY-137	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線、1段横凹筋、磨溝	大木10式併行		
37-15	B	VH-141	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線(方形区画文)、横状隆帯、1段横凹筋、光筋	大木10式併行		
37-16	B	VH-141	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線(方形区画文)、横状隆帯、1段横凹筋、磨溝	大木10式併行		
37-17	B	VH-144	Ⅱc層	深鉢形	口縁部	1段横凹筋	縄文中期後葉	P-29, 32, 35	
37-18	B	VH-142 VH-142	Ⅱa層	深鉢形	口縁部	内外面3'5'	縄文中期末葉		
37-19	B	VT-149	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口縁折反文、1段横凹筋	縄文中期末葉		
37-20	B	VX-146 VX-147	—	深鉢形	胴部	1段横凹筋	縄文中期後葉		煤状炭化物付着
37-21	B	VY-138	Ⅱ層	深鉢形	胴部	1段横凹筋	縄文中期後葉		
38-1	B	VW-147	Ⅱ層	深鉢形	口縁部～胴部	1段横凹筋	縄文中期後葉 ～中期末葉		煤状炭化物付着
38-2	B	VH-142	Ⅱa層	深鉢形	胴部	単純筋条体形)5筋	縄文中期後葉 ～中期末葉		
38-3	B	VT-149	Ⅱ層	深鉢形	胴部	単純筋条体形)5筋	縄文中期後葉 ～中期末葉		
38-4	B	PC1	I層	深鉢形	胴部～底部	1段横凹筋	縄文中期後葉		煤状炭化物付着
38-5	B	海東塚	I層	深鉢形	胴部～底部	内外面3'5'、底部副代筋(?)調整	縄文中期後葉		底径φ:1cm
38-6	B	VH-142	Ⅱa層	深鉢形	胴部～底部	単純筋条体形)5筋	縄文中期後葉		底径φ:1.1cm
38-7	B	VW-151	—	深鉢形	胴部～底部	1段横凹筋、筋部工具による調整痕	縄文中期後葉		底径φ:1cm
38-8	B	VH-144	Ⅱc層	深鉢形	口縁部～胴部	直状口縁、口縁折反し状、隆沈線(方形区画文、凹線文、横行筋文)	1層内1式	P-47, 70	煤状炭化物付着
38-9	B	VC-135	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	直状口縁、隆沈線(凹形文、横行筋文)	1層内1式		
38-10	B	VH-138	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口縁内面沈線、沈線(凹形文)	1層内1式		
38-11	B	VY-138	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口縁折反し状、沈線(凹形文)	1層内1式		
38-12	B	VH-138	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	直状口縁、沈線(帯状文、横位沈線)	1層内1式		
38-13	B	VC-134	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口縁折反し状、沈線(帯状文、横位沈線)	1層内1式		
38-14	B	VH-144	I層	深鉢形	口縁部	口縁折反し状、3糸単位横位沈線	1層内1式		
38-15	B	PC1 VT-150	—	深鉢形	口縁部～胴部	直状口縁、2糸単位沈線(5字状文、帯状文)	1層内1式	P-19	
38-16	B	VH-144	Ⅱ層	深鉢形	口縁部～胴部	直状口縁、2糸単位沈線(5字状文)	1層内1式	P-11, 12	
38-17	B	VH-141	Ⅱ層	深鉢形	口縁部～胴部	沈線(方形区画文)、1段横凹筋	1層内1式		煤状炭化物付着

調査番号	調査区	出土位置	出土層位	器種	部位	文様等の属性	時期	取上番号	備考
20-1	B	VB-144	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口縁部直し状, 2条単位横線・斜行沈線	十層内1式		
20-2	B	VB-137	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口縁部直し状, 横線・斜行沈線	十層内1式		
20-3	B	VW-135	—	深鉢形	口縁部	口縁部直し状, 横線沈線	十層内1式		
20-4	B	VU-134	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	沈線(格子状)	十層内1式		
20-5	B	海東端	Ⅰ層	鉢形	口縁部	直状口縁, 直線部隆部凹付, 沈線(円形文, 横形凹文)	十層内1式		赤色顔料付着
20-6	B	VY-138	Ⅱ層	鉢形	口縁部	口縁部直し状, 横線沈線	十層内1式		
20-7	B	VF-141	Ⅱ層	浅鉢形	口縁部～胴部	平口縁, 隆沈線(三角形文), 沈線(十字状文, 弧状文)	十層内1式		
20-8	B	VW-137	Ⅱ層	皿形	胴部	構成面凹付(口)状工具の連続衝突による凹陥部, 2条単位沈線	十層内1式		赤色顔料付着
20-9	B	海東端	Ⅰ層	皿形	胴部	2条単位沈線	十層内1式		赤色顔料付着
20-10	B	VC-132	Ⅱ層	皿形	胴部	沈線(人組文)	十層内1式		
20-11	B	VB-144	Ⅱc層	深鉢形	胴部	隆沈線	十層内1式	P-41	
20-12	B	VB-137	Ⅱ層	深鉢形	胴部	隆沈線	十層内1式		
20-13	B	VB-144	Ⅱc層	深鉢形	胴部	隆沈線(円形文, 横形凹文)	十層内1式	P-45	
20-14	B	VW-134 VX-134 VY-135	Ⅱ層	深鉢形	胴部	隆沈線による横位区画文, 沈線(横形凹文, 斜行沈線)	十層内1式		
20-15	B	VY-137	Ⅱ層	深鉢形	胴部	2条単位沈線	十層内1式		
20-16	B	海東端	Ⅰ層	深鉢形	胴部	沈線(横形凹文)	十層内1式		赤色顔料付着
20-17	B	VT-140	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線(横形凹文)	十層内1式		赤色顔料付着
20-18	B	VC-138	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線(円形文, 横形凹文)	十層内1式		
20-19	B	VW-135	—	深鉢形	胴部	2条単位沈線(十字状文, 弧状文)	十層内1式		
20-20	B	VW-135	—	深鉢形	胴部	沈線(扇形文, 弧状文)	十層内1式		
20-21	B	海東端	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	沈線(扇形文)	十層内1式		
20-22	B	VW-134 VX-134 VY-135	Ⅱ層	深鉢形	胴部	横位沈線	十層内1式		外面成状物質付着
20-23	B	VB-144	Ⅱc層	深鉢形	胴部	網目状横糸文(単軸結条体第1期型)	十層内1式	P-73	
20-24	B	VY-146 VX-147	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	外面凹・内面直し	十層内1式		
20-25	B	VW-134 VX-134 VY-135	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	直状口縁, 内外面直し	十層内1式		
20-26	B	VY-138	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	内外面直し	十層内1式		
20-27	B	VY-138	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇部平直し, 内外面直し	十層内1式		横位成状物付着
20-28	B	VY-138	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇部平直行・内外面直し	十層内1式		横位成状物付着
20-29	B	VY-148	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	1線凹陥	縄文中期末葉～後期前葉		
20-30	B	VW-145	Ⅱa層	深鉢形	胴部	1線横・斜行凹	縄文中期末葉～後期前葉		横位成状物付着
40-1	B	VS-142	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線(扇形状文, 横位沈線), 1先端	縄文後期前葉～後葉?		
40-2	B	中央部	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	扇形, 横位沈線, 1線凹陥	十層内V群併行		
40-3	B	Ⅱc VS-151	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚, 口唇部外縁, 内外面直し	縄文後期後葉	P-26	
40-4	B	VP-138	Ⅱa層	深鉢形	口縁部～胴部	口唇部肥厚, 口唇部外縁, 1線凹陥	縄文後期後葉		横位成状物付着
40-5	B	VP-138	Ⅱa層	深鉢形	口縁部	口唇部肥厚, 口唇部外縁, 内外面直し	縄文後期後葉		横位成状物付着
40-6	B	VW-145	Ⅱa層	深鉢形	胴部	外面工具凹(条痕)	縄文後期後葉		横位成状物付着、 粗砂粒混入
40-7	B	VW-141	Ⅱ層	深鉢形	底部	底部上行直状	縄文後期後葉		
40-8	B	VU-149	Ⅰ層	深鉢形	胴部	沈線(三角文), 0段多条(1段)横凹陥	大湖式		横位成状物付着 2020-0201(併)年代測定 0000A(2)-05)
40-9	B	VE-149	Ⅰ層	深鉢形	胴部	沈線(三角文), 1線凹陥	大湖式		
40-10	B	VE-149	Ⅰ層	深鉢形	胴部	沈線(平直状文, 横位沈線), 1線凹陥	大湖式		横位成状物付着
40-11	B	VF-137 VF-138	黒褐色 黒色土	深鉢形	胴部	断面無文, 横位沈線, 1線凹陥	縄文晩期		
40-12	B	VE-149	Ⅰ層	深鉢形	胴部	断面無文, 1線凹陥	縄文晩期		横位成状物付着
40-13	B	VW-134 VX-134 VY-135	Ⅱ層	皿形	胴部	横位沈線, 1線凹陥	縄文晩期		
40-14	B	Ⅱc VS-149	Ⅱ層	皿形	胴部	断面無文, 斜行・横凹陥	縄文晩期	P-9	
40-15	B	VT-145	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	縦・斜位条痕	縄文晩期		
40-16	B	VC-149	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	縦・斜位条痕	縄文晩期		横位成状物付着
40-17	B	Ⅱc VS-148 VT-148	Ⅱ層	深鉢形	胴部	縦位条痕	縄文晩期	P-3, 30	横位成状物付着
40-18	B	VU-149	Ⅰ層	深鉢形	口縁部～胴部	0段多条(1段)横・斜凹陥	縄文晩期前葉		縁部・10・20と同く、 横位成状物付着

調査番号	調査区	出土位置	出土層位	器種	部位	文様等の属性	時期	取上番号	備考
40-19	B	南側	I層	深鉢形	口縁部～底部	口唇部平直?、6段多葉(口)模刻彫、底部高台状	縄文後期前葉		図40-18と同、 器高21.1cm、口径 23.4cm、底径7.8cm、 煤状灰化物付着、290 ±20y/4P(年代測定 0003A(2)-94)
40-20	B	VE-149	I層	深鉢形	胴部	6段多葉(口)模刻彫	縄文後期前葉		図40-18と同、 煤状灰化物付着
40-21	B	Ⅱ-1 V3-151	IV層	深鉢形	口縁部	6段多葉(口)模刻彫	縄文後期	P-26	煤状灰化物付着
47-1	Ⅱ西	SI-01	漆面	深鉢形	口縁部～胴部	1段模刻彫	縄文中期後葉	P-2	煤状灰化物付着
47-2	Ⅱ西	SI-01P113	摩土	深鉢形	胴部	沈線(弧状文)、斜模刻彫	複様式	P-1	煤状灰化物付着
48-1	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	胴部～底部	1段模刻彫、胴部下段階状底	円筒上層4式		内面漆状物質付着、 器高(5.1cm)、底径5.0cm
48-2	Ⅱ西	SI-02	埋設	深鉢形	胴部～底部	斜模刻彫	円筒上層式		器高(6.6cm)、底径7.2cm
48-3	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	胴部	隆帯貼付、上縁圧入凹	円筒上層6式		
48-4	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	口縁部	隆帯貼付、斜模刻彫	円筒上層6式		
48-5	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	胴部	隆帯、斜模刻彫	円筒上層4式		
48-6	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	口縁部	口縁部肥厚、沈線文、横走沈線	複様式		
48-7	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	口縁部～胴部	口縁部直上状、沈線(凹字状懸垂文)、斜模刻彫	曇花文		煤状灰化物付着
48-8	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	口縁部	沈線(凹字状懸垂文)、斜模刻彫	曇花文		
48-9	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	胴部	沈線(懸垂文)、斜模刻彫	曇花文		煤状灰化物付着
48-10	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	胴部～底部	斜模刻彫	曇花文		図48-11と同、 器高(12.0cm)、底径8.2cm
48-11	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	胴部	沈線(懸垂文)、斜模刻彫	曇花文		図48-10と同
48-12	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	口縁部～胴部	口縁部無文、沈線(方形区画)、1段沈線	大木10式併行		
49-1	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	口縁部～胴部	斜模刻彫	縄文中期後葉		煤状灰化物付着
49-2	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	胴部	斜模刻彫	縄文中期後葉		
49-3	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	胴部～底部	斜模刻彫、底部現代痕(1?調整)	縄文中期後葉		器高(8.7cm)、底径7.8cm
49-4	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	口縁部	波状口縁、口縁部直上状、模刻沈線	十層内1式		
49-5	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	口縁部	波状口縁、口縁部直上状、口唇平直、模刻沈線	十層内1式		
49-6	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	胴部	沈線(円形文・三角形文)	十層内1式		
49-7	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	胴部	沈線(棒形文)	十層内1式		
49-8	Ⅱ西	SI-02	摩土	山形	胴部	隆帯貼付	縄文後期前葉		
49-9	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	口縁部	口縁部直上状、口縁部無文、模刻沈線、1段模刻彫	縄文後期前葉		
49-10	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	口縁部	内外面直上	縄文後期前葉		
49-11	Ⅱ西	SI-02	摩土	深鉢形	胴部	網目状懸垂文(単軸筋条体第2部?)	十層内1式		
50-1	Ⅱ西	SI-03	摩土	深鉢形	胴部	沈線(凹字状懸垂文)、刺突、斜模刻彫	曇花文		
50-2	Ⅱ西	SI-03	摩土	深鉢形	胴部	1段・1模刻彫、内面直上型直上	縄文後期?		
50-3	Ⅱ西	SI-03	摩土	深鉢形	口縁部	口唇部平直?、6段多葉(口)模刻彫	縄文後期前葉?		煤状灰化物付着
51-1	Ⅱ西	SA-05	摩土	深鉢形	胴部	沈線(懸垂文)、斜模刻彫	曇花文		
51-2	Ⅱ西	SA-05	摩土	深鉢形	胴部	斜模刻彫	縄文中期後葉		
51-3	Ⅱ西	SA-05	摩土	深鉢形	口縁部	内外面直上	縄文後期前葉		図51-4と同
51-4	Ⅱ西	SA-05	摩土	深鉢形	胴部	口縁部無文、模刻沈線、1段模刻彫	縄文後期前葉		図51-3と同
51-5	Ⅱ西	SA-11	摩土	深鉢形	胴部	沈線(凹字状懸垂文)、斜模刻彫	曇花文		図51-6と同、 煤状灰化物付着
51-6	Ⅱ西	SA-11	摩土	深鉢形	胴部	沈線(懸垂文)、斜模刻彫	曇花文		図51-6と同、 煤状灰化物付着
52-1 52-2	Ⅱ西	I号埋設	敷層	深鉢形	口縁部～胴部	口縁部4単位長軸変長(内面直上)、ボタシ付貼付、隆帯(筒状文)、底支第1種(側・1段)模刻彫	円筒上層4式		同一胴体、煤状灰化物付着、 器高(15.8cm)、口径17.4cm
54-1	Ⅱ西	IVQ-106	—	深鉢形	口縁部	横位隆帯、1段模刻彫	円筒上層4式		
54-2	Ⅱ西	IVQ-106	—	深鉢形	胴部	横位隆帯、1段模刻彫	円筒上層4式		
54-3	Ⅱ西	IVU-103	Ⅱa層	深鉢形	口縁部～胴部	口縁部直上状、沈線(凹字状懸垂文)、刺突、斜模刻彫	曇花文		
54-4	Ⅱ西	IVX-104	Ⅱa層	深鉢形	口縁部	沈線(凹字状懸垂文)、斜模刻彫	曇花文		煤状灰化物付着
54-5	Ⅱ西	IVX-104	Ⅱa層	深鉢形	口縁部	沈線(凹字状懸垂文)、斜模刻彫	曇花文		煤状灰化物付着
54-6	Ⅱ西	IVY-104	Ⅱa層	深鉢形	口縁部	沈線(凹字状懸垂文)、斜模刻彫	曇花文		煤状灰化物付着
54-7	Ⅱ西	IVX-104	Ⅱa層	深鉢形	胴部	沈線(懸垂文)、斜模刻彫	曇花文		煤状灰化物付着、 器高(19.7cm)
54-8	Ⅱ西	IVS-107	—	深鉢形	胴部	沈線(懸垂文)、斜模刻彫	曇花文		煤状灰化物付着
54-9	Ⅱ西	IVU-103	Ⅱa層	深鉢形	胴部	沈線(凹字状懸垂文)、斜模刻彫	曇花文		
54-10	Ⅱ西	IVU-103	—	深鉢形	胴部	沈線(懸垂文)、斜模刻彫	曇花文		
54-11	Ⅱ西	ⅡK1W104	摩土	深鉢形	胴部	沈線(凹字状懸垂文)、連続刺突文(胴部文様付区画)、1段模刻彫	曇花文		煤状灰化物付着
54-12	Ⅱ西	IVU-103	—	深鉢形	胴部	沈線(凹字状懸垂文)、斜模刻彫	曇花文		煤状灰化物付着
54-13	Ⅱ西	IVY-103	Ⅱa層	深鉢形	胴部	沈線(波状文)、1段模刻彫	大木10式併行		煤状灰化物付着
54-14	Ⅱ西	ⅡK1W104	摩土	深鉢形	口縁部～胴部	口唇部平直?、沈線(波状文、舌状文)、1段沈線	十層内1式		煤状灰化物付着、 器高(11.9cm)、口径22.2cm

国産番号	調査区	出土位置	出土層位	器種	部位	文様等の属性	時期	取上番号	備考
54-15	B西	Ⅱ(Ⅱ)B4	Ⅱ上	深鉢形	口縁部	3条単位沈線(弧状文),1R充填,外周下単位13°	十層内1式		
54-16	B西	ⅡV-104	Ⅱa層	深鉢形	口縁部	横位沈線	十層内1式		
54-17	B西	ⅡV-103	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇部平坦化°,口唇部直上状,口縁部無文,横位沈線,1R縦回転	十層内1式		
54-18	B西	ⅡV-103	Ⅱa層	深鉢形	口縁部	内外面3°+1°	十層内1式		横位弧化物付着
54-19	B西	ⅡV-103	Ⅱa層	盆形	胴部	横位沈線,内外面3°	十層内1式		
54-20	B西	ⅡV-103	Ⅱ層	深鉢形	胴部~底部	縦横回転,底部網代痕(1°調整)	縄文中期末葉~後期初葉		底径7.0cm
54-21	B西	ⅡV-103	Ⅱa層	深鉢形	口縁部	縦横回転	縄文後期初葉		横位弧化物付着
54-22	B西	ⅡV-103	Ⅱa層	深鉢形	底部	底部に1条の横位沈線,上1段状	縄文後期末葉		底径7.1cm
54-23	B西	ⅡV-107	—	台付鉢	胴部	横位沈線,1R斜回転	縄文後期末葉		
57-1	C東	58-05	Ⅱ上	深鉢形	胴部	1R横回転	縄文中期後葉		
58-1	C東	ⅡV-97	Ⅱ層下	深鉢形	胴部	沈線(弧状文,方形区画文),1R横回転	最花式?		横位弧化物付着
58-2	C東	ⅡV-92	Ⅱ層	深鉢形	口縁部~胴部	弧状口縁,円形刺突,沈線(弧字状刺突文),1R横回転	最花式		
58-3	C東	ⅡV-96	Ⅱ層下	深鉢形	口縁部	沈線(刺突文,横位沈線),1R横回転	最花式		
58-4	C東	ⅡV-92	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	刺突,沈線(弧字状刺突文),1R横・斜回転	最花式		
58-5	C東	ⅡV-97	Ⅱ層下	深鉢形	口縁部~胴部	沈線(弧字状刺突文),1R横回転	最花式		図58-6-7と同一
58-6	C東	ⅡV-97	Ⅱ層下	深鉢形	口縁部	沈線(弧字状刺突文),1R横回転	最花式		図58-5-7と同一
58-7	C東	ⅡV-97	Ⅱ層下	深鉢形	胴部~底部	縦横回転,底部網代痕(1°調整)	最花式		図58-6と同一,器高(13.9cm),底径9.0cm
58-8	C東	ⅡV-92	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線(弧字状刺突文),1R横・斜回転	最花式		
58-9	C東	ⅡV-92	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線(刺突文),1R横・斜回転	最花式		
58-10	C東	ⅡV-96	Ⅱ層下	深鉢形	胴部	沈線(刺突文),1R斜回転	最花式		
58-11	C東	ⅡV-88	Ⅱa層	深鉢形	胴部	沈線,1R横回転,磨消	大木10式併行		
58-12	C東	ⅡV-88	Ⅱa層	深鉢形	胴部	沈線(方形区画文),1R充填	大木10式併行		
58-13	C東	ⅡV-96	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	縦横回転	縄文中期後葉		
58-14	C東	ⅡV-89	Ⅱa層	深鉢形	口縁部	縦横回転	縄文中期後葉		
58-15	C東	ⅡV-92	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	縦横回転	縄文中期後葉		横位弧化物付着
58-16	C東	ⅡV-96	—	深鉢形	胴部	縦横回転	縄文中期後葉		
58-17	C東	ⅡV-96	Ⅱ層下	深鉢形	胴部	縦横・斜回転	縄文中期後葉		
58-18	C東	ⅡV-89	—	深鉢形	胴部	1R横回転	縄文中期後葉		
58-19	C東	ⅡV-89	—	深鉢形	胴部	1R斜回転	縄文中期後葉		
58-20	C東	ⅡV-96	—	深鉢形	胴部	縦横回転	縄文中期後葉		
58-21	C東	ⅡV-94	Ⅱa層	深鉢形	胴部	縦横回転	縄文中期後葉~中期末葉		
59-1	C東	ⅡV-97	Ⅱ層下	深鉢形	口縁部	横位沈線,1R横回転	馬立式		
59-2	C東	ⅡA-99	Ⅱ層下	深鉢形	胴部	沈線(弧状・横位沈線),1R縦回転	馬立式		
59-3	C東	ⅡA-98	Ⅱ層下	深鉢形	胴部	沈線(三角形文),1R縦回転,磨消	馬立式		
59-4	C東	ⅡA-99	Ⅱ層下	深鉢形	胴部	沈線(鳥雲文),1R横回転	馬立式		
59-5	C東	ⅡV-98	Ⅱ層下	深鉢形	口縁部	弧状口縁,口唇部平坦化に円形刺突文,沈線文	十層内1式		
59-6	C東	ⅡV-98	Ⅱ層下	深鉢形	口縁部	3条単位横位沈線,1R充填	十層内1式		図59-7と同一
59-7	C東	ⅡV-98	Ⅱ層下	盆形	胴部	3条単位沈線,1R充填	十層内1式		図59-6と同一
59-8	C東	ⅡV-96	Ⅱ層下	深鉢形	胴部	横位沈線,1R充填	十層内1式		
59-9	C東	ⅡV-95	Ⅱ層上	深鉢形	胴部	横位沈線	十層内1式		
59-10	C東	ⅡV-94	Ⅱ層下	深鉢形	胴部	横位沈線	十層内1式		
59-11	C東	ⅡV-96	Ⅱ層下	深鉢形	口縁部	口唇部直上状,口唇部平坦化°,1R横回転	縄文後期初葉~後期初葉		
59-12	C東	ⅡV-94	Ⅱ層下	盆形	口縁部	口唇部平坦化°,内外面3°	縄文後期初葉		図59-13と同一
59-13	C東	ⅡV-94	Ⅱ層下	盆形	胴部	横位把手,内外面3°	縄文後期初葉~後期初葉		図59-12と同一
59-14	C東	ⅡA-98	Ⅱ層下	深鉢形	胴部~底部	縦横回転,底部網代痕	縄文中期後葉~後期初葉		底径(8.0cm)
59-15	C東	ⅡV-96 ⅡV-98	Ⅱ層下	深鉢形	胴部~底部	1R横回転,底部網代痕	縄文中期後葉		底径(8.4cm)
59-16	C東	ⅡV-96	Ⅱ層下	深鉢形	胴部~底部	縦横回転	縄文中期後葉		底径(8.8cm)
59-17	C東	ⅡV-98	Ⅱ層下	深鉢形	胴部~底部	内外面3°	縄文後期初葉		底径(5.2cm)
59-18	C東	ⅡA-97	Ⅱ層下	深鉢形	胴部~底部	縦横回転,底部網代痕(1°調整)	縄文中期末葉~後期初葉		底径(7.0cm)
59-19	C東	ⅡV-89	Ⅱ層下	深鉢形	胴部	縦横回転	縄文後期初葉		
59-20	C東	ⅡV-97	Ⅱ層下	深鉢形	底部	底部上1段状	縄文後期後葉		底径(5.7cm)

石器観察表
 剥片石器類

図版番号	区	出土地点	層位	種別	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
13-1	A	呉-02	礫土	石鏟	片貫頁岩	4.5	1.7	0.9	5.0	無漆
13-2	A	呉-01	5層	石鏟	片貫頁岩	96.29	3.2	5.0	15.4	縦形
13-3	A	呉-01	6層	石鏟	片貫頁岩	15.0	5.9	2.2	19.1	S-26
13-3	B	SI-01	礫土	石鏟	片貫頁岩	5.3	5.2	0.7	18.0	横形
13-4	B	SI-01	礫土	微小剥離痕のある剥片	片貫頁岩	3.9	2.2	1.0	5.0	左面に微小剥離痕
13-7	B	SI-02b	礫土	石鏟	片貫頁岩	5.9	2.5	1.1	14.8	
13-8	B	SI-02b	礫土	石鏟	片貫頁岩	4.5	2.1	0.9	9.3	小形
13-9	B	SI-02b	礫土上層	石鏟	片貫頁岩	7.9	3.8	1.1	22.2	縦形
13-10	B	SI-02b	礫土下層	石鏟	片貫頁岩	5.6	3.7	0.9	16.2	S-23 一側縁に微小剥離痕
13-11	B	SI-02b	礫土下層	削器	片貫頁岩	7.4	6.4	1.9	76.8	S-9 一側縁・末端に刃部
13-12	B	SI-02b	礫土上層	微小剥離痕のある剥片	片貫頁岩	6.1	4.5	1.3	21.6	一側縁に刃部
19-1	R	SI-04	礫土	石鏟	片貫頁岩	4.5	6.0	0.7	11.1	S-4 横形
19-2	B	SI-04	礫土	石鏟	片貫頁岩	3.6	1.5	0.7	2.8	
19-3	B	SI-04	礫土下層	石鏟	片貫頁岩	4.1	3.4	0.9	8.0	断面両面加工
19-4	B	SI-04	礫土上層	削器	片貫頁岩	7.8	4.3	1.8	48.6	S-2 断面加工、一側縁に刃部
21-6	B	SI-07	2層	石鏟	片貫頁岩	6.8	3.4	1.3	23.7	両面に刃2ヶ付
21-7	B	SI-07	2層	石鏟	片貫頁岩	5.4	2.8	1.4	18.3	
21-8	B	SI-07	2層	石鏟	片貫頁岩	9.0	2.5	1.6	28.9	
21-9	B	SI-07	2層	削器	片貫頁岩	9.4	3.0	1.0	25.7	両側縁部に刃部
21-5	B	SI-01	礫土	石鏟	片貫頁岩	2.5	1.3	0.4	0.7	無漆
21-9	B	SI-02	礫土	削器	片貫頁岩	6.0	2.4	0.7	5.5	断面加工、一側縁に刃部
21-15	B	SI-03	礫土	石鏟	片貫頁岩	2.7	1.2	0.4	0.8	有漆
21-16	B	SI-03	礫土	鏟	片貫頁岩	5.8	4.0	1.4	26.8	末端加工
21-24	B	SI-04	礫土	微小剥離痕のある剥片	片貫頁岩	3.9	3.5	1.4	13.8	両側縁部に刃部
21-27	B	SI-06	礫土	石鏟	片貫頁岩	3.9	2.5	0.9	5.6	
21-28	B	SI-06	礫土	石鏟	片貫頁岩	6.2	2.7	1.4	22.8	磨削、刃付
21-29	B	SI-06	礫土	鏟	片貫頁岩	3.8	3.9	1.0	10.0	末端加工
28-4	B	SI-18	礫土	石鏟	片貫頁岩	5.1	3.9	1.7	27.7	
28-10	B	SI-23	礫土	微小剥離痕のある剥片	片貫頁岩	6.5	5.7	1.7	49.7	一側縁に刃部
28-23	B	SI-26	礫土	石鏟	片貫頁岩	5.7	3.0	1.1	12.1	一側縁に微小剥離痕
28-24	B	SI-26	礫土	削器	片貫頁岩	6.7	4.0	1.4	30.4	断面加工、一側縁に刃部
29-5	B	SI-35	礫土	石鏟	片貫頁岩	6.2	2.5	1.1	17.2	
29-6	B	SI-35	礫土	削器	片貫頁岩	4.7	2.2	1.0	6.0	一側縁に刃部
30-3	B	SI-01	1層	削器	片貫頁岩	6.7	6.3	2.0	74.4	断面加工、一側縁に刃部
32-1	B	PI101	礫土	石鏟	片貫頁岩	5.0	5.2	12.5	19.9	一側縁に微小剥離痕
33-11	B	PI134	礫土	二次加工剥片	片貫頁岩	10.0	4.3	2.4	10.2	
41-1	B	呉-02	礫土	石鏟	片貫頁岩	2.7	1.6	0.3	0.8	無漆
41-2	B	呉-01	4層	石鏟	片貫頁岩	3.5	1.7	0.9	5.1	S-10 無漆
41-3	B	YIB-144	目層	石鏟	片貫頁岩	6.5	2.6	1.1	15.5	S-10 小形
41-4	B	YIA-137	目層	石鏟	片貫頁岩	7.6	2.4	1.8	30.8	
41-5	B	VV-150	1層	石鏟	片貫頁岩	4.5	2.5	1.2	12.0	小型磨形
41-6	B	YIB-144	目層	石鏟	片貫頁岩	4.7	2.0	1.2	11.8	S-14 小形
41-7	B	YIJ-142	目層	石鏟	片貫頁岩	7.1	3.2	1.4	20.7	縁部の可能性
41-8	B	VV-144	目層	石鏟	片貫頁岩	6.7	3.6	1.7	22.3	
41-9	B	呉-02	礫土	石鏟	片貫頁岩	9.5	4.6	2.6	54.0	縦形末製品
41-10	B	呉-02	礫土	石鏟	片貫頁岩	4.3	2.2	0.8	5.4	断面両面加工
41-11	B	VV-148	礫土	石鏟	片貫頁岩	4.8	3.2	0.8	7.0	S-55
41-12	B	呉-01	2層	石鏟	片貫頁岩	3.7	1.8	1.4	6.7	S-5 断面両面加工
41-13	B	呉-01	礫土上層	石鏟	片貫頁岩	3.9	4.0	1.0	7.4	
41-14	B	VV-138	目層	磨形石器	片貫頁岩	2.0	3.1	0.8	6.0	
41-15	B	VV-138	目層	鏟	片貫頁岩	4.8	3.0	0.7	9.2	一側縁に微小剥離痕
41-16	B	YIA-144	目層	削器	片貫頁岩	8.9	4.0	2.1	38.5	S-6 両側縁に刃部作出
41-17	B	呉-02	礫土	削器	片貫頁岩	7.2	4.3	1.5	30.4	一側縁に刃部作出
42-1	B	VW-151	不明	削器	片貫頁岩	6.9	4.8	1.2	32.3	一側縁に刃部作出
42-2	B	VV-137	目層	削器	方解石	7.2	6.3	2.6	113.6	一側縁に刃部作出
42-3	B	VW-151	不明	削器	片貫頁岩	7.3	6.3	1.4	43.7	両縁加工、一側縁に挿入
42-4	B	VW-151	不明	鏟	片貫頁岩	14.5	4.1	1.3	26.8	末端加工
42-5	B	VX-142	目層	削器	片貫頁岩	8.3	4.1	1.3	37.0	一側縁に刃部作出
42-6	B	VX-134	目層	削器	カクセドニ	6.5	3.6	1.0	16.8	一側縁に刃部作出
42-7	B	VW-151	不明	石鏟	片貫頁岩	5.6	3.9	3.3	74.7	両面に転用
42-8	B	VV-149	1層	二次加工剥片	磨礫石	3.3	2.2	1.8	10.4	断面、一側縁加工
42-9	B	YIA-143	目層	二層石器	片貫頁岩	12.0	7.4	3.2	292.9	
42-3	B高	SI-01	床面	二次加工剥片	片貫頁岩	6.1	4.2	1.8	15.3	S-1、一側縁に微小剥離痕
49-12	B高	SI-02	礫土	削器	片貫頁岩	9.6	6.2	2.0	82.3	一側縁に刃部
49-13	B高	SI-02	礫土	削器	片貫頁岩	4.2	5.7	1.7	30.6	一側縁に刃部
49-14	B高	SI-02	礫土	削器	片貫頁岩	4.3	3.2	1.2	11.1	
50-4	B高	SI-03P11	礫土	二次加工剥片	片貫頁岩	6.2	4.0	1.4	23.7	
50-1	B高	IVU-103	目層	石鏟	片貫頁岩	11.1	4.3	2.8	130.7	
50-2	B高	IVR-103	礫土	石鏟	片貫頁岩	5.0	6.7	1.4	35.9	横形末製品
50-3	B高	IVV-104	目層	石鏟	片貫頁岩	8.8	5.3	12.5	50.7	断面両面加工
50-4	B高	IVR-04	礫土	石鏟	片貫頁岩	8.8	6.2	3.1	127.4	断面両面のみ加工
50-5	B高	IVR-103	礫土	削器	片貫頁岩	10.0	6.4	1.8	70.0	両縁4カ所に刃部

調査番号	区	出土地点	層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
50-6	B西	IVJ-103	II a層	削器	花崗頁岩	5.9	3.8	1.5	26.3	一側縁に刃部作出
50-21	C東	IVX-95	III層	石鏝	那羅石	3.5	1.5	0.4	1.9	無葉
50-22	C東	VIA-137	III層	石鏝	花崗頁岩	5.6	3.5	1.9	14.5	磨凸加工
50-23	C東	IVX-96	II層下	石鏝	花崗頁岩	15.0	8.1	2.1	84.6	磨凸加工、一側縁に微小の削痕
60-1	C東	IVY-92	II層下	石鏝	花崗頁岩	6.4	4.1	1.4	25.7	磨凸、无葉
60-2	C東	VA-99	II層下	削器	花崗頁岩	7.2	4.9	2.1	50.8	一側縁に刃部作出
60-3	C東	IVY-96	II層下	削器	花崗頁岩	8.2	4.0	1.5	33.7	一側縁、刃端に刃部作出

石斧類

調査番号	区	出土地点	層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
43-1	B	VIJ-142	II a層	磨製石斧	凝灰岩	11.1	2.4	2.4	161.8	完形、定角式
43-2	B	VF-151	表土	磨製石斧	細粒凝灰岩	(7.6)	4.1	1.9	101.0	基部端打痕(再調整?)
43-3	B	VT-150	III層	磨製石斧	凝灰岩	(6.7)	4.0	1.4	75.7	基部破損
40-15	B西	SI-02	埋土	磨製石斧	片岩	(8.0)	5.0	1.7	135.3	基部・刃部一部破損

礎石器類

調査番号	区	出土地点	層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
13-4	A	VII-132	III a層	磨り石	凝灰岩	5.0	3.0	3.5	63.0	小形磨製石
13-5	A	IX-01	III層	石鏝	凝灰岩	5.2	5.7	1.5	35.5	S-14、両側縁片面調整の跡
13-6	A	VII-132	一括	磨き石	凝灰岩	12.4	3.9	4.2	229.9	棒状端・端部使用
13-7	A	IX-01	III層	磨き石	凝灰岩	11.7	4.9	3.7	199.3	S-8、棒状端・端部使用
13-8	A	IX-01	5層	磨き石	凝灰岩	12.7	11.9	3.1	702.9	扁平片状、両端使用
13-9	A	IX-01	III層	磨き石	凝灰岩	13.5	7.3	5.0	61.6	S-9、両端部、器面端打込み
13-10	A	IX-01	III層	磨き石	凝灰岩	16.3	4.5	4.3	353.2	S-12、棒状端・端部使用
13-11	A	VIII-131	III層	磨り石	砂質凝灰岩	(16.6)	17.9	5.5	1674.7	破損?使用痕跡あり
15-5	B	SI-01	埋土	磨り石・磨き石	凝灰岩	23.5	7.5	4.8	1272.0	一側縁端部使用、片面に強い端打込みと強い磨り
17-13	B	SI-02a	埋土層	磨き石	片岩	6.5	8.4	2.7	211.6	扁平端、一側縁端打痕あり
17-14	B	SI-02b	埋土層	磨き石・磨り石	安山岩	12.5	6.7	4.3	480.8	S-19、両端・側縁磨き、器面に磨り
19-3	B	SI-04	埋土層	石鏝	凝灰岩	27.2	20.8	8.4	11550.0	S-1、無加工、器面中央部磨り痕跡
43-4	B	VI-143	III層	磨り石	凝灰岩	11.1	8.3	1.7	145.3	板状端、両側縁端、半円状磨り打痕石磨り
43-5	B	VY-143	III a層	加工端	凝灰岩	18.0	8.2	1.8	157.2	扁平片状、一方側に片面から刺痕
43-6	B	VII-144	II a層	加工端	凝灰岩	10.9	8.4	3.8	320.4	扁平片状、一方側に片面から刺痕
43-7	B	VIX-143	III a層	磨き石	凝灰岩	12.9	6.1	5.9	370.9	棒状端・端部使用
43-8	B	VY-143	III層	磨き石	凝灰岩	12.2	5.1	5.5	420.6	棒状端・端部使用
43-9	B	VF-151	表土	磨き石	凝灰岩	17.3	5.1	4.8	511.2	棒状端両端部使用
43-10	B	VIII-144	II a層	磨き石	凝灰岩	18.3	6.6	4.4	729.6	棒状端、両端部一側縁使用
43-11	B	VX-145	III a層	磨き石	凝灰岩	14.9	5.4	3.0	287.6	棒状端・端部使用
43-12	B	VII-137	III層	磨き石	安山岩	8.8	8.5	2.7	700.7	棒状端、一部使用
43-13	B	VF-151	不明	磨き石	凝灰岩	7.6	6.7	5.3	273.9	棒状端、全面使用(使用痕跡あり)
43-14	B	VF-151	不明	磨き石	凝灰岩	6.8	7.6	5.5	339.1	棒状端、両端部使用
44-1	B	VII-137	III層	磨き石・磨り石	凝灰岩	20.5	7.5	5.8	1140.2	一側縁磨りの痕に端打、器面に強い磨り、両側縁部
44-2	B	IX-01	I層	磨き石・磨り石	凝灰岩	17.0	8.2	5.5	963.0	一側縁部打痕、両器面に磨り打痕(部み)、両側縁部
44-3	B	VII-137	不明	磨き石・磨り石	凝灰岩	15.2	8.8	2.8	413.6	扁平片状端、弱い磨りと磨き
44-4	B	VIX-134	III層	磨き石・磨り石	凝灰岩	18.1	7.4	4.5	818.2	小形磨製石鏝、一面強い磨き、一面弱い磨り
44-5	B	VIX-141	III a層	磨り石・磨き石	片岩	4.1	3.8	3.8	75.9	小形磨製、弱い磨り
44-6	B	VT-142	III層	磨き石・磨り石	凝灰岩	12.3	11.5	3.1	72.0	小形磨製石、片状使用
44-7	B	VF-151	不明	研み石	凝灰質砂岩	10.9	7.6	6.1	776.0	両面使用
44-8	B	VII-144	II層	研み石	凝灰岩	11.7	10.2	5.3	799.0	両面使用、端部一側縁に端打
45-1	B	VIX-134	III層	研み石	凝灰岩	10.1	5.3	3.9	352.6	棒状端、一面使用
45-2	B	VF-147	I層	研み石・磨り石	凝灰岩	9.4	8.5	4.7	535.4	円錐、両面使用、弱い磨り
45-3	B	VIX-134	III層	磨き石	凝灰岩	6.6	12.6	1.6	92.2	板状端、使用痕跡磨き
45-4	B	VT-143	不明	片石	砂質凝灰岩	13.8	21.1	4.9	2065.9	一面に端打と磨り
45-5	B	VY-143	III層	石鏝	凝灰岩	18.7	22.5	6.4	4230.5	使用痕跡あり
47-4	B西	SI-01	埋土	片石	凝灰岩	(20.5)	26.7	7.7	7111.3	砂質磨製、使用痕跡あり
50-7	B西	IVJ-103	II a層	磨り石	凝灰岩	11.5	7.7	4.2	518.3	両器面に磨き(磨り)
50-8	B西	VIA-144	I層	磨き石	凝灰岩	8.2	8.0	7.0	528.0	円錐、一側部(側縁)使用
50-9	B西	VIII-04	埋土	磨き石	凝灰岩	9.3	6.5	6.2	364.5	棒状端、一側部使用
60-4	C	IVS-88	III層	磨き石	凝灰岩	6.6	4.6	3.6	115.8	棒状端、両側縁使用
60-5	C	IVS-88	不明	磨き石・磨り石	凝灰岩	7.4	7.7	5.6	323.4	円錐、全面強い磨きと磨り
60-6	C	IVS-88	III層	研み石	凝灰岩	17.9	27.9	7.5	3603.5	無加工、使用痕跡あり
60-7	C	IVS-90	I層	片石	凝灰岩	17.2	27.5	5.8	3504.6	S-1、無加工、使用痕跡あり

石製品

調査番号	区	出土地点	層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
17-15	B	SI-02a	埋土	円盤状石製品	凝灰岩	5.3	5.1	1.4	51.8	片面端部及び片面に打痕
45-6	B	VX-135	III層	磨製石製品	凝灰岩	(5.0)	3.2	0.8	14.5	中央より端部部に穿孔
45-7	B	IX-01	4層	円盤状石製品	凝灰岩	5.0	4.8	1.3	29.0	両面及び片面に打痕



遺跡全景（南から）



B区調査区全景（北西から）

写真1 遺跡全景・B区調査区全景

A区



調査区全景 (南から)



基本層序 (南から)



沢2土層断面 (北西から)



第5号土坑土層断面 (南東から) AⅡ類



第17号土坑完掘 (北西から)



BⅡ類

第17号土坑土層断面 (北西から)



第3号土坑完掘 (南から)



BⅢ類

第3号土坑土層断面 (南から)

写真2 A区調査区全景・基本層序・土坑 (AⅡ・BⅢ類)

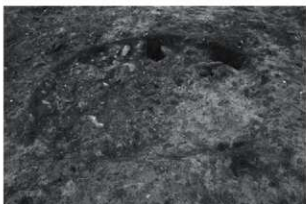
A区



第6号土坑完掘（南西から）



第6号土坑土層断面（南西から）



第7号土坑完掘（南東から）



第7号土坑土層断面（南東から）



第8号土坑完掘（南から）



第8号土坑土層断面（南から）



第14号土坑完掘（南西から）



第14号土坑土層断面（南西から）

写真3 A区土坑（BⅢ類）

B区



第1号竪穴住居跡完掘（南西から）



第1号竪穴住居跡土層断面（南東から）



第1号竪穴住居跡炉突出状況（南東から）



第1号竪穴住居跡炉土層断面（南東から）

写真4 B区第1号竪穴住居跡

B区



第2号竪穴住居跡完掘（南東から）



第2号竪穴住居跡土層断面（南東から）



第2a号竪穴住居跡硬化面検出状況（北西から）



第2号竪穴住居跡土検出状況（南東から）

写真5 B区第2号竪穴住居跡

B区



第4号壑穴住居跡完圖（東から）



第4号壑穴住居跡土器埋設炉検出状況（西から）



第4号壑穴住居跡土器埋設炉土層断面（東から）



第4号壑穴住居跡土器埋設炉焼土検出状況（東から）



第4号壑穴住居跡覆土層遺物出土状況（西から）

写真6 B区第4号壑穴住居跡

B区



第5号竖穴住居跡完掘（西から）



第7号竖穴住居跡土層断面（東から）

写真7 B区第5号・第7号竖穴住居跡

B区



第15号土坑完掘(北から)



AⅠ類

第15号土坑土層断面(南から)



第39号土坑完掘(南から)

AⅡ類



第39号土坑土層断面(南から)



第1号土坑完掘(南から)

AⅢ類



第1号土坑土層断面(南から)



第6号土坑完掘(南から)

AⅢ類



第6号土坑土層断面(南から)

写真8 B区土坑(AⅠ・AⅡ・AⅢ類)

B区



第20・22号土坑完掘(南から)



第20・22号土坑土層断面(南から)

AⅢ・CⅢ類



第36号土坑遺物出土状況(西から)

AⅢ類



第45号土坑完掘(北西から)

AⅣ類



第37a・37b号土坑完掘(西から)

BⅡ・CⅢ類



第37a・37b号土坑土層断面(西から)

写真9 B区土坑(AⅢ・AⅣ・BⅡ・CⅢ類)

B区



第49号土坑完掘 (南から)



BⅢ類

第49号土坑土層断面 (南から)



第28号土坑完掘 (南から)



CⅡ類

第28号土坑土層断面 (南から)



第47号土坑完掘 (南から)



CⅡ類

第47号土坑土層断面 (南から)



第4号土坑完掘 (南から)



CⅣ類

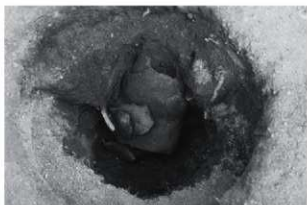
第4号土坑土層断面 (南から)

写真10 B区土坑 (BⅢ・C類)

B区



第1号土器埋設遺構土層断面（西から）



第1号土器埋設遺構遺物出土状況（西から）



第1号硬化面検出状況（南から）



第1号硬化面土層断面（南西から）



第2号硬化面検出状況（南東から）



第2号硬化面土層断面（南西から）



第1号焼土跡検出状況（南から）



第3号焼土跡土層断面（西から）

写真11 B区土器埋設遺構・硬化面・焼土跡

B区西



第1号竪穴住居跡完掘（南から）



第1号竪穴住居跡土層断面（南から）



第1号竪穴住居跡石囲炉土層断面（西から）



第1号竪穴住居跡石囲炉掘り方（南から）

写真12 B区西第1号竪穴住居跡

B区西



第2号竪穴住居跡完掘（東から）



第2号竪穴住居跡土層断面（東から）



第2号竪穴住居跡石囲炉検出状況（東から）



第2号竪穴住居跡石囲炉・周堤立ち割り（北から）

写真13 B区西第2号竪穴住居跡

B区西



第3号竪穴住居跡完掘（東から）



第3号竪穴住居跡土層断面（東から）



第3号竪穴住居跡地床炉検出状況（東から）



第3号竪穴住居跡地床炉立ち割り（北から）

写真14 B区西第3号竪穴住居跡

B区西



第5号土坑完掘（南から）



BII類

第5号土坑土層断面（西から）



第11号土坑完掘（西から）



BII類

第11号土坑土層断面（西から）

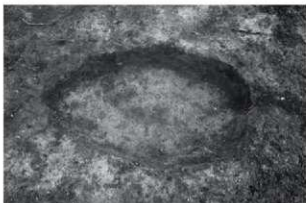


第2号土坑完掘（南から）



BII類

第2号土坑土層断面（南から）



第13号土坑完掘（北から）



BIII類

第13号土坑土層断面（南から）

写真15 B区西土坑（BII・BIII類）

B区西



第16号土坑完掘（北西から）



BIV類

第16号土坑土層断面（北西から）



第21号土坑完掘（北西から）



BIV類

第21号土坑土層断面（北から）

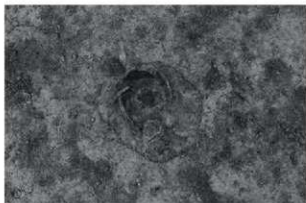


第8号土坑完掘（北西から）



CIV類

第8号土坑土層断面（東から）



第1号土器埋設遺構検出状況（西から）



第1号土器埋設遺構断ち割り（西から）

写真16 B区西土坑（BIV・CIV類）・土器埋設遺構

C区東



基本層序土層断面（南東から）



第3号土坑土層断面（南東から） BⅡ類



第5号土坑完掘（東から）



CIV類

第5号土坑土層断面（東から）



第1号集石遺構完掘（南から）



第1号集石遺構土層断面（南から）



第1号焼土跡土層断面（西から）



調査区東側遺物出土状況（東から）

写真17 C区東基本層序・土坑・焼土跡・集石遺構

A区

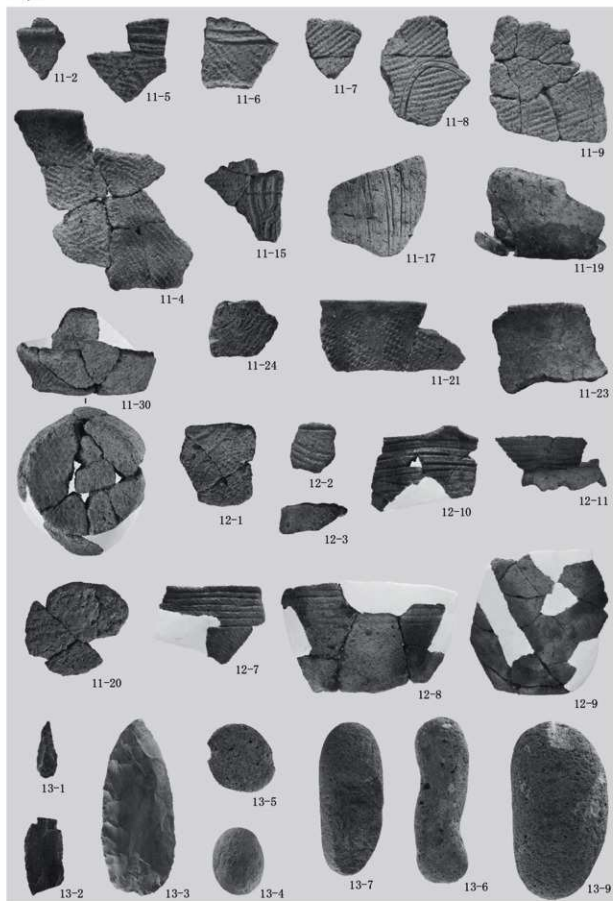


写真18 A区遺構外出土遺物

A・B区

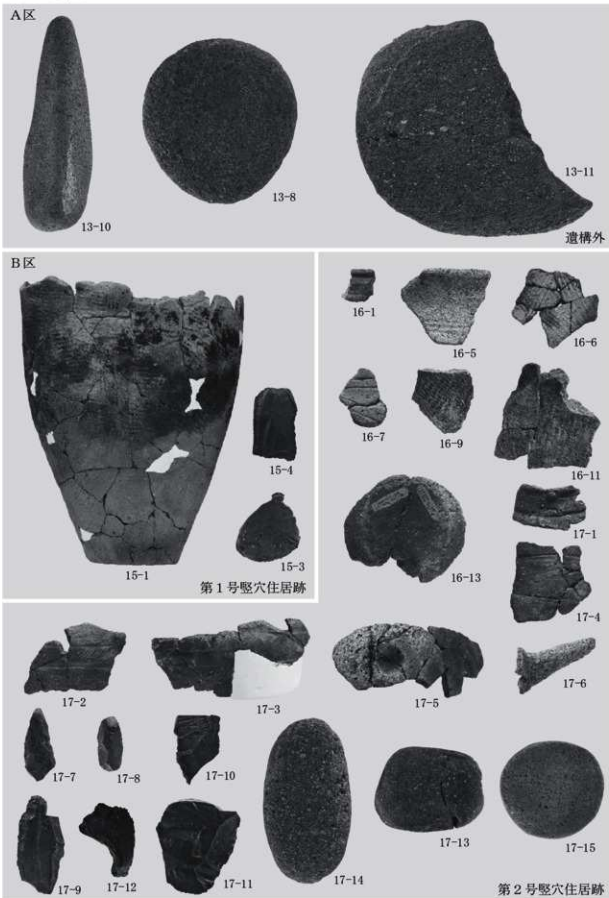


写真19 A区遺構外・B区竪穴住居跡出土遺物

B区

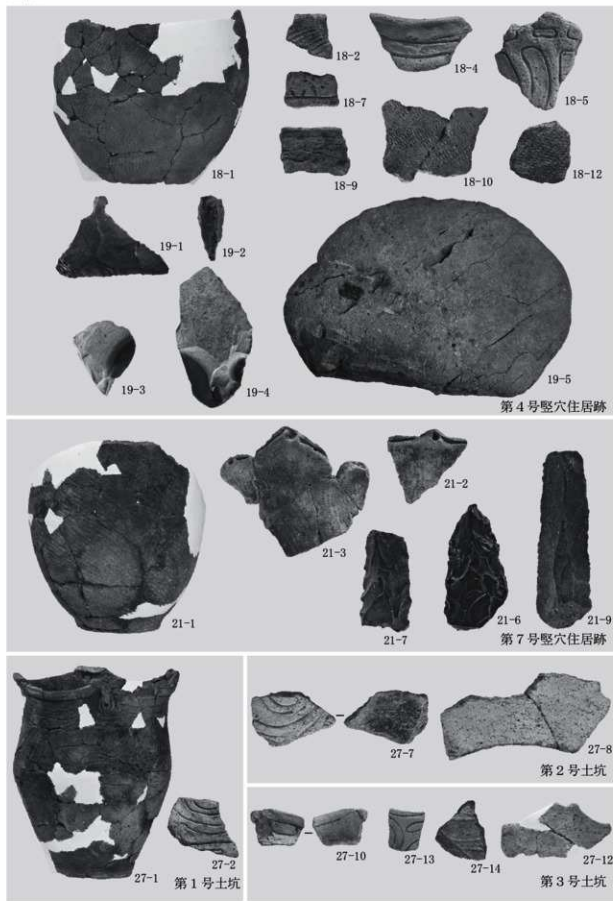


写真20 B区竖穴住居跡・土坑出土遺物

B区



写真21 B区土坑出土遗物

B区



写真22 B区土坑・土器埋設遺構・小ピット・遺構外出土遺物

B区

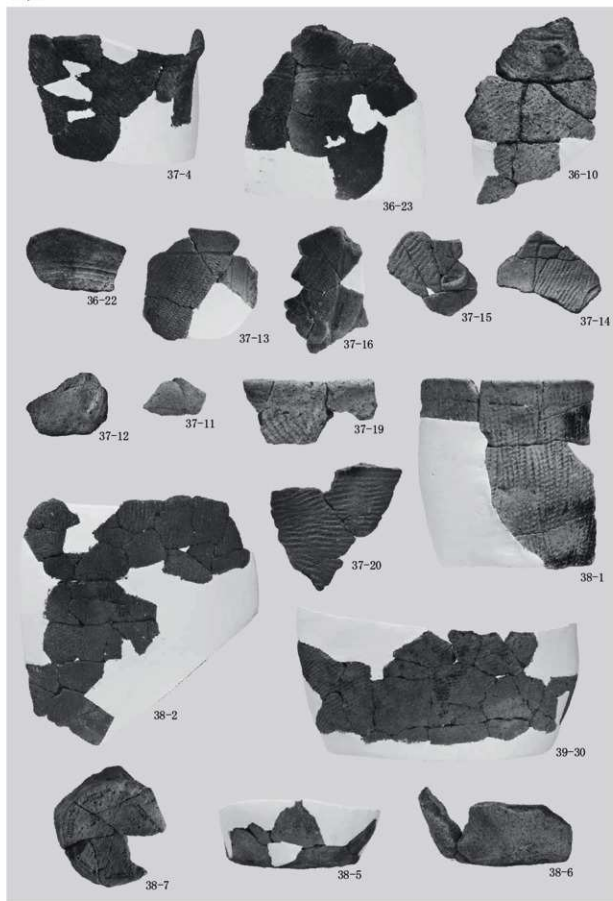


写真23 B区遺構外出土遺物(1)

B区

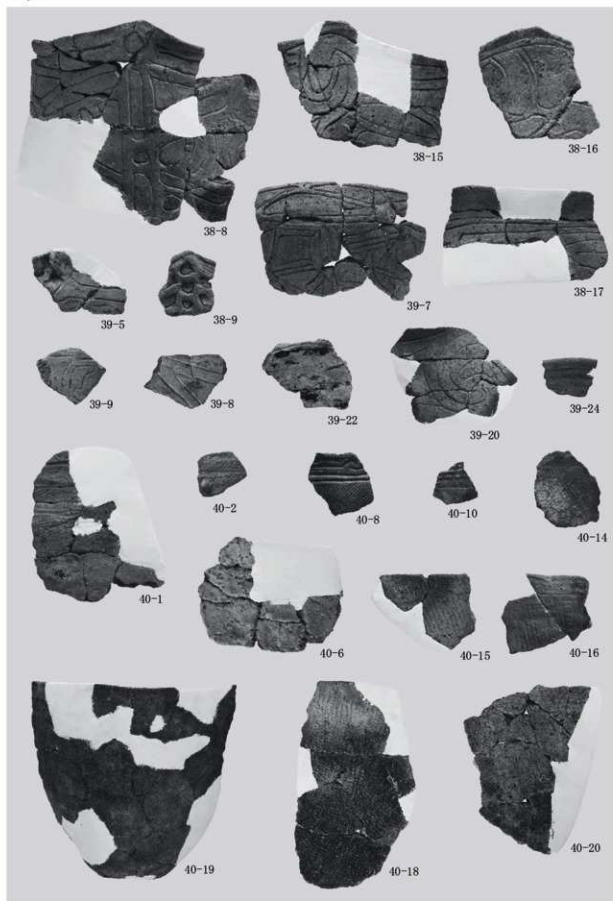


写真24 B区遺構外出土遺物(2)

B区

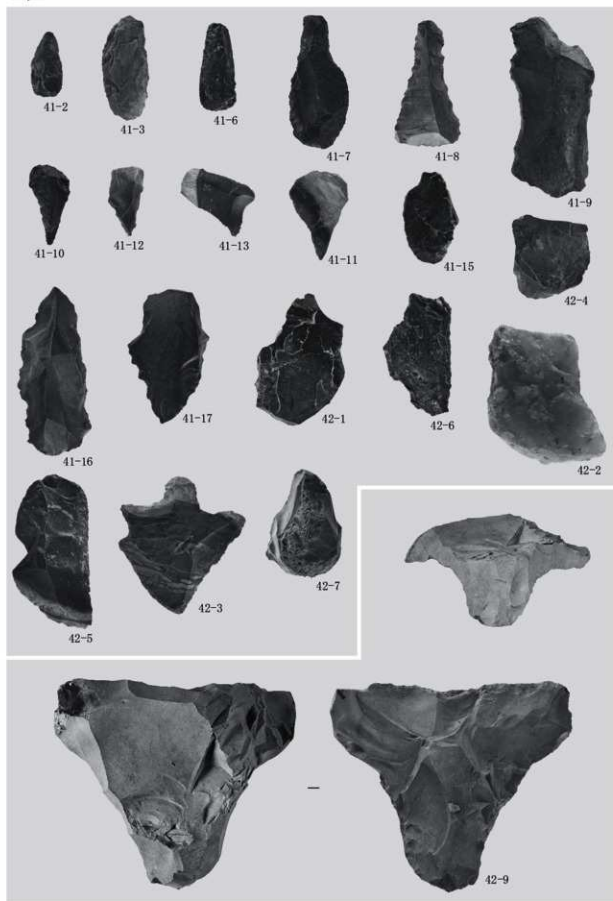


写真25 B区遺構外出土遺物(3)

B区

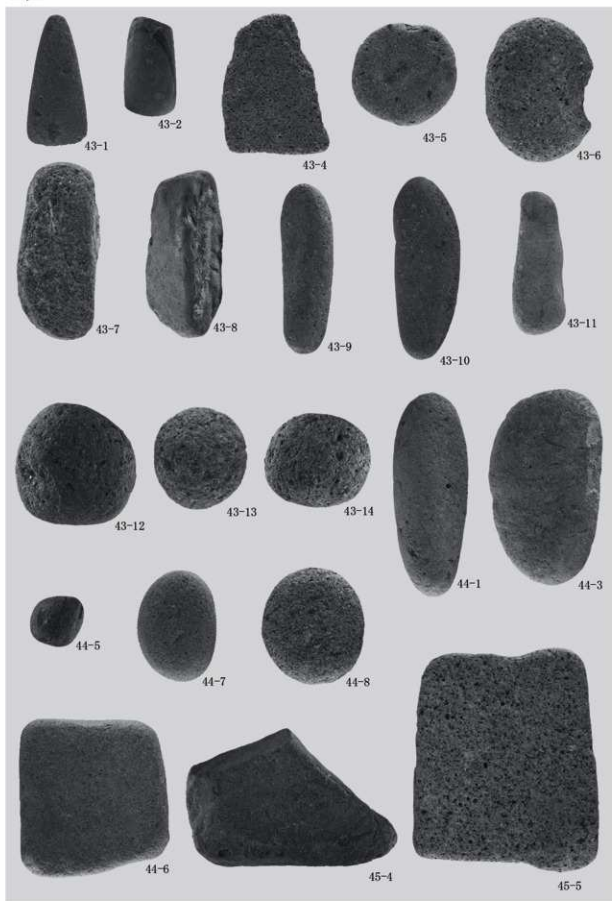


写真26 B区遺構外出土遺物(4)

B区西

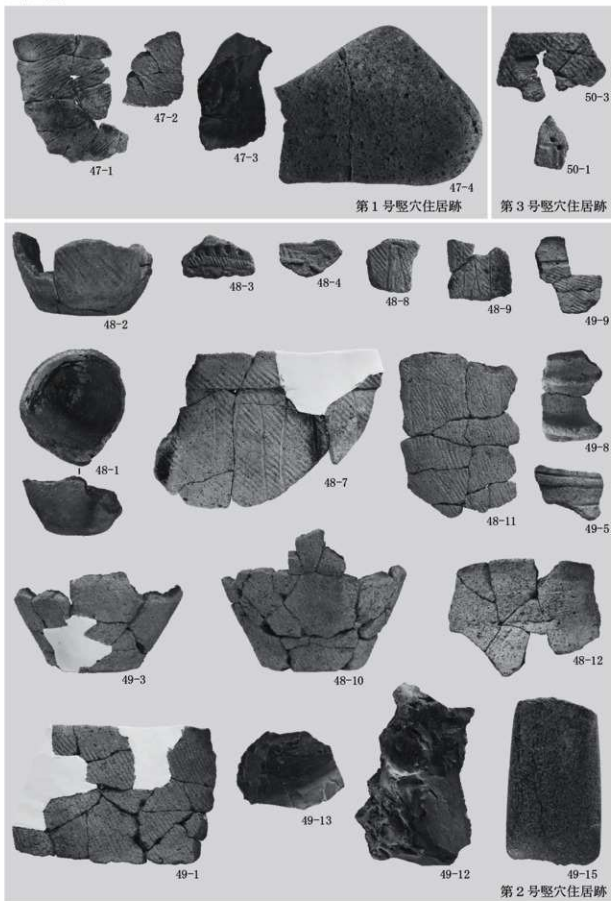


写真27 B区西竖穴住居跡出土遺物

B区西



写真28 B区西土坑・土器埋設遺構・遺構外出土遺物

C区東

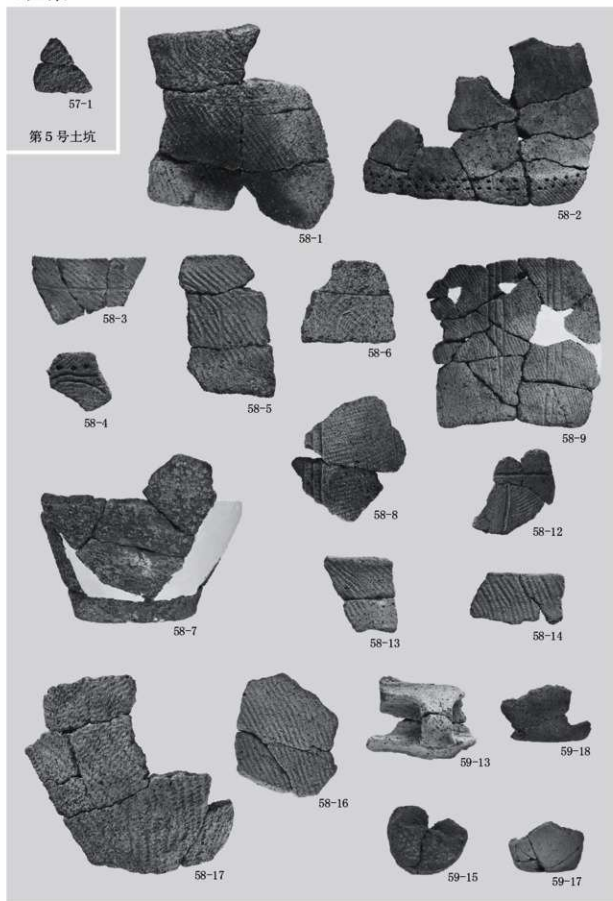


写真29 C区東土坑・遺構外出土遺物

C区東

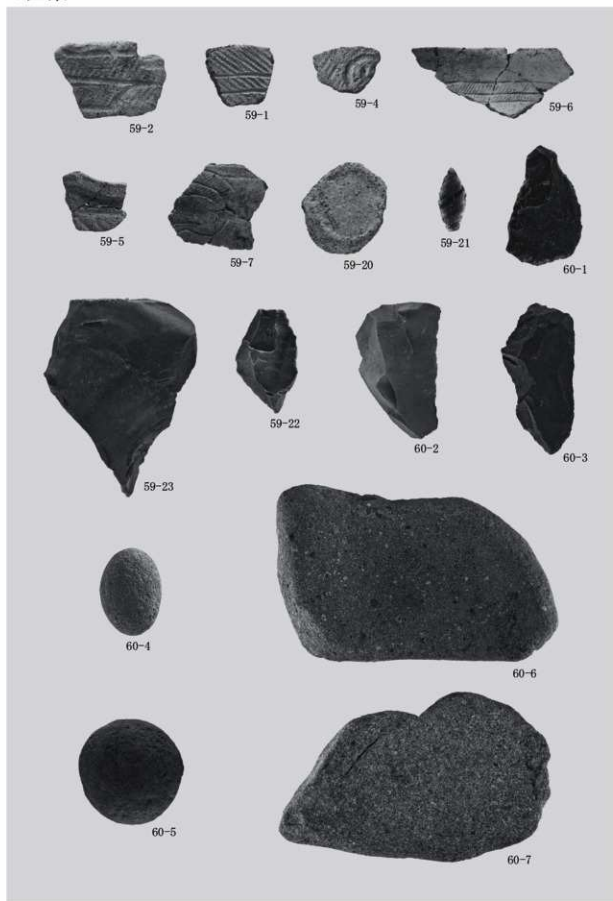


写真30 C区東遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおかわぞえかっこにいせきさん							
書名	大川添(2)遺跡Ⅲ							
副書名	津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第515集							
編著者名	新山隆男・最上法聖・小田川哲彦							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市新城市天田内152-15 TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	西暦2012年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系 (JGD2000)				
				北緯	東経			
おおくわそえかっこにいせき 大川添(2)遺跡	あおもりけん 青森県 なつねし 中津軽郡 にしやま 西目屋村 おおくわそえかっこにいせき 大字川原平 おおくわそえかっこにいせき 字大川添	02343	343019	40°	140°	20090901	1,500	津軽ダム建設 事業に伴う事 前調査
				31′	13″	～		
				18″	31″	20091030		
				40°	140°	20100608		
				31′	13″	～	6,300	
				28″	19″	20101112		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
大川添(2)遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	8軒	縄文土器・石器・ 石製品			
			土坑	66基				
			土器埋設遺構	2基				
			硬化面	2箇所				
			小ピット	142基				
			焼土跡	4基				
			集石遺構	1基				
要約	大川添(2)遺跡では、小規模な段丘を境に、上段（B区西）からは縄文時代前期末葉～中期後葉、下段（B区）からは縄文時代中期後葉～後期後葉にかけての竪穴住居跡が見つかった。集落自体は小規模であるが、河川（大沢川）の影響による土地形成に合わせて、竪穴住居跡を構築する時期に違いが見られる。土坑についても上段（B区西・C区東）は縄文時代中期後葉中心、下段（B区）は縄文時代後期前葉中心であり、構築時期に違いが見られる。							

青森県埋蔵文化財調査報告書第515集

大川添(2)遺跡Ⅲ

—津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2012年3月28日
発 行 青森県教育委員会
〒030-8540 青森市新町二丁目3-1
編 集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市新城市天田内152-15
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702
印 刷 株式会社 誠 工 社
〒030-0113 青森市第二問屋町三丁目3-18
TEL 017-729-1611 FAX 017-729-1188
